伯耆民諺記 巻二十 合綴

ル 4
4305

門 IV 4
號 4305
卷

目録

伯耆民諺記巻之一 一
國誌之部 二
風俗 三
國名 三
地理 四
郡号 四
米子城下之部 六
飯の山 八
當所寺院 八
社頭 九
大谷村川竹嶋渡海之事 九
皆生住士之事 二

伯耆民諺記巻之二 一三
倉吉懸之事 一四
古蹟打吹山之沙汰 一四
代々領主并尾州長源寺観福寺 木田八幡宮 一五
荒尾氏由緒之事 一五
越殿ノ事 一六
花町之事 一六
茶屋屋敷之事 一七
花宮小路之事 一七
當所寺院 一七
萬祥山大岳院 一七
金剛山勝入寺 一八
金祥山吉祥院 一八
打吹山長谷寺 一八
薬王山現光寺 一八
東光山明王院 一八
法界山大蓮寺 一八
法宗山本妙寺 一九
妙照山学仙寺 一九
八幡山隆泉寺 一九
近照山勝正寺 一九
遊園山妙寿寺 一九
社頭 一九
加茂大神宮 一九
高野山阿弥陀院之事并尾高古城主杉原
播磨守盛重寄進之事 一九
関所荒之事 一九
山田五郎兵衛尉倉吉住并穴鵜村荒査門
家傳之事 二一
古今國之守傳統記 二三
御當家譜傳略記（前） 二三

伯耆民諺記巻之三 二九
御當家譜傳略記（後） 二九
松平新太郎光政 二九
松平相模守光仲 二九
池田播磨守輝政 三〇
池田武蔵守利隆 三〇
池田忠雄 三一

汗入郡八代洲岸崩崖破之事 并 廿之三…地之事 三二
東照宮勧請因府久松山再建之事 三三
并 本所日光山之沙汰
當國郡御有制與諸臣事 三三
并 米子倉吉八橋松崎黒坂古城山号之事 三三
美濃萬歳初て當國出来之事 三四
并 美濃萬歳之事 并 西宅山観福寺之事
大田八幡宮之事 三四
并 白大吉古戦場長人手道行之事 三四
六郡蔵所 三五
改舟番所 并 浦状往来状之事 三五
紀国丸之事 三六
在目附 并 目代目附初て當國巡勤之事 三七
并 森巻庵之事
伯耆民談記巻之四 三八
國之土産 三八
河村郡 并 中津稿之事 三九
久米郡 并 吉田細工之事 三九
八橋郡 三九
汗入郡 四〇
會見郡 四〇
日野郡 四一
伯耆三石 四一
伯耆三柳 四一
伯耆雲雀 四一
米子竹内浜安風雅の事 四一
河村郡三朝温泉 并 智頭久間何某之事 四二
久米郡湯関温泉
并 弘法大師名ぐ芋の事 四二
古今鍛冶 并 鬼切丸の事 四三
國境 并 驛路行程之事 四五
因州嶋取より伯州米子迄之行程 四九
伯耆民談記巻之五 五二
國中川之事 五四
日野川 五四
淀江川 五四
今津川 五四
阿弥陀川 五四
御厨川 五四
逢坂川 五四
曽川 五四
黒川 五五
荒川 五五
加勢蛇川 五五
天神川 五五
化粧川 五五
橋津川 五五
國中山之事 五五
大山 船上山 美徳山 五五
毘沙山 五六
高麗山 五六
國中池之事 五六
東江池 五六
原池 五七
嶋池 五七
由良池 五七
赤松池 五七
伯耆郡郷諸邑之事 五八
河村郡 五八
久米郡 五九
八橋郡 六一
汗入郡 六二
會見郡 六三
日野郡 六五
大山寺領 六七
伯耆民談記巻之六 六八
神社仏閣之部 七〇
延喜式六社（伯耆之六社） 七一
一宮大明神 七一
鎮座東江之湖上御冠山之圖 七一
奉納勅額之事 七二
當社神相之沙汰 七三
五社鎮座之地尊号之事 七三
波々伎之神社 七三
志津大明神 七四
國坂之神社 七四
宗像之神社 七四
大神山之神社 七四
大山
本社智明神御舎 并 山之圖 七五
山号の沙汰 七六
下山大明神之事 七六
雲州富田月山之古城主尼子民部大輔晴久 七七
藝州吉田発向の時天狗山伏来て示霊瑞事 七七
宝永寅之地震の時有奇瑞御舎之事 七八
有富山天狗之事 但古書之沙汰 七九
自得軍台徳院殿山之法式慶長年中御定五ヶ條
之事 七九
山領之事 并 制與四三坊紀行 高并寺号の事 八〇
山の竹物 并 武義坊弁慶自讃之一通 八一
當山十二神の事 八二
會式之日國法山例制禁之事 八三
釋之玄賓僧都山居の沙汰 并 護石山法寧寺
の事 八三
伯耆民談記巻之七 八五
船上山 八八
辰子晴久乃南條中務少輔元忠再興之事 八八
後醍醐天皇皇居之跡 八九
本所三所權現之御舎 并 山之圖
美徳山 八九

山の沙汰并ニ番場之橋之事　八九
山傳の山焼之事　九二
奥之院と号する仙人窟の沙汰　九二
當山初開或説并杉結吉野國峰の沙汰　九三
神之倉の事　九三
山傳禁月毛馬の事　九三
堀出之佛の事　九三
諸堂并一山之圖
惣社大明神　九四
國分寺　九四
清和天皇勅願之事　九五
國造の傳　九五
爲須藤丹波守國造滅亡之事　九五
國造屋敷其他古跡の事　九六
國造舊傳今孫乃市鶴丸太夫家　/
并家人後藤平太夫の事　九六
國山八幡の事　九六
邑名の謂れの事　九六
佐々木建立の事　九七
末吉古城之事　九七
神宮寺　九七
國分寺萬葉の沙汰　九八
北野天神　九八
廣渡天神の事　九八
安樂寺　九八

伯耆民諺記巻之八　九[illegible]
大宮大明神　一〇一
市場邑之事　一〇一
岩倉城主小鴨左衛門尉元晴親兵同盟之一札
の事　一〇一
退休寺　一〇二
岩倉の城主箆津豊後守平敦忠[redacted]當山造営の事起
玄翁禅師の事　一〇二
宝物瑞寺の事并[redacted]泰安玉潤の事　一〇四
三所殺生石并華清寺の事　一〇四
慶樂寺七世梅天和尚の事并川村郡皇子立地藏
の事　一〇四
玄翁師須野殺生石ヲ導の事　一〇五
并三百年目莪山禅師勘当の事
惣持寺莪山五哲の事　一〇五
當山境内并堂塔の圖
解脱寺艾渴山号両日阿布縁　一〇五
米子本教寺の聖人圖寿院日要瑞夢の事　一〇六
自紀州亜大納言頼宣卿御簾中養珠院殿御寄
進の事　一〇八
當山精舎の事
大日寺　一〇八
南條伯耆國元続再興鎮守棟札の事　一〇八
大傳寺　一〇九
本朝三所九品の事　一〇九
大傳寺古今建立の事　一〇九

平氏悪七兵衛景清廟塔の事　一一〇
當家前羽林次将清源寺殿靈碑立の事　一一〇
伯耆民諺記巻之九　一一二
長傳寺　一一四
仙長於長御田安房草庵の事　一一四
長谷寺　一一四
祈晦山の事　一一五
長谷觀音　一一七
長樂寺　一一七
長谷部尾張守信連の事　一一七
不動の岳の事　一一八
~~勝入寺~~　一一八
勝入寺
蓮國院殿并代々太守靈廟建立之事　一一八
尾州長久手古戦場并同所古城の事　一一八
同所章照寺の沙汰　一二〇
同所将軍石の事　一二〇
同國岩崎古城主丹羽勘助落城の事　一二〇
轉法輪寺　一二一
小谷多兵衛尉常成の事　一二一
日吉津太神宮　一二二
八子山鹿瑞の事　一二二
山田八幡宮　一二三
山田出雲守直重の事　一二三
加茂皇太神宮　一二四

雷除守の事　一二五
清先の井の事　一二五
伯州三所の加茂の事　一二六
伯耆民諺記巻之十　一二八
久米八幡宮　一三〇
樗取大明神　一三〇
氏殿權現　一三〇
伊勢大神宮　一三〇
感應寺　一三二
中村伯耆守忠一廟牌之事　一三二
垂井服部殉死の事　一三二
妙興寺　一三三
横田内膳正村詮及死の事　一三三
飯の山合戦の事　一三三
村詮廟牌當院建立の事　一三六
総泉寺　一三六
総泉大師廟牌建立事　一三六
觀音寺　一三七
杉原播磨守盛重建立の事　一三七
本教寺　一三七
古引長門守吉種の事　一三八
靈光寺并ニ經久寺の事　一三八
伯耆民諺記巻之十一　一四〇
山名寺　一四二

小林寺

一四六

山名侍従伊豆守時氏建立の事 一四二
中村伊豆守再興の事 一四二
大岳院 一四二
中村伊豆守引前領八橋慶之寺而建寿院成菩提 一四二
竹嶋改号大岳院事 一四三
鉄守八幡号一夜屋形之事 一四三
三明寺織多号小麻之号 一四四
里見安房守忠義廟碑之事 一四四
楝観音之事 一四九
洞光寺 一四五
東満寺退轉の事 一四六
野一色頼母洞光寺再興之事 一四五
石佛山 一四六
石佛の沙汰 一四八
廣教院 一四七
倉吉華市并牛市河原の事 一四八
定光寺 一四九
什物 一五〇
地蔵院 一五一

伯耆民諺記巻之十二 一五二
曹源寺 一五五
鎮守三神奇瑞之事 一五五
放生川 一五七
古代世々の寄附の事 一五七
曹源寺清水 一五八

駄經寺 一五八
大佛堂古跡の事并弘徳の團子の事 一五九
櫻井柳右衛門并山井根之助相撲之事 一五九
清見寺 一六〇
王府山朝妻寺の号并妻木里の事 一六〇
楽々福大明神 一六一
四色の社事 一六一
孝霊天皇崩御鎮跡の事 一六一
鬼塚の事 一六一
生山八幡宮 一六一
紫瀧之事 一六一
稲倉大明神社 一六二
御笠山の事 一六二
高杉大明神之社 一六二
打合神事之事 一六二
馬場八幡宮 一六二
天満八幡宮 一六二
陰陽の松の事 一六二
天萬関の事 一六二
天門山の事并古城の事 一六三
天満宮旧事記の沙汰 一六三
佳吉大明神 一六三
忠頼卿詠の事 一六三
萬福寺 一六三
國主一札の事 一六三
景雲寺 一六四

弘法大師瑞夢の事 一六四
修験行蔵院 一六五
伊賀八幡宮の事 一六五
安養寺 一六五

伯耆民諺記巻之十三 一六七
古城古所之部 一六九
河村郡
羽衣石の城 一七〇
南條家代々興廢の事并佛閣修造の沙汰 一七〇
大永の乱崩天文の合戦の事 一七三
并二子の太刀の沙汰因州和納の里勘助の事 一七四
伯耆國毛利家に行し変心の事 一七八

伯耆民諺記巻之十四 一八一
伯耆守一度羽衣石敗北因州退散の事 一八三
元續因州より羽衣石家城へ帰入の事 一八五
元續橋津合戦之事 一八六
九郎左衛門尉元秋病死之事 一八六
吉川長府由表寄陣の事 一八八
吉川太馬亮長和田表退陣の事 一八九
羽柴筑前守久松を攻め直に羽衣石の後詰 一九〇
并ニ左房一鐘畑進発す
馬野山勢退散の事

伯耆民諺記巻之十五 一九四
馬野山之事 一九六
羽衣石城下既滅中原少輔之命之事 一九八
一族鷹匠寺法俗二寺の事 二〇一
并ニ高野山の沙汰 二〇一
宗勝入道虎熊と云ひし時鷹野の帰りに 二〇二
岩倉城に於て口論の沙汰 二〇二
羽衣石山の事并に山中の事 二〇三
羽衣石の事 二〇六

伯耆民諺記巻之十六 二〇七
天狗烏帽子岩の説 二〇九
并越前普門山慈眼寺縁起之沙汰 二〇九
鼻并地蔵の謂れ 二一一
并退休寺梅天禅師死罪の事 二一一
羽衣石老職の僭れの事 二一三
南條家紋之事 二一三
伯耆守宝大力の事并月見和歌の事 二一四
藝州南條躍りの事 二一四
高野宮の城 二一六
山田出雲守重直叛逆の事 二一六
高野宮夜討の事 二一六
并ニ信直之盛敗北して重直家城堤の城へ走る事 二一八

伯耆民諺記巻之十七 二二〇
田尻の城 二二二

因伯の諸将依変心吉川当国へ進発して諸城を攻る事 二二二
阿與字松之崎の城 二二三
小鹿谷山上越進下総か陣へ夜討に入る事 并ニ小森和泉方高滅亡の事 二二三
川口の城 二二四
城主山名刑部大輔変心より杉原播磨守頓て餘楯したる事 并ニ後鳥山の事 二二四
白石の城
吉川駿河守馬野山布陣の時吉川彦七当城に移る事 二二六
岩倉山の城
久米郡古城之事 二二七
岩倉山の城 二二七
岩倉城滅亡の事 二二八
南條元清亡命の事 二三二
伯耆民諺記巻之十八 二三五
作州大町村小櫻宇花素性の事 二三七
并安綱刀の事 二三七
岩倉山号の事 二三七
市場城 二三八
北城 二三八
金倉の城 二三八
國造石川の事 二三九
唯茯城 二四〇
草鉄山の城 二四〇
亀山の城 二四〇
茶磨山の城 二四一
茶磨山号并美田粟可濱の事 二四一
五月山崩の事 二四二
堤の城 二四三
山田八幡の事 二四五
倉吉の城 二四五
山名宗泉代の事 二四五
山名氏豊亡命の事 二四六
伯耆民諺記巻之十九 二四九
倉吉の城再興の事 二五一
山嶽并泮夕見井の事 二五三
田内城 二五三
小土産山城 二五四
里見屋敷 二五五
八橋郡古城の部 二五六
八橋の城 二五六
当城地理の事（但シ二番目あり） 二五六
伯耆民諺記巻之二十 二五九
八橋城地形の事 續ヤ 二六一
化粧川鏡井の事 二六一
條山城 二六二
由良城 二六三
妙見山城 二六三
秋里新左衛門戦跡書述の事 二六三
槙之城 二六五
念佛清水并に若狭茶屋の事 二六五
岩井垣城 二六五
細木原城 二六六
田中橋濱附記 二六七

伯耆民諺記総目録終

一

伯耆民談記　巻之一

4305
早稲田大學圖書
31.1.13

夏軒花書

伯耆民諺記巻之一

目録

國誌之部
風俗國號之事
地理郡號之事
米子城下之事
米子號之事
湊山累代之城主
飯山之事
府内神社佛閣
大谷村川竹島渡海之事
皆生士之事
城下之圖

門 ル4 號 4305 巻
早稲田大學圖書館 昭和31.1.13 藏書

伯耆民諺記巻之一

○風俗

韻會に曰上所化謂風下所效謂俗と言り然れは則ち風俗の所以爲風俗者將の將たる事著明也凡當國中古以來を察するに治乱不究興廢轉投擊するにいとまあらすされは縣郡史宰の輩地頭庄司の士に至る時にしたかひ分に應して或は城郭を築き又は館殿を構えて偶々一家を安んすれは一族まつたからず一郡穩なれは一郷囂し是皆戰國のありさまなり何そ君臣上下の化育ともしからんや時のおとろへ時の盛は唯是君子の恵る所にあらす或書にいはく爲人君謹其所好悪而君好之則臣爲之上行之則民從之と云々然るに今當家　池田の嫡流領してより以下風枝をならさす雨塊を動かさす政事顕然として民よくめくみになつく故に

山野に餘の粟あつて尭民の風情あり江海に餘の魚あつて
舜民の雅心あり峻徳惟明にして治敎休明也誠に上明にし
て下相和すとは如斯の時をや言つらん

○國名　古母來今伯耆

凡そ貌ある物一として名あらすと言事なし況んや於郷國
にをや名は躰をあらはすかりそめに号するにあらす或は
其土地山海の勢ひにしたかひ又は生産神詞の謗によつて
号する所なり抑此國の初母來と言後改めて伯耆の國と称
するなり母來の文字は蓋神詞諱質の直を以称し又伯耆の
文字は白龜出現の壽を以て号するとかや上古大倭境界未
洞雲伯一にして雲伯の分ちなし于時日嗣三十二代用明天
皇の御宇國を五畿七道に分ち及四十二代文武天皇に六十
六ヶ國に割配あり此時雲伯の差別あり所謂母來の文字神

詞によると言は神代の古八岐大蛇か爲稲田姫犠牲となる
時に姫恐怖して供坐を去り遁れて當國に来る然るを母是
を思慕ひて來を姫の曰く母來れるやと宣ふ是故を以て則
國の名とす風土記抄に曰手摩乳(テナツチ)足摩乳(アシナツチ)の姫稲田姫を八頭(ヤカシラ)
大蛇のまんとす故に遁れて山中に入于時母遲く來る姫の曰
來る哉と云々風土記に述る山中は則當國會見郡なり又伯耆
と後に改る事は蓋聞中古當國海中より白亀出現して今の
汗入郡に留る衆人是をあやしみて時の國守に告るに亀は
是長壽を保つ祝儀の物況や聖主賢君あるときは必出現す
る事和漢に其例不少とて終に是に依て伯耆と改るとかや
されは張衡か西京賦に擬紫貝持耆龜と言句もあれは白亀
を得て伯耆の國と言ふ事有故哉

○地理

此國は南に山を層ねて北は海を帯たり山深して土厚く山
南につきて西北に行故に山陰道と号するとかや或書に曰
く成務天皇始て郡國を定め郡郷を分ち給ふ時山陰を背面
と言なり山陰の名始めて爰に出ると云亦國を六郡に賦布
し村里七百有餘東西は因雲の二國并ぬ南は備後美作備中
三國に連る地形東西に長く郡て國中五穀豊饒にして衣帛
共に多し頗中の國なりとも言り二三の古書を按し取意の
大概を書ものなり

○郡号

河村(カハムラ)　久米(クメ)古は大米郡　八橋(ヤハセ)古は八幡郡　汗入(アセイリ)古は安合郡
會見(アイミ)古は逢見郡　日野　以上六郡也

○河村郡は國の東にして夫より連郡を六つに割定する事は
伯耆國と改号あるとき亀に依て六郡となせり是則亀甲六角
の義を以ての故なりとかや當郡村里川に連接し大る境地
なるに依て河村郡と称する也

○久米郡　古は大米郡と称すと言事は當郡に國府ありて上
古代々國造居住の郡なり當國の國造大祖を大米足尼(タルニ)石川
國造と言此大米居住の郡なるに依て遂に郡の名として大
米郡とそ云しとかや然を久米郡と言事を當郡初て其号先
に出たり故に久しき郡と言事に依り後世に至り大の字を
しりそけて久の字をたき今に久米郡と称するとかや
大米國造の傳旧事本記に曰波々伎(ハハキ)の國造志賀の高穴穂の
朝の御世牟邪志(ムサシ)の國造同祖兄多毛比の命児大米足尼國造
と定賜と言石川の傳は續日本紀に述るなり

○八橋郡　古は八幡郷と言然を八橋郡と称す事は遠神代の
昔天照大神出雲國へ神幸あるとき當郡今の加勢蛇川にし

て八頭の大蛇の女蛇友の垠の蛇出雲八重垣の浦にて素盞烏尊に退治せられし八頭の
大蛇か女蛇爰に来て妨をなすなりと云大蛇を加勢に頼んて出雲浦より誘
引して此川に到大神宮へ妨をなさんとす此時大神宮は此
川の辺なる高椥と言株木の所に御座あつて彼大蛇に向は
せ給ふて汝等能聞ヶ何程の妨をなすとも吾に及ヅ事有之哉今
退治せんは安けれとも畜生の身として妻をしたふ友を思
ふ深き志の程のやさしけれは一命を助く自今後恨を晴す
へしとて忝くも一首の御製を下さる

妻恩ふ友を頼みに命かけ八橋を越て来る加勢蛇

此御神詠より以下此渡りを加勢蛇川と称すなり亦八橋を
越て来る加勢蛇とは出雲八重垣の浦より此川まて上古名
ある橋八つあり此八つ橋を越て友蛇加勢に来と言事を詠
し給へりとかや此神詠を當國前の領主佐々木民部大輔尼

子晴久感寿不斜して八橋を越てと云ふ義に依り郡名を改
めて八橋郡となす天文二十二年癸丑九月晴久弁上山再興
ある此時より初て八橋郡と書改るとかや
加勢蛇川は伊勢村にある河を云又伊勢川とも言なり此
地に伊勢大神宮御舎有り鎮座の謂れ社閣巻に誌す故爰
に略之

汗入郡　古安合郡と言フ然るを汗入郡と称事はけたしきく
光仁天皇の御宇内裏へ諸國より夫役を上ることと有て當國
よりも人夫を皇都へ捧るに此郡或里の女老夫にかはり禁裏
へ其役を成しに行ツ然るに此女貌容他に勝れて叡慮にかな
ひ奉り終に皇后となる其故にや此郡村の夫役其後相止ム此時
彼女歌を讀詠して上る

月日よりなを弥増の詔りかすの人夫も汗を入ぬる

此詠歌により後世に至て郡名を改め今汗入郡と称す又彼
皇女の里は勅あつて妻木の里となつく今は六木村と言つ

會見郡　當郡は神代の昔稲田姫出雲八重垣八頭大蛇か為
に犠牲となるにより遁て此國へ入于時母是を思慕して追
来るに此郡にて初めて相見る然るに依テ此事起を以て郡名
となし會見郡と号するとかや

日野郡　當郡は國の西端なり然るにより日の入る郡と言
訓を以て則日野郡と号するなり或人曰日野を初鍐野と書く
然るに貞和年中に日野中将當國へ謫せられ當郡の郷阿布(アヒ)
縁に住する事久し此時世の人是を日野殿と称するに郡名
同しきに依り終に日野郡と改むともいふなり

米子城下
會見郡勝田の庄にあり當所竹木薪明油紙等専ら出雲隠岐

両國より潤澤す柴薪亦近郷より出る魚品所にあり生綿所
産の一なり又隠州より色々柱木多く渡して普請木用自在
所なり今城下なり本丸を湊山久米の城と云二の丸を丹膳
丸と云此所の門を今水出の門と称す天守は五重にして三重の
櫓あり屏覆なり三重にして三間をひらく大手は六百間に
あまり堀は二重にして其間に七町連綿たり市町は廓内に
なき寺院は濱邊に甍をならぶ或説に當城主は尾高の城轉
して此地にうつす又倉吉打吹山の城を引ともいふ然るに依
り此城を久米の城ともいふなり

米子は古繞なる人家の郷にして今の西町より上の方町並
なり　小鷹町より岩倉町は大なる澤なり灘町辺は皆海上な
りと云つ然を弘治永禄の比より次第に町数も多くなりて其
後伯耆一城の府となり土地繁花にして今は漸二十町余り

に及ぶとかや此地を米子と称する事は古へ濱の目の粟嶋村
に一人の長者あり其子當所に住して富める事又に劣され
とも一子といふものなくして是を深くかなしみ神明佛陀
に祈誓すといへとも更に其霊瑞もなく徒らに春秋を移す
事久し然るに此者齢八拾八歳にして一子を生す此子成長
して後子孫盛んに住しける郷なるにより世の人号して米
子と諺に言けるか終には誠の号と成て今米子とは称すたよ
り彼長者の子を伯耆と言ひしとかや今加茂の隣屋敷其人
の屋敷なりと言傳えたり又粟嶋村の古長者住し跡を今に
長者原とて大なる原あり昔時長者も住ける繁花の地にあり
免にや今に粟嶋千軒と言郷談も残るなり
當所湊山の城は天正年中吉川侍従駿河守元春築くところ
の城なり息元長及廣家領して古引長門守吉種代官として

在城す其後廣家他郷を領するにより関備前守祐諸次に加
藤左近太夫貞泰居城す・慶長六年中村伯耆守忠一當國を
領して當城に居す元和三年松平新太郎光政寛永九年當家
の領となりて長臣荒尾但馬成利當城を領して以来子孫代
々城主たり成利法名
顯功院殿儀山劉節居士
當城古戦之事古城の巻にしるす故爰に略す但し天正前頃
古者飯の山本城となし湊山はとりでにして城はなしと見
えたり山名治部生害せしは飯の山の城にての事なるへし

飯の山

飯の山は今城中にして湊山のわきに連なる山を云なり湊
山飯の山感應寺山とて三嶺ならひ聳ゆ但し感應寺山は谿
間に海をさしはさむ昔は湊山に城なくして飯の山に小城

ありて今に石壁残る中村伯耆守湊山在城の時までは屋敷
あり臣の横田内膳か息主馬亮居す然るに主馬亮は慶長九
年臘月に伯耆國の為に亡命す此時屋敷も焼失して今は跡
を餘すのみなり

當所寺院

禪宗

大龍山總泉寺　當山の沙汰は社閣の巻に記す
當山は當國先の大守中村伯耆守忠一母清心總泉大姉の菩提
所として慶長年中建立有り開山棟室大和尚今僧の録所な
り本山能州諸岳山総持寺直末なり今山領二十石
日下山瑞仙寺　万壽山安國寺　寛龍山法藏寺
月照山桂住寺　要津山法城寺　昌岳山福巌院

黄檗宗

祥光山了春寺　今領荒尾氏菩提所なり　山領八十石
大亀山清洞寺　本源寺

眞言宗

海龍山吉祥院　領主荒尾氏祈願所なり
金寶山覺證院

淨土宗

見龍山心光寺　珠慶山涼善寺　寶壽山光西寺
獨妙山超勝寺　近遠山称名寺

法花宗

常住山感應寺　當山の事は委しくは社閣の巻に記す米子前の
城主古引長門守吉種菩提寺なり前は淨昌寺と号す山領
普平山妙興寺　當寺は横田内膳正村詮位牌所なり委は社
閣巻に記す

久遠山實成寺　本榮山妙善寺

真宗

専念山萬福寺　専壽山西念寺

都て二十四ヶ寺

社頭

勝田大明神　鎮座社領七石五斗壱升

祭神一座尊号

紀大明神　社領四石七斗貳合七勺

祭神二座御祖也尊号玉依子玉依姫と称す

加茂宮大神宮　社領四石七升貳合七勺

宇氣大明神　一名辯天　社領四石七升貳合七勺

此外府中宮数都而拾貳社

大谷村川竹嶋渡海之事

大谷村河両家名米子住居の者にして代々名有町人たり子孫今町年寄役を勤む此両家竹嶋渡海免許を蒙る事は當國前太守中村伯耆守忠一慶長十四年に卒去ありて嗣なきゆへ跡絶断す其後元和二年まで國主なくして御預となり御上代年々武都より来番して當城に居し伯州を鎮護ある元和二年阿部四郎五郎在番あり此時両家竹嶋渡海の事を希ふ然るに翌年松平新太郎光政卿當國を管領して入部あるにより両人又是を願ふ所光政直に武都に告て是を免され其より竹嶋へ押渡り海獵をなす其後毎年渡海怠たらす然るに元禄五申のとし渡海する所に唐人群居して海獵をなす両氏是を制すといへとも更に聞入れすそれのみならす既に危難に及はんとするにより両氏無念なから帰帆す又翌酉年渡海するに唐人数多渡り家屋をまうけてかいれふ

きなすにより両氏謀をなし唐人二人搦にし召連て帰帆し同年四月廿七日未の下刻米子に着岸して難なく大谷九右衛門宅に唐人を入置其旨言上に及ふ清源公清綱聞召し大谷村川并に唐人を鳥取へ召寄給ふ加納郷右衛門尾関忠兵衛両人仰に依て彼者共を召連参り御吟味の上東都へ言上し給ふ朝鮮國よりも使をもつて彼嶋の事種々訴訟しけるゆへ彼島をは朝鮮に附られ大谷村川渡海停止の義仰出されたり是より退轉して今に至て島渡りの者なし竹嶋とは日本を離るゝ事幽遠にして朝鮮には程ちかし渡嶋の者三四月の頃先つ隱岐國へ渡り強き南風を得て纜を解き押渡る嶋は隱岐より乾に當つて行程百里計朝鮮へは程近く彼國の湊釜山の浦は其間十八里夜に至れは彼嶋に燃す火の光り慥に見ゆるとかや夏間は彼島に在て海獵し秋に至て厳しき北風に乗して帰帆す渡海のものゝ行齢を限り三拾を越るものは海上の風波を凌ぐ事かたしとなり島の形ち三つにわかれ山嶽そひへ境内廣からす人民居せす大竹喬木茂り盛にして諸鳥禽獣多く魚鼈貝類は素より礒邉へ充満して産物多き島なりとかや甘露瀧あり并に異なる泉ありと言へり又此嶋に生する猫尾の形惣して短く曲れるなり今に至て尾の短く曲れるは世の人竹嶋猫と称するなり又鮑極て大きく是を串鮑にするに其好味なることたくひなき所謂鮑を得る事夕に岸の辺に竹を挿て海中に沈置朝に是を浮れは蚫蛤の竹の枝葉につく事生る木の實の如し其外種々の産物伯因の両國は言にたよはす普く日本の利潤なりしに退轉に及ふ事惜むにあまりあり

皆生住士之事

皆生士は元来出雲の國主堀尾山城守忠晴の家人也寛永十
年九月廿日山城守三十五歳にして卒去す嗣子なきに依て
家断絶す是に依て家中の諸士各他國に分散しける中にも
此士等は米子に来り領主荒尾但馬成利の遊客と爲り城下
に住する事日久し但馬是を憐み興禪公へ懇望して領分の
於傍村田地を割與し皆生村に差置とかや今に子孫累代居
住する故に世の人皆生士と称するなり國の政事は米子の
役所より告しむ右の士都て七人あり其内三刀谷小原二人は
中頃より近郷の四日市に住しける故に今皆生に住する所
樋口服部小杉荒木渡邊五人なり荒木は中村忠一の族士な
り中村家断絶の後浪廢し年久しく此地に止る但馬より七
士へ闕田割與のとき各其前出雲に於て食地の高にたおて
其分に應し配賦するにより田地の下ヶ數些の多少あつて不同

とかや四日市に住するは安養寺尼寺なるに依り強盗を恐
あるをもつて二士をして守護せしむる故なり皆生五人の
内服部は罪ありて出奔今は四人なり又樋口を座上とせり
又皆生の近郷長井市郎右衛門と云ふ士是は讃岐の浪人に
て元禄年中より住し自分と田地を集め食地となして二代
に至れり然れとも皆生の並には異なるとかや

伯耆民諺記 巻之一 終

伯耆民諺記巻之二

目録

倉吉懸之事
古城打吹山之沙汰
代々領主並尾州長源寺観福寺木田八幡宮荒尾氏由緒之事
古城丸郭之事
越殿之事
花町之事
茶屋屋敷之事
花宮小路之事
懸内神社佛閣之事
高野山阿弥陀院之事并尾高古城主杉原播磨守盛重寄進之事

關所藏之事
山田五郎兵衛尉倉吉住并穴鴨村菽右衛門家傳之事
古今國之守將統記
御當家譜傳略記前

伯耆民諺記巻之二

倉吉

久米郡灘郷にあり今城なくして麓に屋敷をたて代々領主殿なり古城の号を打吹城と云是則當山名也蓋聞此山打吹山と称す事は上古天僊ありて郷夫へ契を結ひ二子を誕す然りといへとも遂に又天上す時に二子歎之て此嶺に登り再招の為祭典を供養し鐘鼓管籥の樂器を列ね大に音藝をおこし鼓吹をなせし山なるにより此事起きを以て打吹山と号すとかや

天女臨降之沙汰古城に誌す當城古城羽衣石を述る所に申しるす故に爰に略畢

當城泯滅慶長五年石田御退治之時羽衣石の城と一時に亡燒す但天守は其さき天正年中吉川元春湊山に移すとき今

湊山天守是なりと云是故にや米子を久米城と称すなり領
主の屋敷は漸懸の中央にして左右に士中連綿し其外面に
市町をたき寺院は郭外に群立す地形東西に延南北にせま
る後は秀嶺層周にして前は広濶たる田堵なり古山名左衛
門督師義及ひ氏之在城の時は大に所々繁花たりしに山名
衰へて後年々に衰微し又は戦国のために亡焼して弘治永
禄の頃より漸く人家三百餘村里の如し然るを天正十年近
郷諸城滅して所々の工商こゝに来集し家屋を造り町を並
連す今の岩倉町此時に建とかや其後慶長六年中村伯耆守
此国を領し其身は米子に在城して臣等是に住す然るによ
り又所々繁花して年々人家も弥増今は漸く二千軒に近く
して町も二十町に及ひ寛永九年当家因伯の大守となり給
ふ此とき長臣荒尾前志摩嵩就此地を領す夫よりして代々

子孫領主たり其前当所は今備前の長臣伊木長門領にして
則今の屋敷に住す但し居ること十六年今の領主荒尾家嵩
就より以下累代師を此地に遣打吹山長谷寺の中に葬世々
の廟塔を建菩提寺は透関山満正寺と号す因州菩提寺瑞松
山景福寺の末なり
嵩就法名
透関院殿陳翁祐心居士
尾州長源寺観福寺木田八幡宮荒尾家由緒之事
尾州智多郡横須賀村に祥雲山長源寺といふ小禅林有今本末
孫末都て百ケ寺の本山なり大祖荒尾美作守善次尾州居住
の時此長源寺へ三貫の寺領を寄附あり又信長の朱印善次
以手形寺領百貫を寄せられし證札朱印黒印あり然るに慶
長五年石田治部少輔三成作乱之時九鬼大隅守智多郡に渡

り長源寺を放火す此とき仲の印札等悉く焼亡して其後印札を不受して終に無縁の寺となれり然れとも其時住持右印札之旨又は代々の由緒過去帳に書しるし後住に残してより今に傳来す歳月漸現住まて十五世に至るとかや今過去帳にある所荒尾家の法名美作守善次

法性院殿前作州大守通菴道圓居士

天正六戊寅十二月十三日　行年八十三　道号閑齋

圓寂院心岳道居士

弘治二年丙辰九月廿二日　俗名不分明

小太郎善久法号

無外宗本居士

元亀三壬申十二月廿二日

右三牌を建つ此外荒尾家族及法号又　信輝卿諸士二十人余

法名過去帳にしるす

同郡木田村に両宅山観福寺と号す真言宗あり　信輝卿木田在城之時此寺池田荒尾の祈願所にて寄附什物代々の記録もありしか戦國の為に焼亡して今何の書たる物もなし昔の祈願所と傳来するのみなり此観福寺は横須賀村若宮八幡木田村八幡宮同邑の高倉社有村懸の社以上四社の別當なり高倉懸の両社は木田有村両村の鎮守の神社なり又木田村八幡宮は池田荒尾木田に在城の時の産土の神なるにより尊敬甚等閑ならさると云木田の古城は八幡の社地なり北に當って山續きにあり八幡の社地境内東西六十間南北八十間なり

當所古城折吹山二の丸を備前丸と云羽衣石の城主南條豊後守入道宗勝弟同備前守元信居す然るに依て称とかや三

を越中丸と云なり豊後守臣山田越中居せし丸あとなり麓の山を元清山と云此所に小鴨左衛門元清羽衣石の隊長として居す依今山の号となして尓称すとなり
都て當城の合戦古城打吹の城を述る故に爰に略

越殿の事

當所越中町と言っの裏に境地方三百歩余りにも見ゆ小き松林あつて今諸宗の廟所となる是を越殿と称す天正の昔羽衣石領の時南條臣山田越中か居せし殿跡の地なりとかや越中在居の時郷民号して此地を越殿と称す夫より遂に字して今に尓称すなり然ゝを俗あやまつて是を庚申堂と言っ又前に續ける越中町は則山田か領せし所なるゆへ後人称して尓称するなり

花町之事

當所にて花町と云大市毎年一度夏四月にあり自他の衆民大に集て牛馬轉し求むる市なり是を号して花町といふなり蓋し此花市は田内邑廣教寺住昔隆盛の日よりして是をはしむとかや然れは古よりの例なり此事つまひらかに社閣巻に述るゆへに爰に略す

茶屋家鋪之事

中町會所の小路東の隅の屋敷を号するなり古此所に茶屋何某と云ふ富る町人居住す然るに此者家衰へて貞享の頃に終に屋敷に離れて傍處に蟄居す程なく亡命し永く茶屋号をたつ是を茶屋屋敷と言とそ蓋聞當國前國主中村伯耆守其後備前代及當家に至り代々此者巡見の御止宿をなす其外公務をなす事あり是に依て世々の領主是を称し給ひて町並諸役を免許あり然るにより時の人民御茶屋と謂ふ

とかやされは盛衰は古今同くして今は茶屋とい小号を知
る人稀なり然れとも屋敷号は残つて今に茶屋屋敷と称す
るなり今彼屋敷を五六家に別つて近年者共居すにより諸
役も增役にして外並の如くなり

花宮小路

座頭町の西組倉吉傍端の小町なり此所を花宮小路と称す
何様故有氣なる号なり然れともさして謂れなし古へ此所
に神の小社あつて花宮と言ふ巫居住す然るにより後人号し
て然か称するとかや今は小社もなかりけり

當所寺院

禅宗

萬祥山大岳院　當院沙汰社閣の巻にしるす
當所前領主中村伊豆守建立其前當寺は八橋に在て慶久寺

と号す境内方地平四十間廻り土手にて古堀あり山領十石
領主荒尾氏寄附

金剛山勝入寺　當寺の沙汰社閣の巻にしるす
當所前領主今備前虫明主伊木長門大祖建立なり境内山林
田畠等内城三分城の内領主代々除地寄せらる

金祥山吉祥院　此寺初は打吹山の麓成ハ山の端にあり然る
を天正年中に今の所に移す古寺の跡を喜心か谷と云小閑
山月耕道譽和尚草創は永享二年定光寺末なり

透関山満正寺
領主荒尾美作守秀就建立て當家の菩提寺と為す山領五十
石

天台宗

打吹山長谷寺　當山沙汰社閣巻にしるす

堂塔代々國守造營なり當山に名高靈瑞の觀音あり又寺内
荒尾家累代の廟塔あり本山因府唯識院山領八石七斗三升
四合

藥王山現光寺
當寺に兒藥師と云ふ靈瑞の如來あり又近年元三大師をたく
此寺地境地田中にあり依て世人田中藥師と称す開山權大僧
都圓海法印慶安年中建立なり

眞言宗

東光山明王院　院領
領主荒尾氏の祈願所なり則當家前志摩嵩就寛永年中に是
をたつ本山高野山西南院開山教清上人

淨土宗

法界山大蓮寺　隨錄山光明寺　眞如山誓願寺

法華宗

法榮山本妙寺
當寺初開地折吹山の麓にて永祿元年に建其後天正年中に
今の地に移ス古地は武士屋敷となりつく近代安富何某居す開
山は本覺院日詮今學仙寺末也古本山は備州吉か原なり然
を學仙寺四代住日通聖人の時故有て吉か原を離れ學仙寺
末寺となる

妙照山學仙寺
當寺は妙照院と云修験の開基なり近代聖人寺となる皇都
本國寺直末なり

八幡山隆泉寺

眞宗

近路山膳正寺

遊園山妙舜寺
古号正福寺と言長瀬村正福寺の末なり然に近年妙舜院の牌を建る依て改妙舜寺と号し西本願寺末となる
已上都て十五寺

○社　頭

加茂宮大神宮　當社の事委しくは社閣の巻に記す
社地神坂又山は本所の号を移して二葉山と称す社職吉田法躬下禰宜舟越何某又隠徳太平記に述る夕顔の井といふも當社坂下にある井の事なり今是を清先の井と号するなり

荒神
社地を荒神町と云祭神一座

○高野路之事

此寺は高野山の大衆阿弥陀の旅閣にして所は新町に建つ

草創は天正年中開檀は毛利の幕下會見郡尾高和泉山の城主杉原播磨守盛重か寄附なり然るにより代々の領主地役を免許す今に阿弥陀院毎年白露の頃未ッ御影を諸檀へ配賦し此時當院に居留す是往昔よりしての定例なり古は看住を置て法經たへす寺又美々敷高閣なりしに盛重滅して後大に衰え又は火難しは〳〵あつて今は漸く草堂にひとしき庵にて平日僧も置さるにより檀中として護之て修補をなす本山の達用とかや近年福岡屋助右衛門と云ものか是を守て豫め事の知用を達するなり則助右衛門今公辺の地主に阿弥陀院より立置なり今の寺中表口七間裏行十三間也古は誓願寺境より寿阿弥陀院小路と云所まで寺場なりと傳ふ後世に至り大にたとろへ今漸く七間と減境す寿阿弥陀小路と言は妙舜寺西の屋敷場にある径道の称なり昔此所

に壽阿弥と言ふもの住するに依り字に云ふ
阿弥陀院は高野西光院谷にたちてなり杉原寄進し此阿弥
陀院又南條旦那も同院なり西家代々の牌名は高野に建つ然
るに中頃元禄年中阿弥陀院無住となるによるか又仔細あ
るかして東住院下向あり此間年月暫なり其後又阿弥陀院
来て今無倦怠當院下向あり國中諸村郷郷普ねく檀家にし
て其数多しとかや

關所藏之事

今沖田屋敷後の山の端にあり方六尺程の藏なり當國前太
守中村伯耆守臣依藤半右衛門尉又伯耆守従弟中村伊豆守
此両氏の關所道具なり年々修覆町年寄共より是を成し藏の
關鎖の事も年寄共知てかぎをあづかる伊藤は則此屋敷に
居す伯耆守死後邪政あつて将軍ゆるし給はず生害に及ぶ

又伊豆守は伯耆守身内にして暫く倉吉を領して其身は武都に
つとめしか如何なる故にや駿州清見寺に走り入道す其後
生死知れざるに依て菩提寺大岳院に靈牌を建つ右之次第に
より當所の屋敷關所となり半右衛門關所物と同しく一つ
の土藏に歛むるとかや其時の記録元禄年中當所火難の砌
燒亡して古帳面なし今ある所は只伊藤半右衛門中村伊豆
守両氏の關所ものとまて誌せり又半右衛門關所の時同役
河毛備後是も同時に生害して關所となる河毛は松崎を領
して居す依て關所藏松崎にたつ両所關所の検使は山田五
郎五衛尉なりと傳来す前には巡見の時藏改も有けるか近
代の巡見は其義もなかりけり又關所藏日野郡黒坂に建つ是
は黒坂古城主鐘山に居せし日野又三郎平義恭同三郎義行
なりと言ふ其事委しきは黒坂を言ふ所にのぶ依て爰に略

伊藤河毛罪を蒙りし事異説多く又古老語は孫治郎作の小西の事より起て終に両士生害して家財闕所となると云ふ然れとも其沙汰一二ならさるに依て是を略

◎山田五郎兵衛尉倉吉住之事
并ニ　穴鴨村茂右衛門家傳

慶長十四年前太守中村伯耆守忠一湊山の城に卒して續なきゆへ跡を絕てより元和二年まて國主なし依て武都より御上代米子城へ在居あり當所には御代官をさし置る然るに慶長十九年冬大坂作乱元和元年夏終に落城して大將秀頼生害有及宗徒群臣或は戰死し又は自殺して凶徒一時に悉く泯滅に帰すよつて殘黨又は落人浪客の族御穿敗のため諸國へ群將を指むけらる其頃當所御代官として山田五郎兵衛尉居せらるに依共に蒙　勅命是を終るとかや又

穴鴨村に茂右衛門といふ黎民あり家名は安田と号す落人御敗の時山田下知に依て河村山中の事惣して彼か家に支度せしめらる此時安田庄三郎といひていまた幼年なり然るに依母家事を行ふ足に依て老母に下知状あり其一輪今に所持す大祖安田綱右衛門と言て其前より此郷に住して今の茂右衛門迄居る事三十七代の旧民なりとかや漸十代の前まて代々人の知る郷士なり然るに末に至り至て家たとろへいつしか郷士の格を失て其号を傳ふるのみなり此綱右衛門は元弘年中の者にして右和又太郎妹聟也家傳記に記す

一、彼か家に一ツの文庫硯あり紋に牡丹の花を蒔繪にす綱右衛門妻奈和の家より持来る文庫なりしと傳へて代々家族珍重す然るに頃日の年家屋火難有て此時文庫硯焼亡す今はなし然れとも火難も近年の事なるゆへ是を知る人今に

多しとかや今此家鉄山爐を家事とす是全當時よりの事に
あらす四代前の祖に今大老家荒尾前の志州嵩就故あつて
是を許す夫より今に代々間断なく山爐を許さる、なり
安田家譜筆書の文に曰元弘建武の頃伯州河村郡穴鴨に安
田綱右衛門と云し者あり奈和又太郎長年妹聟として代
代穴鴨村に住して郷士なり
後醍醐天皇船上に臨幸あつて諸國の勇士を召給ふに依て
早速に馳参して軍忠を致す其後綱右衛門三男あり長年に
随て京都の軍にいて戦功あり長年討死と共に勢田の手に
て戦死す従来綱右衛門は伯作の間に住して漸々威を逞す其
頃より天下瓜の如くに別れて氷の如く解て國郡混乱す中に
も綱右衛門は家富財用事足けれは山中に密に隠れて今に
至て三十七代又五十七代ともいふ連綿として有り中頃兵乱の火災に

かかつて家系重寶悉く失す元和年中関東の御下知として
大坂落人御吟味之義並御改役人御馳走の事共山田五郎兵
衛尉御代官として惣て河村郡山中の事を此家に支配せし
む茂右衛門其時幼年にして庄三郎と号す其後大守光仲公
當國を管領し給ふて御國巡りの義あり茂右衛門代々山中
にあつて事隠便に郷中の賊乱を鎮むる條甚感賞し給ふ依
て荒尾嵩就加冠を給ふて茂右衛門と改号せしめ猶山中に
於て鐵山爐を免許し給ふ今に至て断絶する事なし茂右衛
門母は欽明天皇後胤太政大臣師實公の末葉帯刀與市秀貞
十五代の孫弥兵衛尉定道の女也事繁多なるか故悉く枚挙
するにいとまあらす

古今國主続記

徳川聖君六十余州を並呑あつて天下を知し召れて後東西

南北の凶徒等悉く泯滅して諸邦の群將に闕國割與ありると
き中村一學忠一へ當國を賜はり大守となり當主及ひ池田
の家に至りしより家續して累代領主たり其前當國元享の
昔に塩冶判官高貞領し雲伯兩國の大主として富田月山の
城居ス高貞亡て後山名侍從伊豆守時氏領となり但丹因伯作
五州の大守として因州高草郡岩恒の邑二ヶ上の城に居る
又轉して作州鶴山の城に移ルとかや
時氏息右衛門督師義領して久米郡打吹山の城に居す其子
讃岐守義幸一旦續ツといへとも身躰病惱あって舍弟播磨守
満幸家續して丹伯雲因四州を領す然るに満幸國政邪意あ
って加之仙洞の御領雲州横田の庄を横領し故に將軍ゆる
し給はさるにより満幸逆心を企テ明德二年に皇都へ攻登る
然といへとも終に利を失て脆て敗北し其後當國へ走帰る

といへ共早ヤ此國をは一族山名右馬頭氏之の領となるによ
り爰をも叙刀を踏ム心地して因州青屋庄に行く一族山名中
務大輔氏冬を頼み再ひ謀叛を企ツといへとも中務合体せさ
るにより青屋に滞居成りかたくして夫より道路の奴とな
つて終に深衣に身を僂し跣跰の方へ走ルとかや山名右馬頭
氏之は伊豆守時氏の五男但州の領主山名伊豫守時義の次
男なり満幸發國の後氏之但州を轉して當國に移り打吹山
の城に居す然るに代々興廢あって終には今國あって漸く
三二郡を領す末葉右馬頭守行入道會見郡淀江の城に居る
然るに大永四年尼子經久の爲亡滅して浪客となりて肥後
の宇土の屋形に蟄居す又一族小三郎氏豊は倉吉に居せし
か天正八年吉川元春の爲に亡命し其後伯耆山名姓を絶せ
り

小三郎氏豊戰死の事ハ古城打吹山城を言フ所に述ふ故ニ爰に略す

大永二年の冬尼子伊豫守經久旧臣并に加麻等をかたらひ再本國出雲を切取リ家を富田月山へ安堵す

加麻は穢多の事也出雲に於ては尓称すなり毎年古来より吉例として穢多とも大晦日の暁天に福壽万歳を富田の城へ参舞す此萬歳に經久舊臣を随て紛れ入リ塩冶を討即時に城を乗取とかや

其後武威日々に盛にして因幡伯耆出雲石見隠岐播磨美作備前備中備後安藝十一ヶ國の軍令をほしいまゝになし其破竹の勢ひを以て大永四年五月當國へ切入山名領主淀江天満不動之岳尾高之城を乗取リ大江岩倉打吹山羽衣石の城を攻落して當國を得此時一圓に尼子領と成ルとかや古老傳

て伯耆五月崩と云は此時の攻城野戦の事を称すなり此城攻の事は古城の巻にしるす

經久當國を普く攻城すること は伯耆の士經久の命令を受といへとも大内に心を通する故なりと云

天文二十年經久の嫡孫修理太夫晴久因幡伯耆出雲隠岐石見安藝備中備後八ヶ國の太守たるへきむね将軍義輝卿より御教書を賜はりて管領す此時當國の社陽を晴久普く再興あるとかや其後尼子家運傾き終に永禄九年七月六日左衛門督義久は毛利陸奥守元就の為に降人と為って藝州に趣

此時累代の家城月山落城して雲伯其外近國十州毛利領と為る大永の乱崩に敗北せし伯の國人南條小鴨長田行松も毛利の大功彰を頼み永禄十二年に帰國安堵して各家城に移入て群将元就の幕下と為る然るに南條伯耆守元續趣意

あつて天正七年の頃より毛利と鉾楯をして半國をは政事
軍令南條ほしいまゝになすゆへ毛利領とは分國の如くな
る時に京藝和睦あつて同しく十一年豊臣秀吉諸臣上に立
て群將に闕國割與あり東三郡を南條にあたへ西三郡を吉
川領となす

第十代

慶長五年関ヶ原御陣あり然るに南條中務少輔（元忠）は三成に合
鞋す時に三成利を失ひ頓て合戦破れ元忠浪泊の身と成此
時家城羽衣石滅亡す又吉川廣家所替あつて他邦に移る即
中村一學忠一當國を領して太守となる同六年に入部す

松平伯耆守忠一　従四位侍従本姓中村誕は駿河室は松下
因幡守康元娘を徳川聖君御養女として嫁し給ふ當國を賜
はるとき松平の姓を下さる而して伯耆守とあらたむ一學
は童名なり伯耆守其前駿府の城主中村式部少輔氏一息也

氏一初は織田信長の士として後秀吉に屬し天正十一年駿
河を領し然して大阪三中老を兼職す慶長三年秀吉薨し給
ひてのち徳川聖君に屬し奉りて同五年関ヶ原の御陣あり
此時式部重病にて舎弟沼津の城主に中村彦左衛門尉一榮（カツヨシ）
隊長として駿州勢を引率し出陣す然るに式部勢杭瀬川に
於て三成か臣嶋左近太夫並に浮田勢に對して大に力戦す
其軍功を聖君見給ひ賞感ある事斜ならすとかや
式部病終に癒ずして同年孟冬の初駿府の城に於て卒す此
冬臘月群將に闕國割與あつて伯耆國（守）駿河を轉して當國を
賜り米子の城に居す此時忠一十歳にしていまた幼少なる
により伯父彦左衛門一榮臣の横田内膳村詮後見の鈞命を
蒙りしとかや
内膳事ハ臣といへとも實は式部少輔妹聟にして伯耆守の

為には近き親族なり
慶長十四年伯耆守米子にたいて卒す生齢二十歳城下常住
山感應寺に葬る法名
青龍院殿前伯州太守一融源心居士
と称す忠一嗣なきに依て家断絶す是より元和二年まて國
主なくして御領となる事其間八年但し伯耆守在城の間歳
月九年伯耆國卒して後古田大膳太夫重治一柳監物直盛に
鈞命有て即年五月二十日両将来國して伯耆を守る事翌年
に至る朝比奈源六久具忠三郎弓氣多源七郎検使として
同年八月當國に入是に依て下知條を賜ふ條々
一　對寺社輩町人百姓奉行人不可致非分事
二　百姓以下他國へ於致闕謀者可為曲事但し地頭代官
　非分於有之者　上使並番頭其國之年寄中へ可相届事

右之條々於違背者可被所嚴科之旨依令下知如件
　八月四日　　　相模守
　　　　　　　　佐渡守
伯耆守米子の城にうつって以来始終の沙汰氏一駿府にた
いての事古城米子を云ふ所に読す村詮は城内今内膳丸と
いふ所則村詮の居住の地なり　一榮は八橋岩山の屋敷に居
す食地三万石を領す駿府にたいては沼津の城主なり　一榮
のこと八橋をいふ所に述ぶ故に是を除く

伯耆民諺記巻之二 終

伯耆民諺記巻之三

目録

御當家諸傳略記 後

就都八代洲岸沚之屋敷 并 芝之築地之事

東照宮勧請因府久松山麓の事 并 本所日光山之沙汰

當國郡郷有劉與諸臣事 并 米子倉吉八橋松崎黒坂古城山号
之事

美濃萬歳初而當國出来之事 并 美濃萬歳之事起

水田八幡宮之事 并 雨宅山観福寺之事 并 自大高古戦場長之
手行道之事

六郡蔵所

改舟番所 并 浦状往来状之事

紀伊國丸之事

在目附月代初而當國巡勤之事 并 森養庵之事

伯耆民諺記巻之三

○御當家譜傳略記

○従四位少将

松平新太郎光政 本姓池田備前少将

光政は前播州の大守池田の正嫡松平武蔵守源朝臣利隆の長子にして母公太政大臣源氏の長者秀忠公の御養女實は榊原式部大輔康政の女なり

母は天壽院本多中務少輔忠勝にゆかりて誕生なりける所の女なり

播州姫路城に生れ元和二年利隆卒し給ふ蒙嚴命家續して播磨の國を賜ふ同三年播磨を轉して因伯両國を賜ふ翌四年初て御入あり

寛永九年四月備前國大守宮内大輔忠雄卿薨し給ふ此年因

伯を轉して備前の國并に備中を領し即年入部有て以来累
代家城となし子孫今に治國隆盛にして岡山に在城あり

従四位少將
松平相模守光仲　本姓池田童名勝五郎
前備前宰相宮内少輔源忠雄嫡男母公蜂須賀阿波守至鎮女
寛永七年六月十八日武州江戸に於て誕生あり同九年四月
忠雄卿薨去蒙鈞命て家續し同夏六月備前を轉して因伯を
賜はる時に三歳同十五年十二月武都に於て元服あって賜
御諱光之字称相模守光仲同十八年御暇を賜ふて始有入國
自尓以来代々居城鳥取久松山に定め子孫爲治國隆盛今に
因伯の大守たり元禄六年七月七日薨去あって奥谷の山臺
に葬る法名
興禅院殿前因伯大守羽林次將俊翁義剛大居士

宗門は黄檗の法義に進み新寺を城下に建立して興禅院と
号す
御當家池田は遠く人皇五十六代之朝清和天皇の後胤攝津
守源頼光五代瀧口泰政池田尤馬允と号ス傳曰其後世攝州住
人池田九郎教依河内新判官楠正行遺腹の子を養号池田十
郎教正後兵庫之助と号す將軍義詮公義満公の時武名をあ
らはし其子佐正と言ひ佐正子を池田六郎と云夫より相續
して池田と称す近くは
池田紀伊守恒利卿養徳院殿と称す其子紀伊守恒興卿後改
信輝護國院殿と称す尓来相續して至今就中此卿の息播磨
参議輝政卿中興の大祖たり累代武功天下に知ル此卿は尾
州清須の城に誕生あって濃州を領し岐阜に在城す天正八
年岐阜を轉して賜三州吉田に居城同爲在京粮米勢州小栗

の庄を賜る慶長五年奥州景勝御征伐の時猶軍功あり徳川
聖君御感不斜して数通の賜御賞書依此軍功即年臘天吉田
を轉して賜播州姫路に在城同八年備前の國を二男忠継卿
に賜同十五年三男忠雄卿を以可爲淡路國守旨直に蒙上意
同十七年正月廿二日被任参議始て松平氏を賜夫より以来
子孫松平と称す但し舎弟備中守長吉子孫は舊号改すして
池田と称し給ふ同十八年正月廿五日輝政卿舊病再発して
姫路の城に薨し給ふ時に行齢五十歳法名
國清院殿
長男武蔵守利隆卿従四位侍従（母公中川瀬兵衛清秀の女なり）家督を継き播
州姫路に在城し給ふ聖君奥州御進発又関ヶ原御陣の時先
手を勤め慶長十九年の冬大阪作乱のとき尼ヶ崎に出張し
て神崎川を渡り擒殺敵数十人渡中津川進着天満口攻圍翌

元和元年夏大阪難波乱起り出張大和田数百家を焼き打取
る首千餘級献之同二年江都において病悩あり終に六月三
日卒し給ふ時に生齢三十歳法名
興國院殿
息光政卿家續し播州を賜ふ同三年播磨を轉し因伯を賜は
る寛永九年因伯を轉し備前を賜る是今備前の大祖たり
輝政卿三男
三男忠雄卿　宮内大輔　従三位備前宰相と号（童名勝五郎）
家康の女
此卿當代の大祖たり母公は征夷大将軍の姫法名良正院殿
元和元年舎兄忠継卿卒し給ひ嗣なきに依て備前を拝領す
同年七月入部す寛永三年参議に任せられ同八年舎弟政綱
卒し給ひ嗣なくして領地赤穂郡忠雄卿に賜ふ時に弟輝澄
輝興両卿の領地なき故二弟にあたえんことを願ふ秀忠公
其孝友を御感あって忠雄卿の旨に任せ給ふ同九年四月三

日行年三十三歳にして薨し給ふ法名
清泰院殿
嫡男光仲卿家續して即年備前を轉して因伯を賜ふて以来
今に到る其前忠雄卿在城淡路國のとき大阪作乱あつて陣于
今宮兵船遣于蘆嶋侵博浪渊守將平子主膳出戰し横川治太
夫彼を討取箕浦玄蕃船を乘取浪か渊に入ル此時二人御感状
を東照公より賜はる　元和元年大阪乱又起る出張あり聖君
武威を感せらるゝ事毎度に及ふ
忠雄卿備前を領し給ふにより先領淡路國をは蜂須賀阿波
守至鎮に賜はる
舍兄　忠継卿母公は同忠雄卿
從四位侍從也前に領備前國後播州の内以宍粟佐用赤穗三
郡加領備前賜之大阪作乱の時十月廿七日出陣有時に十六

年十一月七日大和田川陣より川を渡り討敵を追て注進二條
城に聖君是を御感あることも斜ならす其後住吉に陣し今橋
に進攻城す時に鐵炮如雨秀忠君是を聞し召れ鐵の楯をた
まふ則楯を以て橋の上にたて塞大筒を以て討存城中ふせ
くにたへすして自燒橋両御所其力戰を御感あり翌元和二
年帰國あつて病を受廿三日卒す時に春秋十七年塋名
龍峯寺殿
菩提寺因備に建つ則ち龍峰寺と稱す
右世系は當家池田の家譜を言ふ但各將成功の大概を述て
除事書旦畧餘の枝族の系傳残之
武都八代洲岸遊屋敷之事　并芝之築地之事
八代洲岸遊は武都金城の大手兵庫櫓の堀脚大名小路也其
地に有屋敷なるに依て八代洲岸遊の屋敷と称すとかや元

此屋敷は藝州前太守福嶋左衛門太夫正則建る所の屋敷也
然るを當家領し給ふ事は大祖忠雄卿備前の太守たるとき
元和五年四月秀忠公御上洛の時に福島左衛門太夫正則背ニ
制法是に依て西國の大名忠雄卿共に命をうけ廣嶋にはせ
福嶋家臣防戦におよはすして聽て退散するにより忠雄卿
又有ニ上洛て侯山崎同六年大阪石壁築備前より大石を引上
翌七年三月八代洲岸祉の屋敷を此卿に賜ふてより代〻今に
到る蓋忠雄卿の忠功異なる事は君も甚感あり依ての故な
りといふ屋敷を賜るとき銀千枚呉服綿目守刀の刀馬鷹是
を拝領ありたり
芝築地屋敷は光仲卿拝領あり今の地は元ハ海中なりしを光
仲卿海を埋て屋敷となす方五町なり境内より前は芝濱町
後は大海にして常に波濤石壁を穿ち舩舶往復す好風無双

の屋敷なり三方海中に築き又北前は古の岸祉を限て大長
屋を建て町比と屋敷堺に大なる溝あり則古の岸祉のあと
なり今増上寺辺に堀留と号する堀なり此地の土を以て築
地を埋むとかや八代洲岸祉より芝を去ること二十七丁に
及ふ又芝表の海を俗に号て相模灘と云ふ
○東照宮勧請因府久松山麓の事并本所日光山之沙汰
此地に勧請あることは慶安三庚寅年秋九月大守光仲公武
都に在て本所野州日光山の御神璽を由緒に附て此地に奉
鎮新に宅竈を闢て圭田造營あり麓に一院の精舎を建て乾
向山淳光院と号す代々住職院家なり今院家の号を唯識院
と称す山領五百石を寄附あり
謙誌　本項は鳥取東照宮及び下野日光山に關する記事
にして伯耆には何等の關係なし恐くは後人の記

入なるべし依て以下略之

○當國郡郷有割與諸臣事 并米子倉吉八橋松崎黒坂古
城山号之事

元和以来代々の太守因伯を領し因州鳥取久松山の城に在
りて此地累代の城下たり然るにより伯州をは諸士群臣に
割與あること故臣等多く國中を知行す就中當國の古城下
米子並に倉吉懸を大老両荒尾氏に賜ひて代々是を領し六
郡を双方にて各三郡の事を沙汰す是寛永の定例とかや右
両所に数多の士あり但し二家の組兵にして此地定詰に代
代住す是又寛永の定なり所謂士、住することは第一鄰國他
邦の押への爲とかや各一手の持口あり又領主重臣等を置
く並に五十人の輕卒あり

松崎八橋をは和田津田二家の長臣に是を賜ハり代々領す士
を置く事米子倉吉に順格す黒坂亦士を置く代々に福士を
賜ふて今に領す此地伯耆の端にして備後界に近き山御な
り右五ヶ所各在處なり何れも菩提寺を建て尸を送て累代
廟牌を置く地なり

五所古城之事

米子湊山 今城下　倉吉打吹山　八橋岩上山
小鹿谷松崎湖上趾　黒坂鏡山

○美濃萬蔵伯州に初て入来る事

美濃万蔵は素性尾州知多郡大高村の住人にして同郡木田
村八幡の社人平野喜内信格か大祖なり
輝政卿清須の城に於て誕生あり依て此八幡宮を以て氏神
と敬め信仰いとしからす然るゆへに平野故あって千壽萬

歳して陽春を賀す其より吉例として代々怠慢なく今に年
毎に城下に来て万歳を壽き陽春を祝し並に木田村八幡宮
御札を大守へ上るなり然る事起に依て今美濃と称するな
り
此萬歳は常に播磨淡路辺より来て藝をなす萬歳とは異な
り一僕に鼓を持たせ其身は大紋に烏帽子を着して萬歳を
壽ぎ祝ふのみにして誠に吉例を表する事也又今年に至り
當國に来る事は木田八幡宮の御札を因伯へ相對の配當を
なさん事を望むなり
大守此事を免許あつて是をなさんと當國へ初めて入来ハ
るは寛保二年秋盡る頃なり

○木田八幡宮之事 并 両宅山観福寺之事
并 自大高古戦場長久手行道之事

木田八幡宮は信輝卿並に荒尾前美作守尾州在城の時両家
の氏神なり永禄七甲子年紀伊守之助卿犬山の城に誕生し
給ひ同九年丙寅年臘天三十日清須の城にて輝政卿生れ給
ひ両御共に此八幡宮を産土の神とし給ふなり然るに依て
崇敬他に異なり社地は古城の山に續く木田村には真言宗
両宅山観福寺といふ八幡宮社の僧坊あり前に池田家の犬
山在城の時は池田荒尾の祈願所なり大高村は濃州岐阜よ
り其間二里に近しと云ふ大高村より古戦場なる愛知郡中
久長へは行道鳴海より西に當り田畠川まで凡十町夫より
右へ入り河筋を登り植田村へかゝり梅堀村より少し左に
岩崎村より中久手村から八が谷横道と言ふ處へ一里此地
に護國院殿の廟あり

○藏所

河村郡橋津　久米郡倉吉　八橋郡由良
八橋郡大塚　同　赤崎　汗入郡御厩
會見郡米子
已上七ヶ所各米奉行其所に住居す又目附役あつて毎年秋
代にして来勤し奉行と共に貢米を改納す米子は納米多し
て奉行目附共に両人宛なり他は一人宛なり又蔵番人あり
無苗の者勤之

改舟番所并浦状往来状之事

河村郡泊　此所には倉吉定詰の士ありて出勤す下番両人
は徒士の者なり異船入津又は事あるときは因府舟手又倉
吉役所へ通じ取扱くことなり朱丸破船のときは船手郡奉
行因府より出倉吉大目附張出し三役會合して是を改るな
り是前々の規なり朱丸と云は将軍の米船にして帆中に大

鈴は地名なり
歌諷は舟歌を
歌ふ家筋なり

きく赤き日の丸を書きたる舟を朱丸と云なり又日の丸と
も言ふ然れ共日の丸は天子の恐紋たるに依り因伯に於て
は朱丸と言なり
八橋郡赤崎　此所へは徒士在番して改舟す
米子　は川口右に同じ
米子鈴　此所は軽卒米子より出番す
米子深浦　此處には歌諷の者両人在番す深浦は湊山横飯
の山と感應寺山の間なり諸州の廻船共此所に入浦す
境　會見郡濵の目なり
此所へは米子定詰の士より出勤す大法泊に同じ此處に外
江と云ふ所あり古書にも沙汰すゐ名高き所也
浦状の事　今認る往来其文
伯耆國何浦何屋何某何千何百石積舟頭水主何拾人

乘宗門堅相改爲商賣令渡海候津々浦々無相違御通
し可爲成候

年號 月 日

松平相模守内
時之舟手の役人
何 某 在判

諸國浦々
御番衆

右往來毎年改にして但正月認改之餘國の文には令渡海候
を致渡海候御通可被下候と書く又宛書にも諸國御番衆中
と書く當家の往來は御三家並の文法なり他國に類なし蓋
斯調來る事前々よりの例とかや

紀國丸の事

紀國丸と云船は大安宅船(オホアタケフネ)の事を云なり慶長十四年徳川聖
君西國安宅船を止給ふて輝政卿獨りに大安宅丸を賜ふ是
を紀國丸と云なり蓋聞ク此船は播州明石灘より漸々淡路國
に其長渡程成ル無双の大船なりしと傳来す

在日附并月代目附初て當國巡勤之事并森養菴之事

在日附と云ハ國中村里を修循行してうたかはしき事又は邪
道あることを探り大守へ訟へる役なり徒士の者是を勤め
但循行すること年に一度毎年冬また忍役の者毎年春循行
す此循行の事起を聞クに寛永の十五年肥前の國嶋原陣あり
此乱切支丹の宗より事おこるにより嶋原の御退治の後余
黨の御吟味甚嚴なり然るに森養菴と言ツ外療醫因州氣多郡
の御中に居住せしか此者切支丹の宗を行フと沙汰するによ
り聽捕ラへ面縛して大守に訟へ速に將軍に告て武都に引渡

さる養庵が後に在巡行の目附出来しとかや養庵をとらへ入置籠
舎今因府城下に建若狭町にある女籠と云に入置と云なり
又養庵事糺明あり所貫の切支丹にあらす此者外療修行の
時西國に於て或人に其術を學ぶに無双の名法なり是に心
を盡し彼の人を師となすに此者切支丹なり此宗を貴用せ
は是を傳ふべしと云なり時宜に應して是に隨ひ遂に彼の
法を練術す此事明白にして後には死罪を宥免ありしとも
云なり月代目附と云ふは米子倉吉出勤に限兩所に於て士中
のこと又其所の猥がましき事を太守に訟る役なり寛永よ
りの定例とかや米子廿五日倉吉十五日一月を領分して是
を勤む然に是を略し十五日代と云なり又三十日代りとも云ふ

伯耆民諺記巻之三終

伯耆民諺記巻之四

目録

國之土産
中津註之事起
吉田細工之事
伯耆三石之事并三狐三所雲雀之事
竹内治庵風雅之事
三朝温泉之事并智久麻何某之事
関村温泉之事并弘法芋之事
古今鍛冶并兎切丸之事
國之堺方角道矩驛之事但し海陸

伯耆民諺記巻之四

◎土産

古記に曰、伯耆の土産は 鐵 熊膽 黒香茸 大山
長鮑 ボチ 右四品を述べたり

◎河村郡

東江湖の白魚、鮒 竹田谷の鞘木 吉尾の松茸
神倉の岩茸 三徳山の芍南華 中津の山葵同菩板
同謡 此處古より謡をうたふ山野にて中津謡とも又平家謡と
も称ったり 此地に昔平親王將門の末葉住す此人謡を好みし夫よ
り子孫に傳へ代々間断なくして今につたふ 此故に依て中津謡と
も平家謡と号す 此郷は極めて山里にして風俗も異なるに
樵夫の韻文をなし謡ふありき是昔の餘風残て誠に殊勝なる
ことゝもなり 村中に勢至堂あり彼末葉の持佛なりと言ふ

宝物に鍍太刀どもありしが近年に焼失して今日はなし又
彼人等の居跡とて其地を竹里之里御所屋敷と称ふ有り
土海―大和柿　長和田―牛房　栗尾―桃　宇野濱塩
泊濱―香附子　原池―杜若　大原―ハツチ土　佐柴―草

久米郡

倉吉―吉田細工　鳥取岡山姫路にあり
端午昇の檜物屋の設る片表にして所々の古戦をうつす木
偶人の細工の事なり然るを吉田細工と称することは當國
大祖輝政御吉田御在城のとき勝軍のありさまを写して端
午の昇に家毎に外面に祝し荘装してと命令あり然ルに其四
月下旬の事なるゆへ俄に悉くとへのへ難きにより古戦の
圖を城郭人馬山海の草木までも片面に作りて諸民是をか
ざるとかや吉田城下の工人初て作るゆへに吉田細工と号
するなり是故を以て當家居城の地吉例としてこれを作り
今に倦怠なく端午に之を飾る然る謂れより此の細工餘國
になし則して當所甚だ名作也
同所南殿櫻　今沖田屋敷の山端にあり或合言ひけるは此
花紫宸殿にある所の右近之櫻と同じ花なり彼殿は南殿な
る故に櫻の名となして南殿櫻と称すなり古木は枯ルて今
有るは蘖なり花白くしていかにも大輪なり
同所隆泉寺氷土　不動瀧へき石　岩倉山新藤熊澤各さつ
きの花なり　新藤何某熊澤何某此山に於て是を求めひろ
むるにより終に両氏の号をさつきの名となして称すなり
同所切石　大谷虎尾櫻　江北濱防風　明光竹
中江御座　三明寺山平地木　大島井釣柿

八橋郡

船山ノ梅　叶市密柑　大谷若布　松ヶ谷米　魚品

汗入郡

大山蓮　香茸　楊枝木　奈和庄川菜　亀甲村箸
此村の萩箸木に專ら用へしと諸國に沙汰す往古伯耆と改
る事は白亀出現の祝儀なり彼亀此村に初て出現するとて云
其後此地に箸木生して箕者普く是を用ひしと言なり今亀甲
村の号なし蓋し村名近代改められしか

談記に「今に好古の人々重する所なり」とあり

會見郡

米子ノ鯔　生綿　長鮑　神田濱ノ松露　霜茸　六角水晶
蚊屋蘿蔔　長砂女夫堤の鮒鯉今はなし田畑に闢く　日吉津村鯛
此村の鯛きはめて白く大きさ五六寸。号けて日吉津鯛と称
す外浦になし　目向大谷両村竹　陰田目かけ石正徳年中より出るなり
八幡鱵　尾高芹　阿嶋屋根石　此阿嶋村石あることは往

古長者住けるとて其跡を傳へて長者原と云ふ此地より出る
石なり　石色紫青なり　耳

日野郡

熊膽　印賀鋼阿布縁の土を以て吹之都て此辺土宜と言なり　滿口多葉粉
黒坂豆腐　宮内温石　下安井皮茸

土産物終

伯耆　三石

御厨燒米石　日吉津須久毛石　坊領蛤石

伯耆三狐

會見郡宗像村法勝寺川藤内狐ハ法勝寺川を俗に尻燒川と
称す河村郡若宮河原の出合亀太郎狐。同郡上井渋姫松
狐、伯州は名高き野狐にして人を化かす事多し

伯耆雲雀

精神川　唐王　深谷　三所ともに名大山の裾野也

米子竹内治安風雅

寛文より元禄年中の者なり誕は米子にして唐物屋治兵衛
と言ふ後入道して治安と号す此者幼年の頃よりして風雅に
心を寄せ歌詠ム事を学ひ盛年頃よりして此道を略得て都に
上り中院大納言より和歌浦と云ふ題を下し給るに依て直
に詠し奉る

和歌浦　かしこしや海士の捨草すてやらて
かゝるよにあふ和歌の浦なみ

大納言甚賞感あつて重て数々の題を下されしを又詠て上る其
後奉納千種と云ふ題歌書を献す元禄七年當國の一宮倭文の
神社に参籠す是和歌の大祖の神なるか故なり此年漸く耳
順にあまり夫より残る五社に詣て又名高き佛閣を廻りて

詩を賦し歌を詠し社毎に是を奉るとかや治安の六社廻り
と云て書物なとに残れとかや

河村郡三朝温泉并智久間何某之事

今此湯数十八九もあるへし一の湯二湯入込とて三湯並ふ
一の泉を御茶屋と云ふ國の公儀よりの修造なり一廻の湯
代銀壱両是前々よりの定なり湯数多あれは鍵と云事もなく
昼夜とも自由に入湯す春秋は自他國人大に群集す大い
に繁華なる湯なり又湯村の六七丁上に砂原と云ふ村あり
此所の田の中に温泉あり大なる株の木ありて其内より湯
出づ依て株湯と号す湯村の源湯なりといふ
天正年中智久間何某湯村を領して住す今下か屋敷（古知久間屋敷なり）
今宮地となる則知久間の領なり此者は羽衣石の與力なり
しか或時大瀬に於て川猟より事起て南條伯耆守大勢の人

数を押向ヶ知久間を攻るに知久間終に亡命す其子何某十七歳なりしか一方を切ぬけ湯村向なる逃谷に走て助兵衛と言黎民の宅へ深く忍て命を助かる其後南條と和睦し又湯村を領し住居けると言ふ

○久米郡湯関温泉
并弘法大師忌ぐ芋の事

此湯は白銀湯と言っなり瘰癧のたぐひ別して相應す湯漸三つあり然りといへとも名湯なりや入湯の者多し一の湯修造三朝に同し境地三朝と共に山中なり又此村の弘法大師此里を過給ふ時或民家に立寄給ふに亭主芋を洗ふ亭女しばしば洗ふ大師是を乞ふに亭女此芋は忌ぐしと答てまいらせす夫よりして此所の芋忌くいして不喰依て是を号して弘法の忌ぐ芋と呼ふなり　此類他邦にも有りや讃州に弘法の蛤とて形は蛤なれとも半分は石なり

○古今鍛冶

安綱
大原五郎太夫と号す河村郡大原村に鍛冶屋敷とて今にあり此所に居住せしと言なり平城帝の御宇の鍛冶にて源家累代の宝剱鬼切丸と云ふ大刀の作者也安綱一心清浄の信を以て鍛冶し時の将軍坂上田村麻呂に奉る田村麿勢州鈴鹿山に於て鈴鹿御前と剱を合する太刀なり其後田村麿伊勢太神宮へ参籠ある時瑞夢に依て此剱を奉納あり然るに摂津守源頼光詔を奉し丹州大江山の妖賊を退治として進発の時神の告を蒙り彼剱を下し賜て酒呑童子を切り又和州宇田郡にて悪鬼を退治あり是より鬼切丸と号し代々源家に相傳の霊剱なり新田左中将義貞越前の足羽に於て戦死

の時此太刀を帯しられしか将軍尊氏公へ傳り累代源家寶
器となれり太平記には會見郡大原の鍛冶なりと述れとし
會見内には大原と云ふ地名なし

安綱銘形

真守
安綱か嫡男にて弟四人あり居住大原なり父に不劣名鍛冶
にて嵯峨帝御宇則此帝の御守劒をうち奉りしとかや又平
家抜丸木丸なといふ太刀の作者とぞ又武蔵防弁慶の持所
長刀真守作又織田信長の長刀も同作なり

真守 名形

大原真守

安守 真守子也居住親に同し備前に同名あり

真綱

有綱

家安 真守高弟也横瀬三郎と云居住不知

盛清

宗隆 永元年中の鍛冶也

光重 元重長子也

國宗 暦仁の鍛冶にて久米郡小鴨郷に住す後京都に登り
備前三郎と号す子四人有り一人備前弥五郎と称す一人備
前長船に住す一人越中に住す一人當國小鴨に住す

長義 備前光長嫡子崇徳院御宇観應の頃當國に住す後備
前に住す正宗か弟子也

有正 備前一人河内一人江州に一人 和州に一人濃州に一
人當國に一人

則元　當國一人此銘篠國になし
眞平
眞貞　二條院御宇當國に居す和州保昌五郎國光か子也　亦
備前に一人
眞清　京都に一人
眞光　備前に一人當國に一人
眞宗　當國一人又和州千手院に一人
安則　行平が子也目釘貫し爪實　當國に一人和州に一人
清太夫と号す尾州に一人但寛壽頃又備前に二人内一人
一文字豊後に一人
友安　秦鏘友安とこ遠州に一人出羽一人備前一人薩摩一
人波平備州に一人本は江州に住す
天原　當國に一人奥州一人但州一人

十逆壽　當國此一人余國になし
三ヶ大原新太夫か子也則大原に住居す
武保
正綱　天正年の鍛冶なり久米郡弓削村に住し弓削新三郎
と号す後には受領して播磨大掾藤原正綱と銘す後に倉
吉に住す又米子へ移り子孫今に播磨鍛冶と呼也尼子の
臣山中鹿之助幸盛が刀をうちける
廣吉　天正年中倉吉に住し三田五郎左衛門と言ふ今に子孫
倉吉に居す今は太刀鍛冶にあらす庖丁薄羽其外農具の
たくいをおち甚調法となる世に祖父廣吉と云は此五郎
左衛門がことなり五郎左衛門行年八十八歳子二人あり
兄を三田助之亟廣吉弟を道祖尾七郎左衛門廣賀と号す
各父にたとらす名鍛冶なり助之亟の子倉吉に残り其孫

今に住す但し今の廣吉は助之丞廣吉より五代に及ぶ又
道祖尾七郎左衛門廣賀の子七三郎左衛門廣継と号して
八橋郡津原郷に住居す子孫今に津原に在て其職をなす
是は今は刀鍛冶にあらす農業の道具類を専らつくれり
右先祖廣吉廣賀何れも正綱同時の鍛冶にて皆相州傳な
り

○國界并に驛路行程之事

一 河村郡小濵村より國堺まて十三町二十八間國堺より
因州氣多郡長和瀬村まて三町八間

一 同郡河上村より國堺まし一里十七丁國堺より因州氣多
郡桑原村まて一里一丁

一 同郡俵村より國堺滑石峠迄九拾七間國堺より因州氣多
郡河内村迄一里十二町三間

梅全、一本に梅もどき

一 同郡中津村より國堺佐谷峠迄十二町三十間國堺より
一里四丁二十間因州同所に至る

一 同郡鉛山村より國堺大茅野峠まて一里十五丁國堺よ
り作州西條郡上才原村迄四十八町

一 同郡木地山村より國堺人形山峠まて一里七丁四十間
國堺より作州西條郡上才原村まて二十二丁四十間
此峠を人形山と称す事は昔此山に大蜘蛛あつて往来の人
を悩ます日久し或人謀を廻らし木偶人を設けて峠に立置
き犠牲の如にして蜘蛛を招けるに驚て是を喰けんとする所
を遠矢に射殺し多年の難を退く此所謂を以て人形山と号
すと云へり此峠の傍道に打札越と云あり道筋も大にして牛
馬往来よし人形峠は殊に狹路なるゆへ多く此道を通行す打
札越より作州へ三丁程を行けは道端に梅全あり大木にして

原本脱字

一杣に餘る其外大木数多生茂るなり
一同郡上田代村より國堺中谷越まて三十五丁四十五間
國堺より作州西條郡羽村一里四十丁四間
一同郡大谷村より國堺瓢簞峠まて十一丁三間國堺より作
州西條郡西谷村へ四十七丁六間
一同所より國堺櫨實峠まて　國堺より作州大庭郡吉
田村へ十九丁五十九間
一同郡四十回村より國堺四十回峠まて二十一町國堺よ
り作州大庭郡吉田村へ三十町四十間
一久米郡湯関村より國堺空是知峠まて一里廿九町三十
間國堺より作州大庭郡別所まて二十三丁二十五間
一同郡山口村より國堺大挾峠まて一里三丁拾八間國堺
より作州大庭郡下長田村へ一里三町

一日野郡下蚊屋村より國堺踏掛峠まて八丁國堺より
作州大庭郡上徳山村へ一里七丁
一同郡菅澤村より國堺横峠まて二十三丁五十間國堺よ
り作州大庭郡上徳山村へ一里七丁一間
一同郡俣野村より國堺まて一里國堺より同所一里二十
一町二十二間
一同郡同所より國堺阿奈峠まて一里國堺より作州眞嶋
郡新庄村へ二里十八町
一同郡板井原村より國堺四十回まて二十八丁四十八間
國堺より作州眞嶋郡新庄村へ一里十八丁四十五間
一同所より國堺三坂峠まて三十町五十三間國堺より備
中國阿賀郡山奥村へ二十六丁三十三間
一同郡秋縄村より國堺遥峠二十四町國堺より備中阿賀

郡井原村四十四町二十間
一 同郡門谷村より國堺明知峠まて二十七町國堺より備
中阿賀郡花見村へ二十七町二十間
~~一 同郡門谷村より國堺明知峠まて二十七町國堺より備~~
一 同郡中菅村より國堺蓑荷峠まて二十五町四十六間國
堺より備中阿賀郡花見村へ四十町五十七間
一 同郡神戸上村より國堺鍬平峠まて二十三町十四間國
堺より備中阿賀郡實村へ十一丁十五間
一 同所より國堺奥谷峠まて十五丁三十六間國堺より備
中~~㐅~~哲多郡釜村へ十一町二十五間
一 同郡駒崎村より國堺谷田峠まて一里二十八間國堺よ
り備中哲多郡釜村へ二十町三間
一 同郡下道場村より國堺茶屋峠九町十四間國堺より備

中哲多郡高瀬村へ二十六町二十六間
一 同郡飛時原村より國境高瀬峠まて八町二十間國境よ
り備中哲多郡高瀬村へ三町五十二間
一 同郡大坂村より國堺大谷峠まて十四丁二十一間國堺
より備中哲多郡大谷村へ一町四十間
一 同郡野組村より國堺鑰掛（ヤカケ）峠まて一里十八町國堺より
備後奴可郡小奴可村へ一里九町十八間
一 同郡新庄村より出雲仁多郡坂根村へ廿六町
一 同郡上萩山村より國堺萩山峠まて十五町國境より出
雲仁多郡樋口村へ一里
一 同郡上阿布縁村より國堺萬歳峠まて十町國堺より雲
州仁多郡竹崎村へ二十五町
一 同郡礦破村より國境比田峠まて十町國堺より出雲乃

木郡東比田村へ三十五町
一同郡奥栗谷村より國堺坂原峠まて十二町三十間國堺
より出雲能義郡小竹村へ十四町
一同郡下栗谷村より國堺久野谷峠まて十五町三十間國
境より出雲能義郡赤屋村へ一里十二町
一同國會見郡信頼村より出雲能義郡深山へ二十七町二
十間
一同郡伐杭村より國堺伐杭峠まて四町十間國堺より出
雲能義郡福留村へ十二町四十間
一同郡絹屋村より國堺佐斐鳥木まて四町十間國境より
出雲能義郡市中村へ二十町二十間
一同郡備小路より國堺二童菊まて八町五間國堺より出
雲能義郡母里へ二十二町

鼻ハ一本ニ鳥木

一同郡柏尾村より國堺まて二十三丁廿二間國堺より能
義郡宮内村へ一里廿九丁四十間
一同郡古市村より國堺迄十七町八間國堺より出雲能義
郡加須原へ三町八間
一同郡新山村より國堺関山鼻まて二町五十間國堺より
出雲能義郡安田関村へ十二町二十間
一同郡陰田村より國境迄三町十四間國堺迄出雲乃木郡
吉佐村へ十三町
國堺都合四十三口　因幡口四　美作口十三
備後口一　備中口拾　出雲口十五
一因州鳥取より伯州米子迄之行程
鳥取より高草郡界まて十四丁三十四間
高草郡界より同郡安長村迄二丁五十六間

安長より吉山村まて七町三十六間
吉山村より湖山村まて十一町
湖山より伏野村まて一里五丁十間
伏野より内海村まて十一町三十間
内海村より小澤見村まて十三町
小澤見より氣多郡界まて五町五十間
氣多郡界より母木の宿まて二十一町
母木より濱村迄十五町十五間
濱村より姫路村迄三十町十五間
姫路より芦崎村迄二十七町三十間
芦崎より青屋迄三町二十六間
青屋村より井手村迄四町四十五間
井手より長和瀬村迄十町十五間

長和瀬より伯耆堺迄三町四十間
因州里数六里十二町六間
伯耆國堺より河村郡小濱村まて八十町
小濱より石脇村迄八丁三十間
石脇より泊村迄九町二十四間
泊村より宇野村迄一里四十五間
宇野より湊宿まて十八町五十間
湊宿より長瀬まて十五町三十二間
長瀬より久米郡境まて七町
久米郡堺より君坂村まて十八町三十間
君坂より八橋境まて二十八丁四十間
八橋郡境より西園村まて十五丁二十四間
西園より由良村まて十六町二十四間

由良より妻波村迄六町三十間
妻波より大谷村迄九町三間
大谷より大塚村まて二十一町三十四間
大塚より八橋の宿まて二十五町三十三間
八橋より赤崎迄二十五町二十間
赤崎より箆津村まて二十三町三十間
箆津より赤坂村まて三十一町
赤坂より汗入郡界まて二十四丁十五間
汗入郡の界より逢坂村まて五間
逢坂より御厨迄一里十一町四十六間
御厨より富長村迄十五丁五十六間
富長より福尾村迄二十四丁十八間
福尾より國信村まて十四丁六間

國信より上萬村まて六丁五十間
上萬より淀江まて二十丁五十九間
淀江より會見郡の堺迄二十三町十五間
會見郡堺より佐田まて十九町三十間
佐陀より日吉津村まて十二町二十間
日吉津より今村まて三町
今村より米子まて二十町四十間
伯州里数十五里十八町三十三間
因伯里数合二十一里三十町三十九間

伯耆民談記 巻之四 終

伯耆民談記 巻之五

伯耆民談記　巻之五

目録

國中川之事
并ニ冑川熱田大明神神詠之事
山之事
并ニ比婆山日本紀之沙汰
池之事
伯耆郡郷諸邑之事

伯耆民諺記 巻之五

川之事

日野川 日野會見二郡より流る百六拾間幅也余常は二瀬なり湊は海地の下より海に入ル伯州一之大川なり

淀江川 汗入郡宇田庄より出る幅九間餘橋あり湊は淀江町下

今津川 同郡歩行渡なり幅纔に五間餘、高杉の里より出る

阿弥陀川 同郡歩行渡なり幅十五間餘、高杉の郷より出る大山の麓なり古へ此川より阿弥陀佛出現し給ふ今大山へ安置す則チ今の阿弥陀堂なり然る故を以て阿弥陀川と称す俗に是を誤りてなんだ川と云なり

御厨川 同行歩行渡幅十間餘大山の麓郡湊は富田の下な

逢坂川　同郡歩行渡なり幅十間餘、大山の麓より流ル湊
は善谷の下

胄川　八橋郡中山郷一谷のなかれ大山の麓は下胄村の下
歩行渡幅十三間餘此渡りを胄川と云フ事上古天照太神出雲
の國より還幸のとき八重垣の浦にて素盞烏尊の退治ありし
八頭の大蛇か女蛇の敵神とて此川に来て水あせさ岸の大
小の石を数万の胄武者と化して大に妨をなす時に供奉の
熱田大明神之を見給ふて一首の御詠あり
ちはやふる千早振神代に聞ぬ胄川からくれなゐに水白くなるへし
と詠し給へは数萬の邪兵消失せり此故を以て胄川と称す
なりと然るに胄ノ文字後世に至テ謬て甲と言フ字を書ク故甲川と云
傳ふ然れとも神詠により胄川と称スル事古来相傳の説なり

此神詠を可疑様なし此の古事に依て胄川と称せはあから
ん

黒川　同郡箆津の東なり幅十四間餘大山より起り以西の
御一ト谷の流なり此川を黒川と云フ事は元弘の昔此川筋海
上にして後醍醐天皇の御船楠丸入し海上なりと言フ此御
舟入しに依テ此川筋の石大小ともに黒し依て黒川と称フとや
や箆津の下

荒川　同郡上郷一ト谷のなかれ幅十一間餘湊は八橋の下
なり

加勢蛇川　同郡古布の庄一ト谷の流幅十四間餘湊は大谷
村の下此川加勢蛇川と称す事は神詠によるなり精クは八橋
の郡号を言フ所に述ふ

天神川　久米郡河村郡の境にあり久米郡櫻郷矢遣郷北郷

三谷の流河村郡は竹田庄鴨郷三朝郷此三谷のながれ上井村の前にして両郡の水會合し一筋となる江北村の下にて海に入幅百三十間餘りあり因幡街道の渡を天神渡と言ふ歩行渡なり洪水の時は長瀬江北両村より川越の人夫出る上井村にも舟渡しあり倉吉より因幡街道なり

化粧川（ケワイ）八橋郡赤崎西端に幅十歩に足らぬ小川あり此川の言ル一二古城の巻に誌す

橋津川　河村郡東郷の山より流れ出て東郷の池を通り橋津村の下にて海に入る

以上川筋十三悉く南より北に流て海に入る其外枝川数多あり悉く右の川々に落合なり

山之事

大山　汗入郡
船上山　八橋郡
美徳山　河村郡

是を伯耆の三嶺と号す各社閣の巻に述ぶ

毘婆山　此山は伯雲の堺にあり伊弉諾伊弉冊尊の廟ありと云然といへども何の山を指て云事を知らず御廟の跡も終に見えず旧事記に曰、諾冊尊雲伯界毘婆山云々日本紀紀州有馬山を毘婆山と云ふ述たり今按に大古國堺未詳雲州能木郡日南村に日南山と云ふあり山上に陵ありて伊弉冊の尊を葬る神陵なるよし古来相傳説あり此山の竹を以て杖を製す凡は蝮蛇の類敢て不近のよし普く神徳を称す疑らくは毘婆は日南の訓意にて此所正しく神廟の地にして上古雲伯の堺なるものにや

高麗山　汗入郡にあり俗にかは高ら山と言ふ

池之事

東江池　河村郡松崎

東江の池は伯州不二の大湖にして况や好風不斜前に漢々たる田隴連接して後は森々たる山嶺衛環る湖上に國の一宮大明神倭文の神社奉鎮而砌には九品蓮臺の精舎をわき是本朝三所の靈場とかや院中に平氏悪七兵衛景清廟塔あり又湖西國に鷺大明神扶鍒の宮並立す其址を鷺田崎とて百歩に餘り湖中に出る洲崎あり

扶鍾の宮は往古此池中氷れる甚張して冬に至れは郷民湖上に往来するに恰も平砂を歩か如し或る時誡津村の女扶鍾を持て氷の上を行極中にして氷中絶へ徒に水死す然るを後人嗣して神に崇め一社を立て遂に扶鍾の宮と号すとなり倩湖中の好風を覗ふに立つ物は天を指し伏す物は匍匐浪の址の巖は漣に撃られ屓あり挽けなる有て其形誠に兒孫を愛するに似たり丘の松は湖風に枝葉屈曲し自ら撓るか如

し朝は簾津凧に進一葦夕辺湖風遣帰帆漁夫釣翁の扁舟はふなはたをたたき煙草に千歳を延るあり様は陶朱か五湖舟巖子か陵瀬か釣も斯りやと末もに出されける漸極中を望めは温泉湧其氣顕然たりとし亂に蒸か如し湖産は白魚尺餘の鮒其外魚品四季に轉して不乏又湖の巡をいへは行事たまそ三里に餘り深き事凡百餘尋砌に連接す邑里都へて十二村惣て湖風の景色其感情にして誠に匠に難く好に不成是自天然造化のなす處何人か文毫を揮ふ事を盡す事あらんや

原池　同郡原村古へ此池に蛇棲むと云蛇持とて際文百歩余地行高なる所あり又池辺に杜若盛茂す即ち此池の生れなり

嶋池　八橋郡嶋村久米郡の堺にあり

由良池　同郡由良村にあり都て四村の池は國の大圖に出

る池なり
赤松之池　汗入郡大山領赤松村
此村に昔赤松何某と云人有、此者に一人の女息あり此娘成長
に随ひ孝心他に勝れ況や容貌美しけれは父母寵愛甚なり
然るに此娘十八歳春頃或日父母に語て言吾一旦子に生れ
親子の契を結ふといへとも素性蛇身なり故ありてしはら
く人躰に化生す時に今月を限り元の蛇身に變す盟あり幸
ひ此里に清潔なる池あり早く此地に遣給へ誠に歳月久し
く御養育の難有けれは此後家内災害なき事を守護すへし
又郷民の願望を叶ふへし必吾を念する者は山椒を供御と
なして池中にちらすへしと懇に語るにそ両親大に驚き歎
に悲歎し名残をたしむされとも素性に恐怖して娘か心に
随ひ不日に乗輿して彼池に遣る聽て池辺に至る娘言ける

は此迄供し来る母女輿を此所に指置早々帰るへしと云へ
ば供したる男女聽ず輿を残して立帰りしか暫く隔て身をか
くし娘かありさまを覗ひは早く輿より出て池に望む池の
上を行こと平地の如く漸く極中に至ると見へしか忽大蛇と
現して其儘沈水して形も見へすなり畢りぬ
又或説に此娘十八歳の時大山の児を見染戀慕しけれとも
其志を遂ること得す欝念の餘り赤松の池に身を投しか
忽ち大蛇と成て大山に登り彼児を取て池内へ入ると云へり
今に彼池に蛇存て居ると云ふ赤松か娘の跡し池なるに依
て赤松か池と号すなり　今も此蛇大山へ詣ること有るや會
式の日晴天俄にかき曇り一時の大雨あること屡なり此時
赤松登山すと郷談す今に郷民願望するに山椒を供するな
り池辺に宮あり彼の蛇を祝ひ赤松大明神と号す也

民談記ニ六上淀ヲ加フ

○六郡諸郷郡村　丸有る處は町也

河村郡　百三ヶ邑

東江　古多駄郷と称す　都て十三村

松崎　引地　小鹿谷（カタモ）　野華尾　田畑　中興寺　中尾

山部　別處　方面　高辻　河上　久見

上西郷　都て六村

伊木　八屋　古屋富　下淀　栗尾　大原

下西郷　古日下の郷と称す　都て六村

山根　上井　海田　福庭　清谷　田尻

或古記に日下の号ある所倭朝に三所肥前國上道郡一ヶ處伯耆國は會見郡川村郡二ヶ所、蓋日下は下照姫の命の暫く鎮座の地にして改まる所なり依て日下とは号とかや下照姫は當國の一体にて倭文神社と号す即郡の宮内に

鎮座ありて圭田を存て肥前郡名を覗ふに今上道と言ふ郡名なし按に近代改められしか然れども古書には上道郡と述べたり

羽合郷　古へ川村郷と言ふ　都て十邑

長瀬　水下　布川　赤池　南谷　上橋津　今橋津　本号湊村

上浅津　下浅津　長江

久津賀庄　濱辺郷　都て七村

宇野　宇谷　園　泊　石脇　筒地　小濱

埴見郷　都て四邑

門田　長郷田　土海　羽衣石

舎人郷　九ヶ邑

藤津　宮内　野方　白石　方地　漆原　北方　尾尻

原村

竹田庄二十二ヶ村

大瀬 本泉 今泉 湯谷 牧 赤松 大柿 恩地 助谷

久原 普源寺 ○穴鴨 木地山 加谷 下西谷 上西谷

上田代 下田代 下畑 四十曲 柏山 大谷

鴨郷八ヶ村

森 鎌田 吉尾 下谷 小河内 筒賀 柿谷 鉛山

三朝庄十八ヶ邑

横手 山田 湯村 砂原 淀村 片柴 坂本 江谷

吉田 高橋 波伯山 井土 西小鹿 東小鹿 神倉

糀村 中津

都合百三ヶ村

久米郡百八ヶ邑

灘郷 古ヘ浦島郷ト号ス 十一村 内、岡田 福岡 宇渡今ト成

倉吉 鬆 神坂 耽興寺 小林寺 會下谷 圓谷 下田中

田内 三明寺 岡田 福岡

北郷十四ヶ村

三江 澤谷 溝内 福富 福本 尾田 志津 杉野

中野 桙谷(ワクガタニ) 長谷 森村 大河内 鹿山 今北山ト号ス

六郷六ヶ村

松井原 泰久寺 今西 堀 明光 萬場

矢遣郷十ヶ村

生竹(ナマタケ) 耳村 安部 大鳥井 金谷 高下 或郡家 湯関

上田中 山口 久米

小鴨庄二十二ヶ邑

生田 古鹿首 中川原 北野 宮村 市場 倉内 上古川

石塚 中田 松神 若土 廣瀬 狼谷 岩倉 菅ヶ原

大宮　弓削　長坂　下大江　留海　淀谷　丸山
　立縫郷　十六ケ村
下福田　上福田　勤士　岡村　般若　椋波　横手
今在家　二反田　大立　立見　津原　谷村　別所
鋤村　尾原
　櫻郷　三ケ村
櫻　服部　河未見
　八代郷　十ケ村
横田　上米積　下米積　黒見　嶋田　今倉　古市　古國府
國分寺　大谷　秋喜
　上神庄　十七ケ村
寺谷　上神　定光寺　不入岡　森村　北門　穴澤
北條郷　十九ケ村

小田　古澤　下古川　井手畑　新田　中江　大塚　穴澤
江北　舟坂　田井　土下嶋　八幡嶋　嶋澤　北尾　弓原
下神　松神　曲り
　都合百八ケ村
八橋郡　百五ケ村
　菊里郷　六ケ邑
八橋　本号菊里　岩本　田越　笠見　小路　口赤崎
　下郷　九ケ邑
高松　中原　番田　發坂　倉坂　細工所　種久　古皆川原
下大江
　上郷　六ケ邑
公文　故有　山田　大杉　出合　野田　赤松　光吉
伊藤郷　五ケ村

德萬　保村　叶市　丸尾　松ヶ谷

上伊勢　上伊勢郷　四ヶ邑　大塚　下伊勢　中尾

此所大杵宮鎮守有り精くは社閣の巻に書

古府庄　二十ヶ邑

野井倉　中津原　三本杉　下見　宮脇　別所　古布池

長房　矢下・馬場　宮内　保壽　八反田　種井　杉地

森藤　松下　松井　金屋　槻下

由良郷十二ヶ村

妻波　大谷　別所　由良　東園　西園　六尾　瀬戸

嶋 由良嶋　石村　新田　亀谷

種郷　四ヶ村

東高尾　西高尾　上種　下種

安田郷　六ヶ村

篦津　湯坂　御崎　尾張　光村　梅田

立子郷　三ヶ邑

太地垣　佐崎　中村

田原郷　三ヶ邑

向原　西出上　下市

以西郷　十四ヶ村

太夫　大熊　國實　今馳　高木　竹内　金屋　今在家

出上　今乘寺　水口　大石　下村　山川

中山郷　十二ヶ邑

赤坂　下胄　長音寺　岩井垣　内倉　樋口　退休寺

悟正院　八重　東積　羽田井　上田

都て百五ヶ邑

汗入郡　六十八箇邑

逢坂郷　七ヶ村
逢坂　塩津　岩村　松井原　上市 下市　殿河内　高橋
塩郷　五ヶ村
前谷　木料　倉谷　小竹　東坪
奈和庄　二ヶ村
坪内 今坪田　門前
加茂郷　三ヶ村
梶原　熊村　東谷
西庄　九ヶ村
西坪　御厨 古御来屋　富田　吉見道　大塚　羽畑　茶畑
押平　茶畠平
高田郷　三ヶ村
東高田　上高田　下高田

月間郷　四ヶ村
別所　原邑　畑村　役石
宇田庄　十四ヶ邑
中西尾　本宮　西尾原　福瀬　外溝　高井谷　稲吉
寺内　北尾　田井　今津　平田　靏田　淀江
高杉郷　五ヶ邑
宮内　平村　神原　長田　中高
六木庄　十六ヶ村
安原　清六　上萬 古浄満　稲光　唐王　六木 古書木
日原　野田　野田原　平木　所子　福尾　上野　國信
末吉　末長
都合六十八ヶ村
會見郡　百五十二ヶ村

勝田庄 十六ヶ邑
米子 城下 福原 米原 三柳 阿嶋 曲松 大篠津
才神 小篠津 新屋 竹内 中野 上道 堺 外江
渡り
中間庄 十ヶ村
細見 岸本 石州府 福萬 日下 尾高 古小鷹 岡成
東谷 小渡 中間
蚊屋庄 十九ヶ村
日吉津 古稗津 今村 熊党 浦木 下新印 津末 蚊屋
今在家 二本木 佐陀 下郷 赤井手 市部 上新印
福田 四日市 中嶋 中河原 河岡
宗像庄 十ヶ村
日原 奥谷 石井 上新田 下新田 目角 大谷 陽田

陰田 宗方
榎原郷 七ヶ村
古市 橋本 新山 今村 奈喜良 大谷 青木
福田庄 六ヶ村
柏尾 谷川 坂根 上境 大袋 下阿妻
長砂郷 六ヶ村
車尾 長砂 観音寺 兼久 上福原 海池
八幡郷 十六ヶ村
馬場 水濵 遠藤 馬心 立巌 小野 小町 鶴田
坂中 大寺 殿河内 新庄 岩屋谷 別所 山市場
八幡
星川庄 十一ヶ村
諸木 宮前 浅井 大谷 市場 馬平 坪屋 山根

綱平　反原　石田
小松庄　七ヶ村
井上　御門谷　宮谷　小谷　上野　翁　池野
富田庄　五ヶ村
天満（旧事記に手向に作る　古事記に手間に作る　両記手間／山本と云ことも有り　其山は今の天間山と云へり）
三崎　寺内　清水川　上阿妻
永田庄　三十四ヶ村
馬場　徳長　竹延　道河内　坂喰　絹屋　西鍋倉
與一谷　法勝寺　加茂　能竹　加正　信寿　入蔵　赤牛
赤谷　定常　早田　大河内　笹畑　大木屋　落合
經乘院　佐早　今長　樹合　馬皿　八子　金ヶ崎　江奈
二升　常清　金山（此村と笹畑村との間に鎌倉山と云ふ高き山あり故ある山なり）
阿賀庄　五ヶ邑

阿賀　新上　原　北方　猪小路
都合　五十二ヶ村
日野郡　百七十ヶ村
黒坂庄　四ヶ村
黒坂　久住　横手　下黒坂
多里郷　八ヶ村
野組　中園　新屋　湯谷　河本　萩野　萩山　多里
宮内郷　五ヶ村
河上　南村　東邑　大森　矢渡（ヤド）
村尾郷（ムロヲ）　六ヶ村
生山　霞　小原　櫻子　糠王　村尾
笠木郷　十二ヶ村
山浦　小椎　小谷　大原　親村　金名内（今鉄穴内カ）　日谷　横路（今鉄名カ）

外渡ハ戸波カ
トナミト云フアリ

坊村（今防） 二部 大戸 狩庭（今狩場カ）
茶屋郷 六ヶ村
細屋 矢原 大内谷 壬谷 小濁 佐木谷
阿布縁 阿布礼 四ヶ村
上阿布縁 下阿布縁 外渡 大菅
印賀郷 十三ヶ邑
大宮 四ヶ村 建石 榎垣 二ヶ邑 宝谷 折渡 三ヶ村
菅澤 三ヶ村
久津賀郷 八ヶ村
相坂 井原 馬代 宮田 白石 中野 門村 飛時原（ヒデバラ）
上岩見郷 九ヶ村
山根 月ヶ瀬 駒ヶ崎山 下道成 銀山 高下 友廣
宗金

下岩見郷 六ヶ村
塚原 無坳 立岩 下岩見 大原 華口
門上郷 二ヶ村
石原 門上
下菅庄 五ヶ村
畑 上菅 荒神原 中菅 下菅
下榎庄 六ヶ村
尾江路 楢原 印賀原 本山 井野原 下榎
渡郷 五ヶ村
漆原 渡 榎市 別所 小原
眼角郷 四ヶ村
濁谷 門谷 秋綱 三土
根雨庄 六ヶ村

杦井原　加持（カモチ）　高尾　根雨　三谷　貝原
安井庄　八ヶ村
安原　津地　野田　舟場　下安井　須崎　半山　久連
宮市庄　十二ヶ村
犁村　俣野　福谷　下蚊屋　助谷　無用　栗尾　杉谷
貝田　宮市　江尾　小江尾
佐川郷　四ヶ村
大原　根雨原　柿原　佐川
溝口庄　八ヶ村
白水（シラミ）　宮原　溝口　長山　大倉　新印　神村　末鎌
三部郷　十八ヶ村
上代　下代　合原　池田　畑中　二部　福嶋　須鎌
舟越　藤屋　岩　焼杉　外溝　三部　父原　古市

左村　宇代
久古庄　九ヶ村
別所　久古　番原　真野　大原　清山　須村　原村
上野
都合百七十二邑
外ニ大山寺領
汗入郡
佐摩　赤松　明岡　今在家　前村　太々羅戸
日野郡
原本ニ小渉 恐クハ誤記カ
金屋谷　小林　岩立　大内　小浅　丸山　小柳　大河原
御机
都合二十ヶ村　高三千石
邑惣合七百三拾八　外枝村五内村　百五十三　新村十八

高惣合拾九萬四千四百拾六石五斗六升七合

伯耆民諺記巻之五終

伯耆民諺記 巻六

伯耆民諺記巻之六

目録

一宮大明神
鎮座東江之湖上御冠山之圖
奉納勅額之事
當社神秘沙汰
五社鎮座之地尊号之事
大山
本社智明神御舎 并 山之圖
山号之沙汰
下山大明神之事
雲州富田月山之古城主尼子民部大輔晴久藝州吉田発向之時天狗山伏来て示霊瑞事

宝永寅之地震之時有奇瑞御舎之事
有當山天狗之事但古書之沙汰
自将軍台徳院殿山之法式慶長年中御定五ヶ條之事
山領之事并に割與四十二坊知行高同寺号
山之什物并武藏坊弁慶自蹟之一通
當山十二神之事
會式之日國法山例制禁之事
釋之玄賓僧都山居之沙汰并護國山法寧寺之事

本行原本ノ誤字不明ナレモ其儘トス

伯耆民諺記巻之六

◯神社佛閣

此巻には故ある圭田を辟宅兆歴代精舎の成皐鐸歳月及社由山傳亦傳述る所也に碑事也蓋聞所謂社閣は上古世々の聖帝の勅願にして妙なる福者達開く所の霊場とかや中古鎌倉右大将源頼朝公普く建立あって頗る領知を寄附あり爾来餘風代々に連綿して修造荐に倦怠なし故に社頭甚盛にして寺塔大に盛なり然るに大永四年尼子經久當國の諸城を攻戦す此時社閣大に煙焼す其後邦内轉亂干戈しば〳〵やむ事なきにより或は浪泊の輩亦山賊の族國乱の虚に乗して邑郷を侵し民家にあふれ社閣を乱し什物重器を掠奪し剰放火をなす然るにより譜傳記録大半亡失して今餘す所稀也然るを代々の社職山僧等是を患ひ是を興して古今を補

ムて以来由の事記さて、のへて後世につぐとかや故に往古の次第粲然として明なる事敢てあらんや天文年中尼子當國を領して就中甚再興して旧領を漸く寄附す及び南條亦造營す時に豊臣秀吉社閣の領知を減し亦甚頗る減少あるに依て諸山悉く大にをとろへ社字坊社此時大半滅すとかやされは興廢は古今を勘考せば昔日隆盛の高閣も徒に退轉して田園も荒穢し喬木に昔を現し礎石に跡をあましして空しく号を村名に称する所多しとなり慶長六年中村伯耆守當國を領して後普く修補して加之寛永九年今の太守に至り專ら領地を寄進あり代々の建修造ある事寔に感恐なり故に社頭は日々に神威を増し精舎月々に佛光を映し萬數應化の瑞を現し且邦郡の社頭總繁●たるかゆへ漸く一二の事を述て八九の趣を餘して其大概を誌す事しかなり

延喜式之六社

是を号して伯耆之六社とす式内の神なり餘の神社は式外の神とて本所八神殿に残る神社なり所謂六社は昔人皇六十代醍醐天皇御宇延喜五乙丑の年　宣下ありて山城國愛宕郡如意峯神祇齋場の所より神躰を由緒に附て此國に鎮奉りて國家擁護の尊神なり

一宮大明神　河村郡宮内村社領四石九斗二升

祭神一座尊号下照姫尊也倭文の神社と尊号す國の宗神にして都て六社の總社なり故に一宮正一位倭文大明神と称す所謂命は摂州東成郡比賣許曽神社一躰の神にして和歌大祖三神之一也蓋聞此神は三國應化の神靈大己貴命乙姫なり母は津姫の命なり生れながら貌甚た娥く御心真心に潔く神通り在しけるゆへ下照姫とは稱する也

諸社一覧記曰諸人の世の人の介となならん事を常に願ひ
若学ふ若あらん者をは吾常に神力を励して日本の神宝に
せんと徒らに世の人の國を産をついやさん人をは必吾彼
をして背て失はしむ

下照姫此地に御鎮座の事は上古出雲伯耆未た分れなきと
き雲州神門郡より此山へ遷座ありといふ所謂遷座事は當
社傳の神秘なり亦當社に残る五社を勧請して神容をたく
是當社は當國の六社の惣社なるに依てなり

神祭一季七度行之事往古よりの社例也

正月宝祚延長治國平天下國主安全諸民無難之神事元旦
より三日に至る三朝念之

二月朔日　五穀成就之事

三月三日　苗代の神之事

五月五日　田植の神事

八月朔日　新嘗の神事

九月九日　重陽國風神事

十二月除夜　越年之神事

御幸の神事今なし古へは御幸も有しとて其處を今新宮と
称して二丁余方に餘る境内なり古昔盛なる時は正神主有
て称宜職社人も多しといふ今に宮内へは坊舎の跡多く残
れり今の社職荒井は元は小鹿谷桂男山の八幡宮の社職な
り然るに当社神主自然と滅して姓を断により國命有て荒
井一宮の社職と成て桂男山を兼帯して両社を職する蓋此
儀近代の事なり今称宜職一人あり前田兵庫と言ヒ藤津村に
居す此前田は古代より称宜職たり往古一宮正神主は位階
もありしとて当時の口宣共も残れり兵庫か方にありと云ふ

古社領千石御朱印地武将より代官として貝屋助右衛門青
木與三右衛門両人長御田に居住して神田社綱を專らす両
人勤之事代々歳久しきか故家族多して所に子孫殘る今に
後亂衰御田村の民家にありといふ
天文年中尼子造營あつて七十石を寄附あり其のち南條文
修補をなすといふ小宮内村の黎民に吉左衛門と申者代々相
傳して御舍の鍵を取りしか近年彼者家難每度に迫る事あ
るに依て神慮を恐怖して鍵を社職へ渡して荒井か方鈎る
此者代々鍵を取る事は蓋往古隆盛の時は宮仕の末なるに
依て累代鍵取事をして社用をなせし者なるべし
往古より一つの額奉納あり此額古き帝の勅筆なりと相傳
然れとも何れの朝と云事不分明然るに近代の社職此事吉
田兼敬に告故勅額社納あるを以て本所顯然たり

鎮座の山は湖上御冠山と号す所謂尓称する事は御舎襟に
あつて山嶺社上に聳ゆるゆへに御冠山と称するなり今社

勅額大サ荒圖聖
曲尺二尺一寸八
分横一尺四寸六
分但内のり文字
は彫てあり本地
は不分明

職荒井左兵衛近代本所に告て神主号且冠を免許あり於當
社民安全の札國命に依邦内東三郡へ酬配す是近代の例な
り
今兼帯の小鹿谷桂男山神社は三所八幡宮なり往古よりし

ての圭田なり社領五石九斗七升八合
一宮御舎今立所方四間なり神領の事國華萬葉集に述る所
五十石と誌すなり然るに代々興廃ありて近代現領四石九
斗二升なり前には御朱印地なり然る處慶長以来國印とな
れり尓る謂れにてあるを神領の分今に國守より改田の沙
汰なしと云
氏人等貴賤にかきらす禽獣を不喰押して喰時は即時に病
悩をす故に全く是を禁するなり又懐姙の時臨月に及ふと
いへとも帯を用る事なし是当社の深秘と傳来す

五社之命号　圭田之幸

波々伎之神社　鎮座河村郡大原又福庭とも云
祭神一座尊号事代主命雲州三穂大明神是也神祇官八神殿
の祭神なり此尊は大己貴命の一男神魂試く神通或時は八

尋の鰐と化し給ひて三嶋通溝杙姫玉比命幼少より貢納する
事を好給ひて處す殿とは之の神なり　三十石
志津大明神　鎮座久米郡志津
即志津大明神と号す祭神一座尊号試御中方命信州諏訪大
明神一躰の神なり事代主の御弟神なり
國坂の神社　鎮座久米郡國坂茶磨山
四の宮大明神と称す祭神一座尊号少名彦之命京都五條天
神一躰の神なりけたし此命は倭國醫家の大祖の神なり日
本紀日高皇産霊命の皇子なり下界漏堕大己貴命の入掌中
神故大己貴命の御子なり給ふ神なりと云ふ
宗像之神社　鎮座會見郡宗像
祭神一座尊号天稚彦命此命は天照大神より勅使の神にして
下界臨降給ひけるか大己貴命頒り給ひ下照姫を妻り給ひ

無子雉子を射殺し給ふ因之大己貴命の神原に入給ふとなり
◯大神山之神社　鎮座會見郡小鷹
祭神一座尊号味耜高彦命大和國葛城郡高加茂神社亦塩竈
大明神各一躰の神なり此命は下照姫の同胞の御神なり容
貌花艶しく二ッ丘二ッ谷に映し給ふ此時阿妹奈屡夜の神
詠あり日本紀に見へたり都て六社の神各素盞烏命の御孫
にして大己貴命御子の神達にましますとかや
是より以下に述る所本式外の神なり惣て伯州郡郷に建
数大社摂社地主神等に至社帳に載する所六十余社
凡本朝に建式内の神社二千八百六十一處倭漢如数に述
たり
◯大山　汗入郡　御朱印地　山領三千石
天台山西部の山本山は祇都東叡山蓋聞此山は智積仙人の

開基にて稱徳天皇の御造營なり角盤山大山寺と号す本尊
は地藏大智明大權現
◯諸社一覧記曰伯耆國大山大智明神は稱徳天皇の時神託
あり勅に依て社を建つ山下の砂夕へに山に登り朝に谷
に下る其前の岡に數株の松あり枝必神前に指といふ神
社考伯耆國に大山と云所に大智明神と申神のおはしま
す利益あらたなる事は朝日の日の端を出るが如くに侍
り本地地藏菩薩にておはしますとて往昔俊方と云ける
弓取野に出て鹿を狩ける程に例よりも鹿多くて皆思ひ
の外に射留けるさて此鹿どもを取んとすれば台持佛堂
に千躰の地藏を置奉る五寸の尊像に矢を射立て鹿と見
へけるは地藏にておはしける其時俊方あさましく悲し
く覚て地藏に取つき泣きおめきけれども更に甲斐なし

聴て自ら髻を切て吾家を堂につくりて永く殺生をせめ侍りける去程に稱徳天皇の御宇社に祝ひ奉との託宣侍りて聴て堂を社になして大智明神と申し侍り利益あらたなれは彼所の砂りにはさか昇り朝は下りて冬下向の相を示す彼岡の松は明神の方に向て皆なびきける帰依の姿を顕はし侍るとかや心なき草木砂までも帰依奉るは實に有難くぞ侍る此地藏菩薩の御事は昔廣目女と侍し時母尸羅善現の為に堅固の大願を起し多く宿願を立て修し玉ひかりまし？て今等覺無垢の菩薩とはなり給ひけり

抑大山は本朝四の名山にして遠き天津神代の昔より所謂靈山なり山は嵩々として好風妙なり梢は鋭に青々として瑞容を現す高根は雲に入り麓は霞にうかみ裾野は遥に周

り備伯作の三國にまたがり實に此山は華を咏し月を賦とも夏なかるべし六月の樵夫も雪を踏といへり其風景の希れなる事歌人は五文字を居かね畫師は黒色をあくまんや四十四丁麓に權現の御舍あり院を三つに賦して南光西明中門と称す本坊西楽院と云都て院字四十二坊隣々として甍をならべ旦暮の御法事として止人事なければ晨鐘夕梵の響も断つ事なし會式は夏四月廿四日六月十五日八月は中弦なり初の會神幸の神事ある社例として神輿を開き神躰を顕す事持統天皇の御宇よりして始と云り中の會六月十五日院僧二人山上して山巓の池の水を汲是智積仙人の傳法なりと云山上の沙汰山密にして他人更に知る事なし秋會は御經のみなり即經會といふ三會ともに遠近の四民群集をなす事彩しく諸國の伯楽とも多く集り牛馬を轉し賣買

をなす分て初夏の頃大に群集をなすなり
山号御盤山と称す事天神七代伊弉諾尊の御字天より一つの盤石此山の辰巳の陽に落てとゝまる故を以て角盤とは称すとなり彼時其石三つに砕け二つは吉野葛城に飛一つは当山にとゝまるといひける
二王堂　拝殿につゝきてあり此尊容後醍醐天皇の御造営なり
下山大明神社　本社の右にあり当社は作州の住人下山源五郎を祝くすと云傳ふ元享の昔源五郎此山に於て鈴木何某と戦死す夫に依り鈴木氏は今に山に入事不叶若押て入は災ありと言へり源五郎子孫は今に於て作州に残ると云ふ源五郎戦死の後其靈崇をなすに依り是を怒て下山と神号

す其後萬治二年に下山大明神と写し奉るとなり又傳に當社は備中國浅口郡江原の庄渡辺日向守輝匠を祝くせしとも云ふなり
天文九年雲州富田城主尼子民部大輔晴久近國を領して武威日々に盛なりしに毛利元就大内に一味し尼子の手切れとして既に尼子領知の城数ケ所攻落し不二に攻めけるなり晴久に急を告れは晴久家子を集め軍談評定あるときに領國の神社佛閣へ金銀珠玉を奉納し願書なとを数込られける或時富田の城へ色白く丈高く清けなる山伏一人来り伯州大山の使僧なりとて案内を請ふ晴久對面せられしに彼山伏今度藝州御出張思召留られ候へしと申けれは晴久それは衆徒中よりの使に候かと問給ふいや是れは權現御託宣にて候御疑可晴ためなりは證據を示し候へしとて懐中よ

り鵜の趾の如くなる物長さ一尺あまりもならんものを出した
り晴久是は不思議の御事有難き御神勅かなかゝる神勅を
受ながら違背申さんは冥慮のほど恐入候といへとも諸國
の軍士羽檄に應して既に当國へ馳集て候へは此上にて又
約を変し各帰國仕候へと申さん事晴久が胡乱といふ当家
の軍法信を失する第一にて候間今更止事あたはさる所に
て候当家大山權現へ奉傾頭抽丹心事数代に及ひぬ若神明
感應の御慈眼を轉せられは唯今度の合戰勝利を得せしめ
給へと有けれは山伏は暇乞て帰りにけり晴久世に不思議
にありし今度の合戰はかたしけ事あらしと案事つゝけて
まします所に亦翌日夜前の山伏来て晴久御返答權現へ敬
白仕て候へは只幾度も藝州御出張御延引可宜との御勅に
て候かく再三申候と言へとも猶御疑念不止上は事の明歴

たる所をは本の姿を顕して見せ申さんとて両の脇の下よ
り大なる翅をさし出しけれは晴久免角幾度も同し御返答
にて候唯偏に保護の神力願ひ奉る計にて候此度勝利を得
候はゝ伯州におひて神領一万余貫を寄附可仕候と宣けれ
は山伏其由返命仕可候然れとも両度の神勅御違背候事彼
是に就て不宜御事に候猶も能々御思惟候へしと座敷を立
つ晴久せめて大山へ使を以て今度の合戰勝利の為とて磨
拵たる緋縅の鎧の胸板に金四つ目結の打たるに金造の大
小を添て之寄附せられけるかくて両度の神託を一向に違背
せんこと神慮いかゝあるへしと案事煩てましますに折節黒
田如水目黒宗六晴久の前に有けるかいかに先日の天狗山
伏はと宣へは両人承り扨ち大山の御神にても候ましかく
申せは神の御事蔑如に仕に似て候へとも全く尤様にては

候はず昔伊勢大神宮大和姫に神託し給ふ宇佐八幡の和氣
の清麿へ御神勅ありしなと、申ことは上代の事なれは尤
もこそ候はんづれ濁世澆季に及てかゝる揭焉神託可有と
も存候はす只是は家中の老臣とも御發向をさしとめ可申
ため衆徒でもも心を合せ鷲か熊鷹なとの羽を取り出し風
にみせ申たるにて候はん殊に白晝にて候はじこそ夜半に
燈火なるかたはらにかゝる振舞せん事は天狗ならでも剛
の小山伏なとも可仕之爲さにて候昔新田義貞鎌倉攻の時
天狗か越後の一族へ急を告たるなと、申事を聞き及ひか
かゝる行を設たるにてこそ候はめ夫れ奇特を顯はすへき爲
に太平記の作者か書作にて候はん實は虚妄にて候へし天
狗なとと申事は魑魅魍魎の類なれは目前へ眼形する者に
ては候はじ是皆衆徒等共か賄を取て仕たることにて候ひ

なんずと申けれは晴久實に尤也と思はれて吉田發向の義
を森と思ひ立られける。是元尼子の家兵馬の權の可衰初
なりと云ふ事此陰德太平記に沙汰す
寶永七寅年秋八月十一日午之刻當國大地震山割れ地開ら
け水涌出人家崩れ人馬死す事多し古老も聞傳へさる大地
震なり人民ともに宅をさり晝夜庭中に竹にて小屋を營み
日数四五日居伯耆に不聞大地震にて号して今に寅の地震
と称すなり當山別して強く山川動揺し今崩るか如くして御
舎も危く見ゆ然れとも事なく地震も止ぬ其後御余を覗ふ
に内陣の左の扉に權現の御跡あり御指の跡まて彫るか如
くに現れたり今にあざやかなりと云当山にある天狗を伯
耆坊と称す普く古書に述たり
當社昔の大華表三ツ霊麓町淀江にあり今に其の跡を大華表

松といふ小

将軍　台徳院より慶長年中に山の法式五ヶ條を西楽院に

下し賜ふ事其文に曰く

一　學文勤行不可有怠慢事

一　大山寺領三千石并山林境内萬事可爲西楽院次第事

一　知行多少住坊可拼其人事

一　縦雖爲先規於悪儀隨時宜可改之事

一　致non公事沙汰不申出之事

右可守此旨者也仍而如件

慶長十九年三月三日

西楽院

此定下賜西楽院幸家忠日記にも慶長十九年三月十三日と

述たり

四十二坊并知行高

本坊　西楽院　日光御門主の御持

南光院谷

六十五石　經悟院　三十石　蓮浄院

六十石　岩本院（今理観院）　三十五石　安楽院

三十石　金剛院　三十石　真性院

三十石　自性院（今観行院）　三十石　普明院

三十石　安養院　三十石　明静院

三十石　放観院　三十石　法雲院

三十石　顕寿院（今吉祥院）　五十五石　最勝院

都而本坊共に拾五字

西明院谷

六十石　寿福院　三十五石　常明院（今成光院）

三十石 恵境院
三十石 本覺院
三十石 養心院
三十石 圓流院
三十石 觀解院
三十石 大乗院

法蓮院 三十石
圓珠院 三十石
洞明院 三十石
智蔵院 三十石
賢如院 三十石
正善院 三十石

都而十四宇

中門院谷

三十石 養善院
三十石 茲泉院
三十五石 法明院
三十石 一乗院
三十石 觀證院

三十石 佛教院
三十石 善光院
四十石 禅智院
三十石 浄光院 今清光院
三十石 成就院

三十石 眞如院
三十石 禅林院
三十石 經壽院
三十石 松高院

都而十四宇

知行高合千三百六十九石
役料等都合 二千石
堂社御修理料五百石
本坊 五百石

宮仕
中門院 神慶
南光院 但馬
西明院 大膳

山の什物

傳教大師自蹟之御經
弘法大師自蹟之御經
日蓮上人自蹟之法華經 各紺紙金字なり
椎之子之佛 阿弥陀聖至觀音三尊
佐々木佛地蔵

頼朝坊廻國神納經筬八流狛犬四疋
菅丞相自蹟之法華經
武藏坊弁慶手跡
鬼牙 小鴨討と牙に記す
行平作太刀一腰　長廿二尺五寸
安綱作太刀一腰　長廿二尺五寸
眞木大膳神納之太刀一腰　長六尺二寸無銘、鞘たゝき朱にて一寸つゝの巻なり　柄糸藤、目貫銀鍔、木香切羽銅、下緒紅丸打なり
縁起始末十二巻文珠堂にあり
弁慶自筆は太明の重晴へ遣状なり　其文に曰
爲　君御代官從未明當國六社大明神社参依愚馬病遣
舎人其方大栗毛可預借者也

正月二日　　　　　　　　　　　　武藏守
亀井六郎殿　　　　　　　　　　　辨慶
進覧

文書ゆへ年号なし然るゆへなれとも元暦年中の事なるへし平家退治の義經当國も押通られ六社に立願の子細ありて爲代官弁慶社参しけるものにやあるらん亦武藏坊と世の人称し来るに此書面には武藏守とあり
本社拝殿長さ十八間尼子晴久再興なり内陣へは間十二間二王堂拝殿につゝく社前石階七十二段石は常の石なり然るを佐田村源右衛門と云黎民の室切石をもつて是を寄附す近き事なり亦本社へ行くに切明とて岩山を切開て社道とす当山末社切明大明神の神通の作なりと言傳ふるなり

右左十余丈の岩嶢にして誠に切明たるか如し世に大山の
山号を金門山と号すは此所をさして言なり

當山十二神

地主智明大權現　本地地藏菩薩
靈像權現　觀世音菩薩
利壽權現　文珠菩薩
山王權現　釋迦如來
熊野權現　阿彌陀如來
白山權現　十一面觀音
金剛童子　藥師如來
護法天童　普賢菩薩
山之神　不動明王
法眼神　同佛

下山明神　觀音薩埵
龍王　本地無佛号

山會神事の時國主より足輕登山して神事の行道を警固をなし群集の亂妨の事を糺事貴賤共に神幸の晴笠をゆるさす彼足輕称之いくと小米子城主荒尾但馬頭の足輕勤之例年會式に防州岩國の城主吉川家より代参を立古來より今に此義無断事大祖当國の太守なりと云

玄賓僧都居住の沙汰

當山の麓に釋の玄賓僧都居住す恒武天皇より賜物とも有之云釋書僧都の傳に曰亦病族人道鏡小媚称徳天皇潜入伯州の山恒武帝有病遠詔山中乞冥助至化難道而負鉢嚢而入都上病愈辞而帰山云々居遊数百歳の歳月を延し事なるに依り今其跡を知る事もなし

く何れの處ともなく僧都此山の麓に住せらると而已口碑
に傳来す會見郡護國山法寧寺と云跡あつて今纔かに草堂を
結ひ觀音を安置す古へは大なる伽藍といふ此の寺僧都の
居住地と云ふ蓋此僧都は誕は備中の人にして同國温泉にて
出家すと云々

山領

汗入郡九ケ村　坊領　佐手　今在家　前村　鈑戸　赤松
一谷 赤松の内　大谷 仝上　新町 佐手の内
日野郡十四ケ村　丸山　小林　金屋谷　岩立　御机
大内　米流谷　小浅　栃原　小柳　大瀧　大河原
下御机 御机の内　下村 御机の内
都而二十三ケ村
高三千二百八十二石五斗 其餘新田　但し本高三千石分明なり

伯耆民諺記巻六終

伯耆民諺記巻六終

伯耆民諺記巻七

伯耆民諺記巻之七

目録

船上山

山尼子晴久及南條中務少輔元忠再興之事
後醍醐天皇皇居之跡
本所三所権現之御舎并山之圖

美德山

山之沙汰并番場之橋之事
山傳之山姥之事
獅奥之院仙人窟之沙汰
當山初開或説并移和州吉野國峯沙汰
神之倉之事
山傳禁月毛馬之事

堀出之佛之事
諸堂并一山之圖
惣社大明神
國分寺
清和天皇勅願之事
國造傳
爲須藤丹波守國造滅亡之事
國造屋敷其他古跡
國造普傳今残龍丸太夫家并家人後藤平太夫事
國山八幡
邑名之謂
佐々木建立之事
末吉古城之事

神宮寺
國家萬葉之沙汰
北野天神
唐渡天神之事
安樂寺

伯耆民諺記巻之七

○船上山 汗入郡社領四石七斗八升余 天台宗因州唯識院支配

智積仙人の錬行旧栖赤衣上人の草創の山なり船上山智積院と号す本社地蔵権現を本尊とし脇立十一面観音多聞天を安置して三所権現と称すなりさて山の妙なる事を探るに後は峻巒巍々として鷲峰の林を移し前に滄海渺々として八功徳の浪を寄三所権現の和光の月は国家静謐砌とて有し寔に妙なる霊地なり 又本社より百歩餘り去て熊野権現の社あり不動の瀧とて大なる瀑布西の方に見ゆ南方に烏の山矢筈の山塊の山なんと云ふ三嶺鋭に聳え麓よりの山道を観れは西は巌石をたゝみたる九折三十四丁に及東は猿坂とて十四丁まてあへん峻岨の切所なり 伯州三所の

嶮山領にして地理の景色全く筆紙の及ぶ所にあらず惣て四
季のうつりかはるに随ひて花鳥雪月の風情なんそと何しか
らんや會式は毎年三月廿三日なり別当法會を修し畢りは
神楽奉楽の神事を奏す参詣群集して神徳鎮盛なり元弘の
昔時後醍醐天皇隠岐國離謫所楯籠當山聖運開給ふ事偏に
權現の依應護なりとて社壇に金銀を鏤め社頭高閣甍をなら
べ造營有り數十坊の衆徒を置れしに其後修造の外護もなく
して年々大に破壊し坊舎次第に減じて山上大に衰ふ然る
に又天文十三甲辰の年山徒等此山に與力せし故傾國民處
日久しき時に國兵蜂起して太く干戈を鏤此國社閣及坊舎悉
く放火し神器什物焼失す然るに殘りし大衆山に住する事不
能とかや其後當國前太守佐々木民部少輔尼子晴久天文二
十二癸丑の年再興して神光を輝し南海上人本願として遂

に社閣營む事整て三十餘の坊舎建にけり寺僧も聽て帰山
し天正二十壬辰南條中務少輔元忠同左衛門督元清又再興
す然ども後代々國主の修造なり此山隆盛の時は坊舎數十宇
なりしが次第に減じ或時は三十坊となり又或時は十二坊
となりしが漸く今はたゞ一坊残り此所彼所に昔時の坊跡
は礎石のみ空しく餘して寂に興廢不時とは古今感考不
斜とかや
晴久再興の棟札天文二十二癸丑年九月大檀那佐々木民部
少輔晴久沙門權大僧都法印良賢撤白とあり又南條建立の
棟札天正二十壬辰年二度の建立奉修造三所權現大檀那加茂
氏南條虎熊元忠同左衛門督元清武運長久家門繁栄の所と
記す今に両札社内に欽天皇御座跡は本社より戌亥に当り
三丁計り去て東西十丁余南北十五丁の地なり境内寛平にし

十て辰の方にあり長俊佐内又年にも一夜堀て丑寅の方にあり
幅十間程に長三百間にも見ゆか濠堀なり
天皇此山に臨幸の次第御製の事ありて古城を云ふ長俊沙
決述る所に誌す故に爰に略す
昔の坊舎の地は今猿坂を登りて堀の中と称する處なり礎
石とも精く残れり坊舎今ある所は大乗院一院のみ残る然
れとも山上にはなし一里麓の竹内村と云處に有て本山の
寺號智積院と称す是も近年衰へて今は法會神事等は唯識
院末山よりして輪番に是を勤む本會式三月廿三日末の會
同月廿九日竹内村当山の食地なるゆへ一切諸用此村より
りけて添神木五葉松二本古木大杉六本あり
○美徳山 河村郡山領百石 天台宗別当院支配
山の傳に曰人皇八代孝霊帝の御宇より山号あり四十二代

文武帝の御宇慶雲三丙午年役の優婆塞白雲峻嶺を攀て新
に神窟を開き子守勝手蔵王三處を安置す五十四代仁明天
皇嘉祥二年釋の慈覚大師神勅ありて刹柱を建て釋迦弥陀大
日の三佛を安置して浄土院三徳山三佛寺と号す往古は三
千坊といふ中古源の頼朝公当山深く再興ありし此時より
て社頭三十八宇坊舎百余山領一萬餘町の田畠高三千石な
り其後山領次第に減し社閣も年々廃して山の衰る事時久
しとかや然るに羽衣石の城守南條伯耆守是を再興して社
閣十一宇となし坊舎十二坊を置山領五百石となる又慶長
年中修造ありて山領國印百石となる坊舎又減して三院と
なる已来して修造代々の城主の修造なり此山は蓋聞吉野
葛城を移りて古國崎の山なりと云一躰岩山にして然も鋭
く左右を望〆ば百尋の谿谷傍山峨々として白雲岫を出世間

山上の社閣は岩を彫て懸作にし峪を穿て徑磴となす倭國
に沙汰す嶮難の山なり
本堂 方五間 麓にあり本尊弥陀脇主釋迦大日の三尊を安置
す會式三月十八日神幸あり此堂の前にして神主奉幣神楽
を奏す是より天神坂ゝ大の嶮磴の徑なり此坂口に小き橋あ
り宿居の橋と云ふ然れとも其の謂れを不知
天神社 方二尺五寸 是より軒端の室まで徑道なれとも道よ
し
軒端權現 方四尺 此社より子守の堂へ行程三丁餘りの徑道
なり此道を櫻の馬場と云ふ昔左右に櫻並木あり神馬出現
すと云ふ然る故を以て亦か称すとかや
子守權現 方四間 是山の本社なり本地文殊此社へ望に徑道
より横なり左に方二丈も有寛平なる大盤石あり[illegible]して待

つき岩と称す此石の上に立て四方を瞻望すれは遠近の風
景寸眸の間に遮る尤も絶景と称して百尋に沈む幽谷なり是
より勝手の堂へは程ちかし
勝手權現 方四間 本地弥陀脇主地蔵観音
推鐘堂 方二丈
鐘渡り三尺五寸 此所に行者腰かけ石と云ふあり是
より牛の脊馬の脊と云て石磯の徑道にして大難所あり其
間八間余も有へし此所の傍に亀の頭の如くに穴明て往復
の人、蔦なとを通し置ク穿して鼻くり石と称す向に鋸擘へし
十丈余りにも見ゆる高根あり小鷹の山と云ふ上に一本の松
あり天狗の羽休の松と云ふ左右に木深き山あり是を東高
山と言也又此谷に屏風岩と云ふあり谷馬の脊より見ゆ、よ
かし屏風岩は幽谷なれは望に分明ならす
經堂 方四尺ち

観音堂 方三間 此堂岩窟の下にあり岩と堂との間を往来す
呂て胎内くゞりと称す すさましき処なり
元結懸堂 方二尺 山上の人此堂の垂木に紙をくゝりて通る
是より少し行けは投入堂見ゆ多くは爰にて遥拝す此所に
大なる杉二本有り是を男女杉と称す此地より投入堂行程
百歩余道と云事なくしてなめらかなる岩嶺に少し足溜り
の如なる硲をつたふ往復すたやすく人倫の及ぶ所にあら
す
下山善神 方三尺五寸
愛染堂 方五尺
投入堂 方三間 蔵王権現を安置す本地は釋迦弥勒多宝なり
子守勝手蔵王を都て称して美徳三所の権現とは称すなり
亦此堂をも投入堂と云ふ事は岩山の窪なる処に投入たる堂

の如くなるゆへ在（に爪カ）称すとなり上は数丈の大盤石覆にかゝ
り下は百有余尋の巌谷につゞき而も蒼苔なめらかなり誠
に無双の峻難なり
堂上に覗きたる石あり笠石と云此岩の鼻に鐵環六つあり
渡り二尺余りに見ゆ御舎造立のとき工道を設し為になせ
し環ならんと云傳ふ宝永年中國守より修造の時も工道を
なせしも此環輪を用ひしとかや又大なる岩につらぬく環輪
なれは其耳に大なる葛を通しつる程の痕あり常は雨露霜
雪に朽ちして環岩の差別分明ならされはそれと見分る人
もなし全く環輪ありと云事を人さらにしらす然れとも
投入堂の奥に仙人窟と云ふ有 又山後の岩窟を云なり 當山奥の院と称
す投入堂の笠岩を上り百歩余りの岩径あり天狗坂と云岩
の磴あり是を越行は一つの大なる岩あり内暗くして人

なし此窟奥の院と称してあなと云葦山の傳にもいふ然れ
とも人倫足を断ぬ地なれは山傍に見ぬ事なし只傳述する
のみにしての事なり然るに宝永の修造の時彼環に葛を通
し桟道設し便りなり大工笠岩に攀登りて仙人窟に行ける
とて此旨を語るに依て是を誌す
前に云女夫松の下に大成岩一つあり其脇に一つの少しの
水溜あり馬洗の水と云權現神馬の洗水と傳来す
山の傳に此山に山焼あり一聲さけぶときは山を貫か如し
と云へり
當山麓に坂本と云ふ村あり此所に板橋あるを番場の橋と
云ふ往古山隆盛のとき此處に関所をたく然る故を以て此
橋を番場の橋とは称すなり今俗誤てまんばの橋と云なり
此橋修造國守の造營なり長さ　坂本より三町餘行て

少しの人家あり門前と云て山領なり山林竹木國主免許の
境内東西二里南北一里余領内高二十五石余檀家三百余家
知行處は山より二里さり三院の号は法明院善領院龍城院
是なり
往古の院跡と云所は今の寺ある向の山なり山門の跡と云
處に大なる石あり此地を九曜の千軒と称すなり往来より
行は左に見ゆ山體なり
或記に曰當山は文武帝の御宇慶雲三年に役の優婆塞山を
開き光仁天皇の御宇宝亀年中に子守勝手藏王三所の權現
を安置して都て三十余社を置神倉に新谷悠村に本堂各本
地薬師なり合谷に峯の薬師南関谷に不動瀧を置き爲國峰
伯州修験等年々秋毎に入て行法をなす本所和州大峰を寫
すの山なりと云ふ神倉は邑名にして三徳より又奥の山里

なり此山數百丈あらん岩嵬也其嵬中に大なる石窓あり內
に紙經すと云然れともこれ人倫の及所にあらす又岩窟も
今蒼苔再々たれは何れとも只口碑の傳のみにして悉知人
もなかりしとかや
當山に月毛馬を乘馬にして入事を禁するなり是れ神馬月
毛馬なるに依てなり或人月毛に乘て登山せしに俄に病悩
ありて遂に命を断と言
寶永三丙戌の年八月十二日夜龍藏院の僕文七と云者蒙瑞
夢於山內數の古佛并に佛具劔刀を堀翌年因州於城下開帳
す其時太守御一覧あり今爲宝物本堂にあるなり
堀出之佛
十一面觀音　自在其長九寸五分重さ八百目
無量壽佛　五寸五分　二百十六目

藥師如來　五寸三分　百七十目
誕生釋迦　四寸七分　百目
身生代鏡　渡三寸三分裏に五智如來あり
寛治七年四月五日と彫刻す
多宝塔　台渡八寸五分高さ二尺五寸五分
獨胡　五本
己丑
○惣社大明神　久米郡國分寺の邑鎮座八橋野
伯州不二の大野六里に近社領
祭神一座尊号大己貴命也出雲國杵築日隅の宮と一躰の神
なり又國作り命とも云
日隅の宮は大社の事なり王城より乾に当て日西北なる

ゆへに日隅の宮とは称すなり
當社は諸神惣鎮の靈社となす故に惣社と号すなり此命は
上代の古法をあらはしあまねく日域の大道を見倭國の邦
号を定め給ふ故に國作の命と奉申又已貴の命と崇めたま
ふことは大は大聖の徳已有に持つ貴は至敬崇の義なり貴
号を称奉諸神不多
天照大日靈女貴此両神ありして他神に此号無し文武天皇
御宇諸國を改知ありしときに國府國分寺の両村を國の分目
となすて諸國に置かるゝ依て國分寺とは言也此時一國に一
社を建らるゝとかや

●國分寺　同所寺領今禪宗定光寺末山
護國山國分寺と号す本尊薬師如来往古は大伽藍なりしと
傳へて古寺の跡を残せり礎石数も今に彼地に残せり今は

寺号のみにして纔の草堂の如し平僧寺なり
當院草創は人皇四十五代聖武帝の御宇天平年中造營あり
亦諸國に当院の号ある事は其前朝推古帝の時國毎に國分
寺を置る太子傳に曰
推古天皇二年甲寅太子御歳二十三歳此國天王寺而已ニシ
テ外ニ堂塔無シ故ニ諸國ノ國府毎ニ建立大伽藍シテ被號國分
寺ト云々

△師ハ民談記ニ會トアリ

●清和天皇の御宇貞觀五年諸國五穀不實に依て為國家釋の
賢永伯耆講師を任傳燈大法師行る賢永圖一万三千佛の觀
音像欽一切經而講師を置て黎民の愁を助けられしと云

●國造傳
續日本紀曰國造は國造と訓す人皇十三代成務天皇初而國
郡をひらき別封堺置國造及二十六代皇初て改國造而歷代

皆謂國司至四十二代文武天皇改國司称國守蓋國造の名目
自神武之時有其号と云々
古の國造今の國守なり往古以國守称國造也
當國の國造大祖大米足尼石川國造と云此傳舊事本紀曰波
々木之國造志賀之高穴穂之朝の世弁邪志之國造之同祖兄
多毛比之命の児大米足尼定賜國造云々
志賀の高穴穂の朝は人皇二十一代安康天皇の朝さ云ふ
なり
先代續旧本紀に石川の傳あり然るに依當國の國造を大米
足尼石川國造より傳譜せりと云ふ今國造なし蓋石川の血
譜今北野菅神の社人靏丸太夫に残りて傳ふ石川國造とて
不入岡村にありけるか天正年中同郡今倉の城主須藤丹波
と口論に及ひけれは遂に須藤か為に焼討にせられて亡命

し畢ぬ此時石川の姓を断絶して其後國造の号なし彼乱亡の
時石川一人の女子ありし小御女と云て十歳許なりしを臣の
後藤平太夫と云もの小御女を抱て靏丸か家に迯忍ひ遂
に靏丸か子となれて程なく孫を誕して其子成長して山城
と号す夫より今五代に及ふ其胤靏丸對丸と云不入岡村に居
住す前臣後藤は大阪慶元の作乱の頃よりして處を去り終
に行方不知とかや然れとも彼か末に傳へて後藤某とて今
に此村に民家の有とかや

國造屋敷

今に不入岡村に其跡地あり字を田中と云田畠なり二反余
にも見ゆ國造滅亡の時神器什物焼物を埋めし所と傳へて
小き森あり其地今に穢さいむ此森の西北につゝける田を
國造田と傳へて北田西田と称す東南は大川なり此流國造

埼離の瀬とて石川瀬といふ小墳墓は今若宮と称し小社を設
なる松一本あり又屋敷より惣社への道を國造道と傳来す
惣て忌ある人は往復を禁するなり

○國山八幡 沖入郡國信邑社領十六石
祭社一座神功皇后なり 人皇五十六代清和天皇の御宇貞観
年中当郡稲光の庄國信の村に鎮座ありて云御舟にうつら
せ此村の灘に着船あり其地を船磯といふ小蓋聞國山八幡と
号する事は國を治民を守るの鎮座の山なるゆへに國山八
幡とは称するなり御船着岸のとき御旗鉾をたてし處を幡鉾と
云來り当村を國信といふ左右に連なる村を末長末吉と
云小蓋聞爾称する事は当社鎮座の時よりしかなり神能國に
信あるか故に國信とす末世の神威を壽き末吉と号す神徳
萬齢不易に長なる事を祝して末長と称するなと云ふ。

社記に曰、源右大将頼朝公建久二年に当社再興佐々木四郎
高綱勉之とあり又社説に頼朝公の雖再興誠は佐々木建立
と言なり此再興願主佐々木を按するに佐々木四郎高綱は
平家滅亡して後於鎌倉頼朝群将闘國割與あるとき戸井の
杉山合戦の日頼朝佐々木へ欠國堅盟変するに依り與國を
辞し館に帰り入道し高野に入と古戦書に述る事分明なり
然るに高綱当社建立のときなき事なり是は雲州富田の城
主佐々木民部大輔尼子晴久当國領するとき建立なるへし
同姓なれは後世に至りて世人社職ともに謬り尓か傳来せる
なるへし都て当國の社閣晴久再興造営多し是又世俗謬りて
佐々木四郎高綱と称するなり
末吉に古城あり大山の衆徒經悟院（古戦書には教蓮院と書く）居城す永禄
十二年尼子晴久の為に落城し其跡へ勝久臣山中鹿之助楯

籠る然るに元亀二年六月下旬吉川元春攻城ありて亡城し
山中を掘とす
此攻城の事古城末吉の城と云ふ處に述ぶ
永禄元亀の合戦のとき民家及宮殿焼亡し累代神宝社記悉
く一時の煙となる其後漸及造営然るに吉川監物甚建立あ
り及当國前太守中村伯耆守慶長年中社頭美を盡造営有り
祭祀神事此時初て行事をなす社領百二十石を寄附すとか
や古はやふさめの神事とも有りしにや今馬場的場跡と
も今明に残るなり

神宮寺　同所　古真言宗今は禅宗

昌久山神宮寺と号す古寺の跡は今宮山の北傍にあり宗も
真言宗なりし所か別当も今は専ら神宮寺と称するのみ爾る
て宗門も禅宗なり古戦国の砌焼亡して何の書きたるものも

なり当寺の事國華万葉集に述處は神宮寺を川村郷に建寺
領四十石とあり然れ共当院は昔より汗入郡國信に建つ即ち
國山八幡宮の社僧なり

北野天神　久米郡北野村

當社は皇都北野菅神勧進せし御舎なり故に里名も北野と
は称すなり　この神は和漢の二教を観察し文字和歌の御祖
の神たり天文年中佐に木民部大輔尼子晴久再興あり然る
に享禄己丑の年野火社頭にあふれ神宝及記録等悉く焼亡
す時に安楽寺の住僧正受院榮信天正八年に神容及内殿を
新に造り元和二年当國の流人里見安房守忠義方三間の御
舎を建つ夫より續々として造営無為間断抑当社の神譜を按
すれば天照大神孫子天の穂日命十四世野見宿禰四世參議
正四位下勘解由の長官兼式部大輔菅原是善乃御子右大臣

菅原道真公是なり神号天満大自在天神と称す唐渡の天神
と称す尊号少名彦命云也

○安楽寺　同所

今寺なし寺号のみ残りて纔なる観音の草堂有り昔の寺跡は
社頭より少し間あり其跡今に分明なり中興開山は正覚院
栄俊なり栄俊は於雲州能木村清水寺の僧なりしか然るに天正
年中に寺を轉して当院に住せり

伯耆民談記巻之七終

伯耆民談記　巻之八

伯耆民諺記巻之八

目録

大宮大明神

市場邑之事

岩倉城主小鴨左衛門尉元晴親兵神盟之一札之事

退休寺

岩井垣之城主蔭津豊後守平毅志當山造營之事起

玄翁禅師之事

宝物端奇之事并若芬玉澗之事

三所殺生石并華清寺之事

慶叢寺七世梅天和尚之事并川村郡阜立地蔵之事

玄翁耶須野殺生石引導之事并三百年自巖山禅師勘当之事

惣持寺嶽山五哲之事
當山境内并堂閣之圖
解脱寺　世人唱山号而曰阿布縁
米子本教寺之聖人圖壽院日要瑞夢之事
自紀州前大納言頼宣卿御簾中養珠院殿御寄進之事
當山精舎之事
大日寺
南條伯耆守元續再興鎮守棟札之事
大傳寺
本朝三所九品之事
大傳寺古今建立之事
平氏悪七兵衛景清廟塔之事
當家前羽林次將　清源寺殿靈碑立之事

伯耆民諺記巻之八

○大宮大明神　久米郡大宮村

當社は京都下鴨を勸請す人皇百二代稱光院御宇應永年中此地に鎮座して大宮大明神とも又小鴨大明神とも号す祭神二座御祖の神なり或記に曰宮之次大成非大宮、曰上古以久称大宮云々当社は岩倉の城主小鴨家代々尊敬他に異なるゆへ岩倉隆盛のときは神威も増々盛にして春秋二度の祭祀の神事ありて社頭も甚美々しくせりといふ又近村に市場と云所あり大宮春秋二度の神事前後七日の馬市此所に設自他の西民於此市牛馬を轉しボりとかや然るゆへに處の名を今に至て市場と言となり

天正十年の五月当岩倉の城吉川の為滅亡す此合戦前日左衛門尉元晴既近の士十二人今度の合戦未練の振舞なす事

なりかれと大宮大明神へ誓盟の連名しるしたる一札ありし今に宝
前に欽其板形中高にして竹ほりの如く幅七寸程に長一尺
七八寸余りにも見ゆ名乗の一字は判にかゝり字性しかと分
明ならす右士列の次第

小鴨左衛門尉元晴近仕之者

舟原弥三郎　成　在判
尾崎三郎次郎正　在判
北村甚九郎　綱　在判
岡田又次郎　綱　在判
細田彦四郎　晴　在判
日野甚五郎　晴　在判
杉森善右衛門家　在判
石川又三郎　瀬　在判

戸蔵彦五郎　綱　在判
高木蝶弥五郎　久　在判
成相三加助　吉　在判
安倍助太郎　真　在判

右衆中於席口表申合儀相違有間敷候何程之儀候
共互に見捨申間敷候此旨於偽者大明神殿之可蒙
御罰之者也仍而如件

天正十壬午年五月五日　敬白

此の合戦五月廿五日の事なり遂に元晴落城して羽衣石城
城に走彼十二人の近士も当日皆戦死此の時岩倉滅亡して
其後城なし合戦の事は古城岩倉を述る所にしるす

退休寺　八橋郡　禅宗山領二十七石余
開檀当郡石井垣の城主箆津豊後守平敦忠延文二年に建立

して金龍山退休寺と号す開山は玄翁大和尚今能州諸岳山
惣持寺の末山なり古本は奥州にあり
依　勅遣号熊照禅師と称す俗姓越後國陸上郡荻村の城
主源朝臣義連の息也為出家玄翁と曰
本尊観音代々國主より建立の地なり柳当院草創の事は敦
忠亡妻の墳墓夜毎に灼きて炎氣の中に亡霊容をあらはす
亦悪鬼顕はれて是を呵責なすにより敦忠大に是を患ひ有
験の貴高の僧を招きて追善供養をなしてとむらふといへ
とも更に呵嘖止時なし然るに近邑に飯野の茶屋を設け匠
有澤若狭を亭主となして千僧を接待す時に延文二年丁酉
の秋八月十三日斬損僧六百三十人に及玄翁を請待す若狭
和尚の佛相を慮て我を香く詰る上禅師やかて灼墓に望香
花晒水をなして一つの偈を述て其文に曰

と示し給へは時に亡霊現れて九字の法文を一首に詠す
錯を知なから罪はきれ付尚なとか佛に成らさらめやは
斯の詠り即時に容は失亡せりへ成佛やしたりけん其夜より
墓も灼も止りにけり敦忠多年の愁一時にとけの歓喜ける
車なしあならすとかや其後敦忠語曰是より北に当り海あ
り近き頃夜なく丑三つころ海上より一つの光玉飛来て
南の山林へとまるとかや和尚黙想して曰光玉留る地に
必池あるへし其池中に霊佛あり故に龍神より捧けらるゝ燈
明なる事何そ疑ふへき事あらんやとて敦忠を誘て彼山中
に入見給ふに一つの大成池清潔たるあり聽て禅師傍なる
岩上に黙然として禅に座して観給ふ然るに此池俄然とし
て氷波卍をたゝき大いに池中轉倒して大龍出現し火焔を
吹事甚なり時に禅師竜に向て一句を偈し給へは頭をうな

たれ其儘水中に入しか忽然として美女に化して今の慈救
に依り即身畜生を脱して佛果に至る願くは此地を埋め一
字となし旦暮勤行間断し給ふ事なかれとて一尺余の觀世音
菩薩を禪師にたてまつる其儘化して金龍と顕れ即時に天
上すなわち池水乾きて堅固寛平の臺となる萬齢不易の瑞
を現す禪師聴て即日卓錫して敦忠高閣の精舎を造營す此
時禪師しはらく此地に退休すへしと宣ふ此事を以て直に
寺号となる又金龍を以て山号となして金龍山退休寺と号
す即ち今の退休寺是なり本尊の觀音は龍女のかつき上し
一尺余りの靈瑞の薩埵なり本堂の後に少しの池あり往古
の池跡と傳へて大旱魃も乾くことなしと云本堂に玄翁禪
師古更和尚中古禪祖朝國和尚の影あり開檀敦忠の牌あり
法号大興心空大居士霊と称す本坊大慈院慶聚院西來院古三

院をこたらす本堂を轉り往す外に下寺普門院林松院にて
両院あり鎮守山王權現

寶物

獅子尾之拂子
玄翁和尚七條の袈裟
、野狐疫病の守りにて参詣の輩少し宛たち貰って小兒の
腰守に入此袈裟の事國華萬葉にも述へたり
唐木の手杖
箱黒塗當太守松平前伯耆守源朝臣綱清寄進
十六羅漢繪像　十六幅
筆漢朝若芬玉澗繪絹作布施主開檀豊後守敦忠寄附
玉澗と云圖三人あり然れとも若芬玉澗秀逸にして稀し
かゝる遙に往古の事也今一千餘年の前の人なり漢土八

景圖繪を定め其詩を賦せしも此玉澗の作なりと言ふ
或記に曰那須野殺生石玄翁和尚引導の時此石三つに砕け
て一つは那須野湯村にあり大きさ三尺四方餘りに見ゆと
云ふ一つは奥州白河郡中寺村常守在院慈眼院と言ふ此一つは
南部にはあらず作州高田の華清寺の院中にあり此石に一
つの不思議あり華清寺に詣る人每に殺生石と傳ふる故に
散米して禮拜す其散米を近辺の鷄群参して飼食すれとて
石に上るや否や足かたわとなる然るに依て此寺近辺の鷄
足すなをなる鳥希にして只一羽もなしと言常に此石には
垣結廻し白棉にて殺生石と號してあり
當山慶聚院七世箆津村慶要寺の開山梅天賢甫禪師南條中
務少輔元忠の時領知境の論談ありて梅天元忠に頼んて検
者となり大山権現の御堂の前より退休寺の門前を限り

て傍示を分つに遂に東領傾となる元忠大に怒て我領分に
在て他に組し非論になす事其法師大なる僻者なりとて聴
き梅天禪師を脱衣面縛して如牛以葛鼻に摑をさし高札を
前に立て背中に大罪人と大筆に誌せし幟を立東三郡を引
廻し公橋の放端の瀕に於て死罪を行ふ時に梅天曰吾今死
罪に行なはる寃あらば可出血無誤切なとも可莫血と言如遺
言血は不出して水の如なるもの出るとかや此故に代々其後
中務誕生每に塞鼻の愁ひ絶ずとかや然るに依地藏菩薩の應
護に依後は生子も塞鼻の愁は止ぬ此時中務羽衣石十滿寺
谷に方間の堂建立して地藏を安置す然る故に此地藏を鼻
立地藏と云亦延命地藏とも稱す此山道を鼻立越と云ふな
り
梅天死罪鼻立地藏之事古城羽衣石を言處に詳なり依て

此には荒塲を述ぶ

玄翁和尚は能州諸岳山惣持寺二代峩山和尚の弟子十哲の
内にして五哲の末なり下野國那須郡湯村の殺生石の導引
を峩山より五哲の大徹に述法あるを遮て玄翁前に那須へ
走り石面に向て香花を備へ佛事をなす文曰
汝元来殺生石　石霊自何處来　今生如此哉　惹々去々
斯引導あるによりて即時に佛躰真如善心となり其後人民の
愁も止りぬとかや然れども此事師命なきに玄翁遮り給ふ
ゆへ峩山弟子とし不給して三百年勘当あり然るゆへ何ず
當山繪像黒衣なりと云ふ

惣持寺開山桂巌　二代峩山
峩山五哲　大源　通幻　無端　大徹　實峰

解脱寺　日野郡阿布縁　古は阿布禮　日蓮宗本寺身延山祠堂三十石

當山開基權律師日感上人なり時慶安三庚寅十月十二日
法要山解脱寺と号す本尊高祖日蓮大上人の真作なり境地
を覗へは伯耆西端にして日野奥山也行道甚嶮岨難路の山
道なり　抑高祖の事は蓋聞鎌倉松葉か谷の本國寺の高祖な
り然るに人皇九十七代後光院の御宇貞和元乙酉の年高氏
将軍の時松葉か谷の本國寺を京都六條堀川にうつして今
の本國寺是なり開山は日静上人俗姓は尊氏将軍の伯父な
り相州本國寺三代の住たり其頃日静の俗縁日野中将とて
当國へ左遷して日野郡へ住居あり此人へ日静より被遣し
高祖なり中将在世の時は持佛堂へ安置ありしか亡命の後
持佛堂も大破し誰れ信する人もなくして阿布縁より四十
餘丁行て笠木村と云七曲田の泥中に埋れ給ふ事歳月久し
或時七曲田の光り輝く又此里阿布縁の繁氏庄八處の社人

肥後霊夢ともあり彼田中より堀出て聽て草堂を營安置す
時に慶安三戊子年十一月廿九日の夜米子覺應山本教寺の
僧素園院日要瑞ありて吾は是日蓮上人作り今當國阿布縁
村にあるなりとて發向して賜せよと有り
くつれてもまたも佛はくされあり
との給へは聽て日要賜りけり
本の心の法師するより
斯て日要夢覺て難有も又不思議のおもひをなし　默然と剗
て座るに程なく夜も明ぬれは自身も門戸をひらき見れは
一人の旅人立いわく我は問へは某は雲州の舟頭なり松
江城下桔梗屋小左衛門と云者より当寺へ銀子幸便に罷越
候當國日野郡阿布郡村に霊瑞の高祖有今わつかに草堂
安置す是を建立せん為に灰吹銀を当院に遣せと日要に

渡すにより弥日要難有おもひて米子町中尾善右衛門と云
ふ法華大信者あり彼を招て夢見し以来の事を委しく語れ
は聽て善右衛門阿布禮に走て彼草堂を望めて木像の古佛
の高祖一躰あり是そ則霊佛なるへしと村民を近つけ此高
祖に如何此奇瑞はなきやと問ふに民等云けるはこの高祖は近
辺の田中に埋てありしか彼田或時光明を放つこと夜毎に
あり民とも怪しみ思ひ聽て田を穿ち見れは此高祖たはし
ますに依り取上奉り草堂を營み入奉る然るに近頃此堂に
人もなきに法華讀誦の聲あり追日其聲高く聞ゆ又毎夜深更
に及て響口なく此村今年風病疱瘡一円に病悩の新の程は
人も多く損す然るによりて此高祖に病を祈るに両病とも無
難に調依て此近郷は氏佛と尊恭く参詣すと語善右衛門信
心弥増て聽て帰此旨を日要に語即日出雲へ走り桔梗屋小

左衛門に対面し日要へ灰吹を寄附せし事もなく又阿布礼
の高祖の事も遂に不聞と云彼云是難有事哉元より法華信
心の桔梗屋聴て雲州一圓を勧化し米子へ立越本敬寺並に
中尾善右衛門と三人阿布礼一寺を造営し法要山解脱寺と
号すなり時に慶安三庚寅十月十二日今増々造営造足り誠
に霊験殊勝の高祖にてましますと縁起当院にあり　当國守
より享保年中に祠堂米御寄附あり並に目見へを免許ありと
まの寺社役より件の證翰あり其文に曰
今度願之通祠堂米三拾石在貸御入被遣候右之利米九
石宛毎年受納可被申並住職一代一度之御目見被仰付
候後代為證札如斯候以上
因伯寺社奉行
享保二年　森宮右衛門恒親　在判

解脱寺　具足院
具足院は當山世日應と云代々聖人也也
紀州前大納言頼宣卿の御簾中養珠院殿より御孫子当國の
大連枝御武運長久御祈願承り御下し文あり其時御掛羅御
帷子重被成下御端書あり今宝物として拝見す

大日寺　久米郡櫻村大台宗　因州唯識院末山領
開基惠心僧都と傳来す胎金山大日寺と号す中興鼻祖秀栄
法師時に文録二年なり本尊座像四尺の弥陀佛惠心の瑞作
也古は高野を移す大伽藍なり院を三所に賦て上院中院安
養院と号す三百余宇の坊舎ありと云て其跡を圓定坊自在
坊と凡字に移す然ル共代々にたをれろへて今只一寺のみに

して而も小寺也本堂の前に草堂あり古佛の阿陀観音薬師
多門天あり各四尺餘りの木佛なり昔此寺隆盛のときの佛
と覺えたり寺より六町餘り行は往古の寺跡あり礎石とて
精しく集る本坊の寺跡と云處に大なる古木の銀杏あり此
跡の道に年ふる菩提樹あり上院に大日堂釋迦堂薬師堂中
院に文珠堂観音堂藥賢堂安養院に弥陀堂經藏ありと云其
跡今に殘りけり安養を極樂の奥と号此地殊に大なる五輪有り
頼朝の廟と傳ふ其外無縫堂藍塔古佛多し悳心遷化は寛治
四年享保年中まて凡七百年餘に及然れとも當山の開基は
長徳より前つかたの事なるへし鎮守牛頭天王也当社南條
伯耆守再興の棟札あり社地けは閑き盛茂したる山なり

棟札

一切日皆諸佛皆以德干時天正九卯月吉日

大工中尾勘左衛門
奉遷宮牛頭天王棟上一宇大檀那加茂氏南條元續
羅漢皆行満以斯誠實語我常吉祥時
導師權大僧都仙慶本願上院圓定院周快敬白

○九品山　河村郡矢地村禅宗長和田長傳寺
木山祠堂百石外田地三町余

蓋聞当院は人皇六十四代後一條院の御宇萬壽元甲子の年
に建つと九品山大傳寺と称す大和國の當麻寺の供養を此
地に引移す故を以て處の名も引地とは云とかや或記に曰
九品山地在三國建精舎之處各三所本朝於置五畿内山陰西
海両道の三所云々
本朝三所九品和州當麻寺伯州大傳寺於九品有處の寺未
記其國故略之

其後年月遥遠にして南條前伯耆守貞宗當郡羽衣石に在城
して應安四年辛亥の年再興貞宗嫡宮乃少輔景宗應永年中
戊子春三月羽衣石の谷爲菩提所一宇の高閣を造營して正法
山景宗寺と号す此時景宗亦當山を造營するに依高閣層楼美
々として甍をならへ大伽藍なり雖然当寺羽衣石領地たる
により当院を兼對す慶長五年羽衣石亡城の時景宗寺大傳
寺兩院共炎焼す此時什物記録悉く一時に灰燼となる
景宗を貞宗三男と云説あり當山の記にも爾云然れとも
南條家の傳には正嫡と誌す
往古の記録焼亡の時景宗寺の住僧仙長禅師其年の夏より
雲州へ立越て俗縁なる杉谷左太夫と云杵築の神職の者の
方にありけるか羽衣石亡城に及寺院煙焼せることを聞や否
馳て帰國して長御田邑へ草庵を結んて歳月しはらく安居

しけるか慶長十年酉の秋大傳寺の供養を再興す昔景宗寺
なれハ執行の規式を敢て潤年の秋毎に九月十九日行之此時
十王堂撞鐘建立すと傳来す二十五有の菩薩の面も此時出
来即ち當時の年号を面裏に彫刻す其後火難ありて彼面過
半焼亡して今ある處は其残面なり
元禄十三庚寅の季長傳寺の　世嶺堂和尚感古慈今發中興
志大傳寺の三字を願官所事久しく爰免許再ひ喚廻大傳
禅林寺を建立し及本尊二十五の菩薩を新たにきざみ尊像
を安置して今七百有餘の古齢をあらはす此中
昔時卓錫の日今至及七百年余の歳月
然るによりて嶺堂禅師當山中興開山なり此時よりして法經
再ひ始て起り現住愚門和尚今二代に及ふ開山嶺堂其前長
傳寺に住する事三十七年此間常に淡粘淡蓄財宝米百石の

代銀四貫三百匁太守へ訟へ在中牛銀に貸出さん事を願ふ然るに大願有免許て毎歳利銀当院の常産となる亦三丁余の田地を求めて当飯糧

當山は於本朝三所に九品蓮臺の靈場なり古跡は千歳の松其外喬木盛茂して古廟山林に群散す就中院中に平氏悪七兵衛景清塔あり蓋聞此者信者なる故三所の九品道場毎に法号をあらはし塔を置くと傳ふ是全く蓮臺の地なるか故なり

御太守前伯耆守羽林次将清源寺殿の御牌あり嶺堂禅師此地往古よりして本朝三所の靈場なる雖然今無縁の地なる事を愁ひて是を太守に告るに聴て有命免許の地なるとかや依此因縁近年願之立之而為國恩当院代々捧燈食養と言

又当院長傳寺為末山事は近年の建立なり洗心嶺堂禅師於長傳寺造立なるか故を以て長傳禅寺を本山となすなり

伯耆民諺記巻之八終

伯耆民諺記巻九

伯耆民諺記巻之九

目録

長傳寺

仙長於長郷田安居草庵之事

長谷寺

折吹山之事

長谷觀音

長曽部尾張守信連之事

不動之岳之事

勝又寺

護國院殿并代々太守靈牌建之事

尾州長久手古戦場并同所古城之事

同所常照寺之沙汰

同所将軍石之事
同國岩崎古城主丹羽勘助落城之事
轉法輪寺
小谷多兵衛尉常成之事
日吉津太神宮
八子山鹿瑞之事
山田八幡宮
山田出雲守直重之事
加茂皇太神宮
雷除守之事
清先之井之事
伯州三所の加茂之事

伯耆民諺記巻之九

長傳寺　河村郡長江田村禅宗
松崎龍徳寺末山領

當時草創は本羽衣石の菩提所正法山景宗寺の末住仙長禅師の開基なり慶長五年羽衣石亡城の後仙長長瀬田村に草庵を營み安居す其草庵年經て一寺となる
仙長草庵に安居の始終大傳寺と云處に委く述たり
干時仙長の長を寺號の頭に立大傳寺の傳をもつて次に置き山を景宗寺の山号を引用して古今一致に唱へ正法山長傳寺と称す即今長傳禅林是なり鼻祖は松崎龍徳寺三代大應壽泰禅師なり
当院開基のときは大傳寺は退轉す故に傳の字加ふとかや此時九品山は只辻堂の如にして假に粗作の弥陀

佛を置る也

○長谷寺　久米郡倉吉打吹山の麓天台宗因州唯識院の末山　領八石七斗三升余御供料五石

當寺草創は日嗣四十五代聖武天皇の御宇養老年中当郡長谷の村に精舎を建て薩埵を安置す其後都古と云人今道場根本和州初瀬山の好風を移す地とて精舎を当山に引て高閣を造營して打吹山長谷寺と号す本尊は十一面觀世音菩薩なり自在其長ヶ三尺二寸聖像春日何某か刻作なり巌の蓮座は閑落を示し御光の円通を顕すかと思はる誠に霊験殊勝の佛にてそましますり元より奇瑞普く慈眼視衆生福聚無量の利益は秋津州の外流築波山の陰より深けれは後代不易の霊地なり又山の妙なる事を覗へは後は峯巒聳峙丘阜環り周々奇石怪木の峩々たるを則当表の閻浮檀金の

敷しかと疑はる前は郊野擴濶として田隴連接し阡陌竪横其幾千萬と云ことをしらす廻瞳縦目すれは郡縣千町一望の中に瞭然たり又遥に望めは大山船上山胸中に可蓋補陀落山蓮台もやと思ふはかりの霊山なり會式は正月十八日なり両會ともに開帳あり正月會十八日の暁天福賦りとて牛玉を授る事ありて是當院の山例なり
当院打吹山と云事山の傳記に曰往古此山下に村落あり神坂となつけて側に井あり上世に天僊あり民家の婦女に化して此井に衣を浴洗して傍の石の山に乾す時に村夫是を過るに衣のうつくしきを不思議におもひ取て是を隠す欽望密閑鎖天女衣なくして天上する事叶はすして暫く是を請へともあたへされは倡誘せられて遂に夫婦となりて二りの子を生す此子成長して後父に代り家事を行ふ時に天女子

を欺いて衣の謂を説く是を乞小子ともは其事の起をしらす関鎖をいらいて衣を女にあたふやかて服し即時に縹緲として杳冥にのほる子なきさけ人て翅を追ふといへとも及ひかたき盍聞天女素より伎樂を好めば思慕のあまりに此山に登りて祭奠を供し鐘鼓笙篇の樂器を列ねて大に音藝を起し是を招くと云々彼二子鐘鼓をおち笙簫を吹ならせし山なるゆへ鼓吹の義をもつて打吹山と称するなり当山の傳には尓いへとも羽衣石山の古傳は羽衣石山に天仙ありて後天上の地神坂に説して子とも樂器を列し鼓吹となせしを此山と云ふ然れは両説異なれとも所謂天妃降りし上世の沙汰定に山秘の傳なるへし

建久年中頼朝公造營佐々木四郎高綱奉行之を建つ時に駿州富士の御狩あるによりて半はにして高綱富士野に赴くと

云ふ然れとも高綱の事は定かならす其事國山八幡の條下にも述へたゞ

頼朝造營のとき山領七十五石寄附あり其後代々戦國にして山領も減り修造の外護もなかりしとかや然るに尼子晴久建立す又当國前の太守中村伯耆守忠一慶長年中再興ありて觀音御供料として五石倉吉領主中村伊豆守余戸谷村の内において寄附あり今其田を月元和田と云今に御供田山領たるなり尓来國守よりの造營なり但二王門は今の領主荒尾殿家よりの造立なり今山領八石七斗三升四合は國守より御寄附なり

宝物

巨勢金岡繪馬　牛王　駒の角七ツ

縁起二巻あり領主荒尾前志州嵩就小泉松長西氏に有命記

之真名は小泉石州軒假名は松長雅中軒述なり
往古よりの縁起紛失して仁し山の傳に昔の縁起は東海道
大井川の在辺郷と云々所謂大川の辺御にありと云事は往
古よりの山領七十五石なりしを豊臣秀吉是を取あけ無縁
の山となるを慶長年中の頃かとよ時の住僧是をなけきて
東へ赴く然るに途中大井川の水かさまさりて渡り得すし
て遂に流れ死しけるとかや此時縁起針嚢にありけるか後
嶋田の民等取上今此村近辺の地寺院にありと云説あり
當院撞鐘今あるは作州長田八幡宮の鐘なり然るに此鐘久
米郡大谷田中に埋りありしを堀り出して当院につるなり
彼長田八幡の神躰は立像の弥陀なり今倉吉誓願寺の弥陀
是なり 又当山撞鐘は因州桜上の神社の鐘是なり即伯州久米
郡打吹山長谷寺と彫刻す当寺前々より天台宗然るに中頃

山衰へて住僧定らすして修験住職の事もあり其後暫く禅
僧住職す慶元の年中より往古の如く天台宗となる代々其
より連綿として今因府唯式院末山と成当山の後ある山の端
領主荒尾家の代々廟所あり
鎮守 下山善神 天神
長谷観音 久米郡長谷村
薩埵十一面観世音菩薩御丈ケ四尺の座像なり行基の正作
脇士廣目多聞の両天を安置す各記阿弥の作なり開基は養
老年中なり都志都古と云人此寺塔を倉吉に引今の打吹山
是なり昔の寺跡今にありて礎石とも群集す此堂を往古は
頼朝の建立と云へり
長楽寺 白野下榎村 今禅宗
誕は尾州の人長谷部尾張守信連法号樹法院顕光大居士養

和年中建立して岩屋山長楽寺と称す然るに信連孫加州へ赴くに依修造の人もなく年々衰へて今は纔の草堂の如なる禅林なり本尊薬師如来四尺餘りの座像なり脇主日光月光不動毘沙門安置各慈覚大師の作にして山躰は五尺余りの立像なり其外十二神数の古佛有享保十丑の年同郡の黎民下岩見村古都源八本願にして下黒坂生田勘助勧化をなして尊体脇主の尊容及寺塔を造営す此時佛の容中に各信連造営と彫刻あり享保十年まで五百四年に及當院は代々真言宗なりしか近代禅林となる信連居住の事は人皇八十代帝高倉院治承の夏御謀判の時平相國清盛入道の為に當國へ謫せられて此郷に居建久年中鎌倉より免許ありて加州の郡中を領すとかや後胤今に残り傳ふるなり信連は郡中日野に於て死より子孫に及て加賀へ越しとも云なり信連

居住の宅跡とも并新願寺今に此郷にあり陰徳太平記に曰古戦場不動か岳も近村中菅村と云所にあり古城不動か岳を云所に述たり

勝入寺　久米郡倉吉打吹山麓禅宗、備前國久郡虫明円通山興禅寺の末山

當院は今の備前の長臣伊木長門元和三年倉吉を領す此時當院を造営して古君紀伊守信輝卿の霊牌を安置して則此郷の道号を以て寺号となして勝入寺とは称すなり山号は金剛山と云也開山は舜才和尚と号長州当院を建る事は祥忌の霊𤲞を精くなさんか為とかや

長州備前に行て後　護國院殿の周年の忌祥今の領主荒尾家より代々恭布之

又當院に興禅院殿　清源寺殿　天祥院殿の尊牌あり当

所の士等忌月の礼拝をゆるす所謂靈牌ある事は於當所近
く故ある士とも是を安置而都て士中として寸志の御茶湯料
の祠堂を寄せ置く也
紀伊守信輝卿天正十年六月明智退治のとき秀吉とゝも
に剃髪入道し給ひ勝入と道号あり両所剃髪あることは
亡君信長の弔ひ合戰を為んか為なり
法号　護國院殿雄岳宗英大居士
天正十二年甲申歳四月九日遷齢四十九年令靈を神に祭崇
して整脩神靈と尊号す
尾州長久手古戰場并同国州古城の沙汰
護國院殿長久手に戰死し給ふ合戰の事起は天正十二年の
春織田信雄卿秀吉を亡ぼし天下の権をとらんとの深心あ
るに依り程なく信雄秀吉無楯となりて秀吉十二萬の勢を

率し出陣ありて羽黒小幡長久手に於て合戰に及ぶ就中長久
手に於て大に合戰あり時に四月九日払暁護國院殿長久
手に出張ありて大に攻戰ありしそのとき佩給ふ太刀篠雪と
号す馬は大栗毛七寸七歩なるに馮而を揃て進み給ふ敵方
猛戰勢峨然として取巻成瀬小吉諸卒に下知則攻戰す然る
に味方御陣にへたたり依て大半戰死して防戰するに力なく遂に
護國院殿永井右近太夫の為に亡命あり其時右近手勢二十
余騎長男勝九郎之助卿同於長久手安藤帯刀か為めに戰死
あり森武蔵守は伊井万千代手組熊井十太衛門か組軽卒共
放つ鉄炮に當り落馬する所を熊井半大衛門馳寄て首を取
斯て長久手合戰破れ三所戰死の事を秀吉甚怒給ひ吾長久
手に向ひ徳川聖君と會戰して三将へ手向せんとて楽田
をうち立龍泉寺辺まて押出す此義聖君聞し召れ兼て御軍

法あつて手早く人数を小幡の城へ引入給ふに依秀吉手を
失ひ途中より〆て退し給ふ其後秀吉大阪勢を以て諸所攻
城ありといへとも更に功なく〆て終に秀吉信雄と和睦〆
給ふ是全く聖君より出せる御軍法なり其故は秀吉臨勢
なるによつて迚も勝利難義と思し召れての事なり此義信
雄を捨させ給はぬ御計策に依ての事なり衆中其頃沙汰す
とかや右三将戦死之事 聖君御残念思し召れけると云
長久手は尾州愛知郡の村名なり 護国院殿戦死の場は於
長久手鳥が硲地風と云所なり 此地より五六町程にして甲
部硲横道と云所に廟あり今世人号して勝入塚と云ふ長久
手村よりは東に当る紀伊守之助卿の廟は甲部か硲より南
に当り一町程隔て多賀所と云所にあり是と云陣所は前山戦
死の場所は甲部か硲森武蔵守も前山へ陣し則此所にして

戦死あり廟前山に建と云甲部か硲より西に当り其間漸
く三丁余去て長久手邑に常照寺と云寺あり古は禅林今は
高西宗なり陰中に堺地にあまる池あり此池長久手合戦五
七の周年に当れる祥忌の日一日池の水赤くなる其分野流泥
誠にしくして今に日を不違とかや件の三将戦死の早天
当院に詣て焼香ありしとて三将の牌を立る也とかや
顕功永節大禅門　俗号池田紀伊守之助卿
鐵團秀吉公大居士　俗号森武蔵守長可
各天正十二甲申夏四月九日
二信輝卿の霊号は前に向きに依て爰に除く
護国院殿戦死の後長久手に残る品物陣具一羽軍鐘あり〆
を嘉航は尾州の大守大納言頼信郷より御尋ありて上之今鐘
まて残て同村の黎民仁左衛門と云ふもの所持す但〆此者

先祖より爾来持所也亦長久手村高千百石余の所なりに左
衛門車代々村の庄屋を勉とかや長久手より南に當て一里
隔て岩崎と云處に古城の山あり丹羽勘助家城たり天正十
二年四月八日 護國院殿攻戦あつて即夕落城に及勘助は
戦死す長久手より十六町東に岩作村と言あり此所に久岳
山安昌寺と号す禅林あり当院の記録に色金山と云所長久
手合戦の時徳川聖君御布陣と誌す今に此山に将軍石と云
有り聖君昔時御腰掛られし石なりと後世に到り斯称すなり
護國院殿知多郡木田村に古城有石累埋堀大手口其跡たし
かに残る然ル昔城跡近代國守の立林と成つて喬木盛茂す
又享保元年給地に入り同十二年新田に切開きて城跡と号
し切孫治郎と云黎民支配す孫治郎今庄屋を勉ム此孫治郎は
荒尾家の親族なりと所に沙汰す都て木田村辺近郷は池田

荒尾両家の古百姓なりしと傳来す木田村高三百八十石余り
の所なり長久手合戦の時は濃州大垣在城なり

○轉法輪寺　八橋郷副所の邑山領五斗三升二合 宗門天台宗

空也上人の開基にして湯谷山轉法輪寺と号す即ち上人遷
化の地なり堂の傍に墳墓あり年月遂に移れば蒼苔由々と
として いと物あはれなりされども廟塔鄰々として昔を残
す抑此上人は日嗣六十代帝延喜第五の皇子なりし縁起に
述たり
空也上人の事本朝帝王世系に醍醐天皇の皇子と云事な
し此帝の皇子四人一は朱雀院二は村上帝三は兼明親王
号二品中務卿前中書王四は高明親王西の宮左大臣に
なり外に皇子なし 但空也上人は幼時より佛法に入内裏

を去給ふ故に京傳に除くや又蟬丸も延喜帝第四の宮と
世人称さといへとも其傳なし或記に曰く蟬丸は仁明天
皇の時の人なりと云ふ
然るに此皇子幼年の頃より佛法に心をよせ遂に内裏を去
て諸國を修行し此處にして遷化し給ふとかや時に齢七
十歳上人自跡の一翰あり寺の什物として有けるか中頃の住
僧いかなる事にて失ひけるにや其寫残りて有本尊は無量
壽佛空也の像各木像なり左は修行瑞容右は遷化の靈躰な
り
上人修行の像鼻かけ有けるか正保四年の秋倉吉の士小谷
多兵衛常成應君命て此郷の横見に出かに瑞夢を得て木像
の鼻をつぐ末世の奇瑞とも云つへき靈佛なり件の瑞夢記
一巻常成著して寄附ありし時に正保四年丁亥九月下旬と記

す當院縁起一瑞夢記一巻本堂にあり
上人自蹟寫其文に
愚僧書置一通抑拙身根源は延喜帝王の雖爲末子成生
依思惟儀開發心門出窟室床趣念佛三昧の道場然無二
抽丹誠日本修行成禪師故見萬民志而勸善除悪染身六
字名號者也願者此功力令成佛果衆生共哉且亦於山陰
道伯耆國此所結善縁一生爲七拾歳而祈留身命而已
世の中はたゝ露の間に雨やどり
終のすみかは来世なりけり
南二事も無久仲の闘美の阿流ものを
弥於陀めしそ佛となり
長保貳曆九月十一日寅一天空也往生と云々

日吉津之社
鎮座會見郡日吉津村

社領十一石九斗六升一合

祭神一座天照大神宮尊号大日照女貴也惣而蚊屋庄二十八ヶ村の大社にして則ち日吉津太神宮と号す四季の祭禮季に二十一度あり末社八社

末社

道祖神　日讀命　月讀命　風宮

齋宮　奉伴神　八幡社　若宮

本社ともに都て九社本社は方三間拝殿二間四方隨神門神樂殿御供場あり華表は表裏に建つ

當社に昔より來鹿の神秘あり所謂鹿の来る時は毎年間断なくして幾度と云事を不限来る時には海中に望み潮にひたす是人事の垢を離るにひそーくして夫より社前に詣するとかや日暫く社森にある時は社司供物を備へて恭饗し

八子山と云處に送る是當社の神秘なりと傳へて未た其事起をしらす又當社の氏子は毒虫の害なし是亦往古より社傳にいふ

代々社領寄附

濱田二百石餘　天文十四年十一月七日　豊信　在判

同断　永禄十年三月廿六日　杉原播磨守盛重　在判

同断　天正十九年十二月廿日　香引雅楽助　在判

四十五石三斗七升七合　慶長六年七月日　中村伯耆守忠一　在判

十一石九斗六升一合　寛文六年十二月廿八日　御當家御寄附

の現領なり

山田八幡宮　久米郡八幡鵠村社領

祭社一座当社は日嗣六十一代朱雀院の御宇承平年中都男山石清水八幡宮を山田前山城守此地に奉鎮御舎を造營す

元此里山田と言此神を勧請してより邑名を俗に称して八
幡と云なり
山田家の事古城堤の城を述る所に誌す故に爰に是を略す
或記当社建立之事人皇六十八代後一條院の朝寛仁年中に
平忠常山州男山八幡を此地に移すともいふなり
梵鐘の銘の事
此銘文を案するに山田家の造営扶論す今於防州岩國山田
家の傳記に云處永平五年伯州山田別宮下向八幡大菩薩奉
遷當所号開發願主従此子孫以山田為氏云々
鐘銘
大日本國山陰道伯州久米郡北條郷山田八幡宮撞鐘此鐘
者平司舍兄丸金吾紀秀員法名真観在主之時以前薬量之
用途所奉鑄也仍大願主即紀秀員真観

弘安六年癸未三月十五日
往古永平の造営の棟札紛失してなし今あるは当国譜居西
里見安房守忠義造立の棟札なり
加茂皇大神宮　久米郡倉吉神坂社領三十石
祭神一座尊号別雷命とも又は武津身命とも言ふ当神号社傳
あつて地神三代天津彦火瓊々杵尊とも称すなり都の上加
茂神是なり皇大神宮と称する諸神多といへとも斯号する
事伊勢加茂此両社にかきるしかや瓊々杵尊天照大神の御
孫にして地神二代正哉吾勝々速日天忍穂耳尊の御子なり
抑当社草創基開に当時人皇百五代後柏原院の御宇明應年
中に皇都の加茂皇大神宮を此地に鎮祭なして四神相應萬
齢不易の社域を選み一社を建て倉吉宗廟の神となすなり

此地を神坂と称す事は天孫鎮座の神路なるか故なれは尓、
称すとかや亦社山は本所の山男を移して二葉山とも云、又本
り御神詠にも
坂のほる加茂の二葉の川上を
たもいは久し代々の神垣
貞享三丙寅の年九月十一日神輿御幸を行ひ大祭始り以来
今に無倦怠して國風の神事を行法す享保六巳亥の年今の
社職吉田法躬本所吉田二位兼敬に告て台命の勅有て正一
位加茂皇大神宮と神階あることも此事より御田植の神事あ
つて夏四月酉の日行之其後よりして夏秋二度の祭禮とそ
なる
酉の日神事四月酉二つあれは初の日三つあれは中の酉
に行之也盖聞於本所加茂四月御生の祭事あり此時御田

植の神事を行ふ所謂御生の祭事は本所に限り勧請の神社に
なし都て加茂の祭事季に七十二度此れを祀禴嘗烝と云
て春夏秋冬の祭祀なり七十二度を四分割して春祭を祀と
云これて十八度夏を禴と云て十八度嘗烝を秋冬にして各
十八度なり日本最上の祭祀なる故祭とはいふ然は加茂をさ
りて称す余社の祭祀は其神号を上に置て云なり御生の
祭日禁裏へ加茂氏久葵葛を捧く即日
帝御社参の御幸あり還御のとき糺臨の社へ御幸あり凡
禁裏御祭奉の事此両社に限るの例なり
加茂旧記に曰公家悉当社を以て祭祀為日本第一の神事即
為寛治の勅額非朝家無双の礼奠哉云々
当社神秘として雷除并矢止の守を出す都て於当国勧請の
加茂三所雖然二品の守は当社に限る全是れ往古よりして

の一社の宮傳也元文三年当社職法躬西除落すと云事なし
全く神明擁護のなす所に不有哉
為神宝一つの石社内に斂其号を星石と云ふなり
貞享年中に天より一つの石社地へ落止し半は土中に埋む
を掘出して見るに石色青く長一尺八寸余幅八九寸もある
へし其形丸長にして鶏の卵のことし古記傳に星落て石と
生るゝと云事に依て星石と称するなり華表の下に一つの古
井あり清先の井と云也俗に夕皃の井といふなり古往此井に
大なる夕貌ありて天より是に便り再ひ天に上すと云ふ説あり委
く伊吹山を云ふ處に誌す陰徳太平記に伯州神坂に一つの井
あり白木綿ニて垣結廻し置と云是も清先の井の事を述
たるなり
当社と久米の八幡此両社ハ当国前太守中村伯耆守なり神

領高四十八石三斗八升四合寄附あり證札今に社職所持す
時に役人道家長左衛門三田善八村田市兵衛石川茂兵衛連
名の札なりあては神主喜兵衛三月二十七日と誌す慶長寛文
の頃まては当社職も大山會式には登山して神楽を奏すな
り今は此事なし横田丹膳より大山一神子免許の證札あり
其文曰

大山権現前一神子其方中附候間前代之通守護可有之
者也

三月廿四日　横田丹膳正村詮

喜兵衛殿

但馬神子

享保十六年三月十一日社領三十石領主荒尾勝就有寄附處
なり社職今の吉田法躬享保年中吉田二位家敬に告て神主

号并日冠を免許あり甚当社職神主の號日冠の事此法親よ
り始そかで享保十八年六月廿八日山井彈正少弼菊桐の金
紋の大挑燈双奉納あり粗神楽庭神前の左右に明す菊桐の
挑燈は近衛殿の近族の人なるゆへ菊桐の紋所を免さるゝと
いふ當社草創造營山名家の建立なり其後尼子領のとき天
文年中晴久再興あり代々の社職傳之当社田八幡宮近代所
司の造營今荒尾家の建立なり

伯州三所の加茂

久米郡倉吉　一社
八橋郡原　一社
會見郡米子　一社

各神号同体にして本所上加茂を鎮祭の神なり是を伯耆
三所の加茂と称すなり河村郡森の村にも一社ありされて

也上加茂にあらす亦鴨紀明神を勧請の宮にして祭神二座
雷号玉依子依姫なり是を御祖神と言ふ

本所傳に曰、上鴨下鴨を上下の宮と称せすして下上の宮
と言ふなり下鴨御祖の神なるかゆへなり亦々下を鴨と
書く事本所の神秘に傳ふる所なり亦紀米子勝田に有り
其外村郷に小社あまたけれとも是を略す

伯耆民諺記巻之九終

伯耆民諺記　巻十

伯耆民談記巻之十

目録

久米八幡宮

楫取大明神

氏殿権現

伊勢大神宮

感應寺

　中村伯耆國誌并廟牌之事

　垂井服部殉死之事

妙興寺

　横田内膳正村詮及死之事

　飯の山合戦之事

　村詮廟牌營建之事

総泉寺
総泉寺大姉廟牌建事
観音寺
杉原播磨守盛重建立之事
本教寺
古引長門守吉種之事
霊光寺并に経久寺之事

伯耆民諺記巻之十目録終

伯耆民諺記巻之十

久米八幡宮　久米郡生田邑今無社領

祭神三座神哀神功應神三所を鎮祭し末社諏訪内宿祢を置し
文明年中に新て御舎を造立其後尼子臣伊藤加賀守再興す
慶長年中當國前太守中村伯耆國社領為高十二石七斗三升
寄進あり総札社職所持す倉吉縣内の西并に近村の氏神
として八月放生會國風の神事を行ふ

社記

崇霜八幡宮之聖廟之階下繹其緒文明之頃畧辟宅窕管一
字三神鎮座態度可謂質素朴詳蓋世漸降澆季干戈未收鯨
波屢起列國恣權于時至永禄而藝州毛利與雲富田城將有
事時于經過于當國祷剃於当社凝丹墨信靈効不地然富田
今額巳既長臣伊藤伊賀守再営殿云云

○揖取大明神　汗入郡御厨屋社領

祭神一座尊号経津主命也常州鹿嶋大明神一躰の神なり元弘の昔後醍醐天皇御謫居隠岐國知夫の湊より當國奈和湊へ御渡海のとき御船を守護せし舟人には此御神の權化なり云々なり

○氏殿権現　汗入郡坪田社領二石一斗八升四合

當社は奈和伯耆守長年を祀せし御舎なり長俊屋敷と云ふ跡なりは三町あまり隔れり今の神宮因府の士太久保番右衛門寄進す

○伊勢太神宮　八橋郡其伊勢村社領四石四斗

神代昔天照太神出雲國に神幸ありし聴て還御のとき八橋郡中山中川にて御兄素盞嗚尊の退治せし山中の大蛇が妻大蛇が敵神なれはとて此川に丈八尋の砂石数百萬の甲武者

に変化させて関をなり大神宮へ立向ふ時に供奉せる熱田大明神寛川邊に進給ふ一首の神詠あり

千早振神代に聞ぬ甲川鹿くれなゐに白くなるへし

と製詠ありければ数万の邪兵八方へ散失すとかや此神詠に依此渡を甲川と称するなり其後又彼蛇雲州八重垣の浦に住む蛇といふ女蛇を加勢に伴ひ同郡上伊勢川にて辻へんとす大神は此川辺の高柳といふ木株の元に鎮座ありて両蛇へ向はせ給ひて汝等能く聞け何程妨をなすとも吾を支る事かたし今退治せん事は安けれとも蛇性なからも天を慕ひ女をたもちて命をかけ是まて追来ることそやさしけれは其儘にさし置きて両蛇の志を末世に残し此渡を加勢田川と号し則撜類を得させん最早執心を断つべしとして一首の御製を下し給はる

素たもこ女を頼に命かけ八橋越へて来る加勢蛇
此神詠により両蛇怨ち形も見へす失にけり八橋越てとあ
るは上古出雲八重垣の浦より此渡まて名ある橋八つあり
然るにより八橋越えてあり此神詠に依て此渡を加勢田川と
称すとかや斯て其後人代に至まて彼蛇の執心此川に残り
て人を悩す事多年なり然るに古へ伊勢村に一雲と云ふ入道
あり或時入道に神明記あつて此川に今に毒蛇の執心残り
人を悩す事幾年に限らす依て神明を此地に勧請して本所
の躰を移し圭田を建るならは以来此愁なからしめんもの
をとありたに霊場あれは国民等聴て領主に告るに上諸と
も急き宅窟を辟き不日に御舎を建立し本社末社ともに悉
く造営あり素より神徳等闕ならねは件の愁もいつしか止
にけり此時よりして此郷を伊勢郷と号けし社地の号も郷

伊勢邑と称し又此村名ある処に於て上下の伊勢と今に称す
れとも古号は是を内外の伊勢と言なり然るに今世澆季に
及ひ社頭も衰昔の餘風を残すのみにして末社も減し小
き石の小社本社へ行道の左右に列すのみまてなり又一雲入道
末代までも社徳を子孫に得るへしと昔時の神託なり依て
一雲末孫今に此村にありて御供米を得と云ふなり

○感応寺　米子城下法華宗山領三十石

常住山感応寺と称す当院は其先駿州にあり文永年中高祖
高弟佐渡の阿闍梨日向上人の開基なり時に慶長六年彼国
の領主中村伯耆守忠一此国を賜りて此地に移る当寺の現
住龍岳院日長彼精舎を移して今の地に高閣を建つ其後寛
永年中に南龍院殿紀州和歌山へ移さるゝ時に又駿州より
彼地に移す然るにより駿伯紀三ケ国は感応寺の山号寺号

ともに同じくして三威應寺と称するなり
歴代宗祖は駿州より以来三十四代に及ぶと云へり然れど
も本引寺たるゆへに其次を略して当時には日向を初とし
て春秋漸く五百歳といふ中村伯耆國忠一の房を当寺に葬
り廟牌を建つ法名は青龍院殿一融源心大居士と云ふ慶長
十四年五月十一日逝齢二十歳にして卒す同月十三日垂井
解勘由服部若狭殉死す時に勘解由二十四歳法名大法院善
休常作

いつとてもさきをかけんとおもひしに
　赤くれは世にそかなしかりけん

若狭生歳十六歳法名立行院梅窓常薫

かねてよりおもひもうけしことなれは
　きみさきたてゝゆくそうれしき

伯耆守魂屋は寺中の山にあり中に伯耆守左右に勘解由若
狭名像を作りて魂屋にあり本堂の前庭に大なる古木の松
あり解勘由若狭殉死のとき此を中にして左右に居り切腹す
其後世人号して忠死の松と称するなり
中村伯耆守の代には山領三百石今の國守より寄附ある現
領は三十石なり今の堂塔は則ち中村の建立なり此寺の三
寶は近國無双の荘厳なり　又代々聖人寺也

妙興寺　米子城下寺領八石一斗八升三合法華宗

富平山妙興寺と号す当院に古城主中村伯耆守の臣横田内
膳正村詮の廟牌有り法号了性院殿法毅宗晒居士慶長八癸
卯十一月十四日行年五十歳
此内膳正は実は伯耆守の父式部少輔の妹を以て妻と為す依て
伯耆守の為には伯母聟なり其前村詮は阿州高屋の城主三

好山城守に仕へて山城守息德太郎に屬して本城泉州岩倉
に居す其後中村式部少輔一氏の居城駿府二の丸に居す慶
長六年伯耆守當國を領して湊山久米城に居す時に伯耆守
未だ幼年なるに依り德川聖君の鈞命を蒙り後見の爲め同
城二の丸に居る今に此丸を内膳丸と称して石累とも残れ
り然るに伯耆守の爲に慶長八年十一月十四日城中に於て
以死す
家忠日記には慶長九年甲辰十二月村詮以死すと記す
惣て当國神佛領地寄附社閣建立免許状の面多くは横田内
膳正村詮とあり是後見なるか故なり
内膳正以死之沙汰并飯山合戦之事
近年に至り伯耆守威に誇り政事を乱し況や私心を專らに
行ひ臣の諫を用ひす故に國政甚だ衰ひすたれり依て村詮
は長臣として殊に親族として再三強て之を諫む然りとい
へとも伯耆國吏に聞用ゐる事なく却て村詮に逆意あるか
と疑をなす時に慶長八年十一月十四日巳の上刻村詮登城
して又諫言を加ふ然るに伯耆國大に怒て親兵なる家人安
井清十郎、近藤善右衛門、天野宗葉、道家長左衛門等へ相談し
て城中に於て村詮を誅せんと謀る、然るに近藤善右衛門
に伯耆守を諫めて合躰せさるにより伯耆守は強て内意を
近藤には語らざりきとかや、さて伯耆守は内意を残る三
士に示し合ひ即日饗に酒興を勧めて終日に及び漸く酉の
上刻頃伯耆守は立掛り抜打に村詮を切り付く、村詮は疵
を被りなから次の座敷に立ち其座敷に村詮か刀を持て候
する童子は其刀を以て伯耆守の追て出る所を切らんとす
るを件の三氏續きて追って出で童子がおつ太刀を手を以

て受け留むる時に安井道葉等は童子を討ちしが宗葉は其時左の腕に童子が太刀深く切入り大に疵を被るとかや、斯て城中大に騒乱して其沙汰包む包む由もなし、近藤善右衛門は元来此事に合躰はせざれども首尾心元なく思ひて未だ下城せずして遙の座敷に居たるが此騒乱を聞きて悔れども益なし今は是非なし武勇の村詮を若年の伯耆守が手討は覚束なしとて長刀を携へ座敷を隔て覗ふ處に村詮は数ヶ所の疵を被り赤に染て漸く切抜け遁れ出るをこはあやしとて軈て近藤押隔てゝ相戦ひ遂に村詮を討留む此時伯耆守十四歳 又十五歳とかいふ 村詮が息主馬亮之を聞くや否や己が居城飯の山の城を固めて軈て旗を揚く伯耆守の家人柳生五郎右衛門を初として多く主馬亮に與力して飯の山に楯籠る、城下大いに騒

動し商民なとは父母をはじめ妻子を召連れて東西に走り南北に走せ老若男女泣き悲しむ聲ひと喧き事なりとかや、斯て伯耆國兵を發して飯の山を攻城なし大に相戦ふ、時に出雲太守堀尾帯刀吉晴、同く信濃守忠氏援兵として兵船数十艘漕つれ米子に参じ深浦に着岸して伯耆守が軍士に来會して共に飯の山の城を圍んで頻りに攻討つ、城兵能く防き戦ふ間、本城の兵卒命を損し被疵者多し、柳生五郎右衛門は兵法手練の達人なれは向ふ者とては一人として命を遁るゝ者なかりしとかや然るに本城方に藤井助兵衛と云ふ士あり五郎右衛門に渡り合ひ暫く奮戦す藤井の運の勝りしにや柳生遂に助兵衛に討たる、此時依藤牛之助は射藝近國に双びなき手利にして而も強弓なりしが大雁股を以て敵城の狭間を射る、又矢野何某は櫓下にて敵卒数多

討取り大に武威をふるふ五郎右衛門討たれ寄手競立て勢
猛く関を合せ攻め戦ふ間、城卒に利を失ひて城に火を放つ
折ふし潮風烈しくして片時の間に悉く灰炭となる、主馬
亮なく城兵一時に自殺す、此時飯の山の城は焼亡して今
は石壁のみ空しく残れり
此騒乱に近國ハ大に騒き立て所々の城主御代官より東都
に告る早追ハ東海道は誠に櫛の歯を引くかことくなりかは又
伯耆守よりも速に是を聖武君に訴へ此事を聞し召されて
甚た御機嫌悪く聴て伯耆守へ鈞命あつて與黨の三士安井
清一郎、天野宗叢、道家長左衛門并に近藤善右衛門を江戸へ
召して横田の死の義御糺明あり其後件の三士は悉殺させ
られ横田は討たれし雖も還全く忠死の無據事にして元来
合體せさる條明白に達し上聞其罪を赦され、しかれ共後年

に至り伯耆守東都に参候し謁を執んとするとき横田を誅
する罪に依て営中に入る事を得ずして品川の驛に蟄居す、
其後数月を経て御赦免を蒙り江戸に入り聖君へ謁し奉
るなり件の三士の内道家長左衛門尉は伯耆守室に聖君よ
りの御附人なり此室女は實は松平因幡守康元か娘にして
聖君御養子となして伯耆國に嫁しめ給ふとかや横田の一
義、飯の山の戦の事は家忠日記にも委しく出たり、横田の
廟牌を當寺に建る事は息の主馬亮か村詮の屍を當山に葬
るか故に建てしとかや或人の曰く主馬亮は村詮討たるゝ
と聞くや否飯の山の城に楯籠り不日に合戦に及ひ遂に城
中に於て死す然れは依て葬行の隙なし後年に至て村詮罪
なき事を伯耆守後悔して当寺に廟牌を建るとかや云ふ又
は當寺は横田の菩提寺なるによつて時の住僧之を建て、後

後世に残さんとせり等と云なり
今領する處の山領高八石一斗八升三合は當家光仲寄附なり時に寛永十年中冬二十八日

總泉寺

米子城下山領二十石禅宗僧所
能州諸岳山總持寺末山

大龍山總泉寺と号す當國両録所の一寺にして法經盛なる大禅林の伽藍なり開山は寶峰良秀大和尚にして元当山は作州にあって青蓮寺と号す開基は前の備播作三州の太守赤松範資世子光範父子の建立なり若干の山領を寄附あり至徳元年大丞相源義満公荘田若干を寄附あり其後當國小鷹の城主杉原播磨守盛重観音寺を建立す時に青蓮寺三代禅室默大和尚を請て開山とす亦其後當國前の太守米子の城主中村伯耆守忠一清松總泉大姉の為に此地に移られた精

民談記九代宗竜和尚ニ株室トアリ

舎を造立して總泉寺と号す今の寺是れなり此時青蓮寺八代中興禅室大和尚を請して住持となす即ち禅室を以て當山の開山とす然るに依て伯耆國百石の寺領を寄附あり其後代々變りて今寺領二十石に定る現住禅室和尚まて十八世にして開山遷化より漸く三百年余の星霜なり

觀音寺

會見郡尾高禅宗總泉寺末山

建立天正の初年當國前の城主杉原播磨守盛重の菩提寺にて拾貫の寺領を寄附せりとかや

或記に其時の十貫とは今の百石に當る

民談記ニ禅覚トアリ

作州青蓮寺の三代禅室を以て當山の開山とす然るに杉原亡んて後寺も次第に衰へ今は漸く小庵の如くなる禅林となる

慶長年中中村伯耆守忠一當院を米子へ移す新にたた彼地

に精舎を建立し青蓮寺八代棟室大和尚を請し住持となし
則ち棟室を開山とす故に観音寺は今総泉寺の末山なり
國華蕭葉集には観音寺は日野郡に建て真言宗にして寺領
十五石と述へたり然れとも当寺は初より會見郡に建て宗
門も代々曹洞宗なり

本教寺　米子城下世人是を陽の寺と云也
山領七石法華宗

當寺は米子前の城主吉引長門守吉種飯の山在城のとき建
立の寺にして覺應山浄昌寺と号す今の城内對面所と云處
にありし寺なり其後飯の山の城滅して新に湊山に吉川城
を築き給ふとき今の地に寺を移すまた其後故ありて寺号
を改め本教寺と称するなり吉引長門守は文禄元年十一月
廿四日高麗に於て戦死す

初め浄昌寺と号せる草創は天正二年長門守母卒し法号を浄
昌院と云ふ是を以て寺号となして一宇を造立して浄昌寺
と称せしとかや亦俗に陽の寺と云ふ事は今の寺地は倉吉
街より立所に往来の陽にある寺なるにより陽の寺と称す
るなり

吉引長門守吉種法号
不染院殿前長州實性法達大居士
文禄元年壬辰十一月廿四日

吉種母
浄昌院殿栄山妙清大姉
天正二年甲戌四月八日

吉種室
了地院殿唯性妙達大禅尼

文禄四乙未十一月十三日
名廟牌あり室は長州戦死後は兼久村の境と云ふ所にて卒す
此村は吉種一族共の居ける所ゆへ各子孫民家に残る然る
に依て此村の民等今に残らず代々法華宗にして本教寺の
檀家なり
吉種父子在城并に室か境に蟄居の沙汰は古城米子を述
ぶる所に詳す

○雲光寺　會見郡御内谷村山領　三石余
禪宗定光寺末山

御内谷小松の庄なりゆへ俗に小松の雲光寺と称する寺は
尼子経常久草創にして開山は定光寺三世峻鷹道青大和尚な
り又当山の境地周環りて其形龍の蟠りたる如くなれはとて
即ち山号を顕はし金龍山雲光寺と号付るなり

経久の牌あり法名傑翁宗勝大居士什物に鎗一筋有り経久
の寄附なりと傳ふ外に何の記したる一札もなし末山四ヶ
寺あり
大慈寺　聖福寺　長壽寺　圓覺寺
又同郡法勝寺の里に経久開基の寺あり即ち経久寺と号す
然れとも今は何の書き物も當寺になし只経久開基と云ふ
事を寺号に残すのみなり

伯耆民諺記巻之十終

伯耆民諺記　巻十一

伯耆民諺記 巻十一

伯耆民諺記巻之十一

目録

山名寺
　山名侍従伊豆守時氏建立之事
　中村伊豆守再興之事
大岳院
　中村伊豆守引前領八橋慶久寺而建蒿院成菩提所爲改
　號大岳院之事
　鎮守八幡并一夜屋形之事
　三明寺職分号小麻之事
　里見安房守忠義廟牌之事
　楠観音之事
洞光寺

東満寺退轉之事
野一色頼母洞光寺旦那之事
石佛山
石佛之沙汰
廣教院
倉吉華市并牛市河原之事
定光寺
地藏院

伯耆民諺記巻之十一

○山名寺　久米郡三明寺　山領高二石八斗三升四合
禅宗倉吉大岳院末山

清淨山山名寺と号す山名侍従伊豆守時氏菩提寺にして即ち時氏延文四年四月建立の寺なりと傳来す然れとも山名滅て後修補の便りを失ふて寺又たとろへ遂に退轉する事歳月久し時に慶長年中倉吉の領主中村伊豆守先領菩提寺廢久寺を此地に引菩提所となし一字を造立し旧号を不改して清淨山山名寺と号す開山は存山智順大和尚此時よりして當山禅林となる然るに此地倉吉と川を隔によつて又當寺を轉して倉吉に精舎を建て大岳院と号す然るに依て当寺は大岳院隠居寺となし両寺一住して代々世牌同然なり往古は美徳山の末にして天台宗なりと云ふ

本尊阿弥陀如来立像なり恵心の作脇立勢至観音鎮守天神
当山に鉦鼓三つあり其銘に馬田信忠奉寄進伯州山名寺と
彫刻す一つには日野郡住妙香禅尼とあるなり馬田信忠は
雲州の士なり尼子合戦のとき寿其名を古戦書に述たり右
の鉦鼓正徳年中寺中より掘出す
院中に大なる岩屋あり二間にして奥は二間四方もあるへ
し小さき石架ありて石像の小仏あり巌屋の廻りは大なる竹
林ありさして謂れもなけれは筆序に誌し置けり

大岳院　久米郡倉吉山領十石外に十俵
禅宗備中本山洞松寺末山

萬祥山大岳院と号す開山は彦山智順大和尚開檀す中村伊
豆守慶長十年建立す抑当院草創の事慶長六年中村伯耆守
忠一駿州を轄して当国を領し米子の城へ移られ智順和尚

は伯耆守為には叔父なるにより駿州より当国へ請待す然
るに智順於道中遷化ありし時に慶長六年丑十月の事なり然
るを可春とて弟子遺骨を米子に持来りて葬むなり智順
の兄中村彦左衛門一栄其前駿州に於て沼津の城主たりし
に伯耆守幼年なるゆへ徳川聖君より後見のため彦左衛門
先未叔父なるに依て相添られ八橋を領するにより智順の
牌名を建んとて此里に一字を造立して先祖よりの菩提寺
駿州板橋の慶久寺を則ち寺号に顕はし慶久寺と号す彦山智
順を開山とす然るに彦左衛門慶長九年辰三月卒す嫡伊豆
守家続し八橋を轄し倉吉に移る此時慶久寺を今の三明
寺に引て古寺を再興し旧号を不改して山名寺と改め移し
亡父彦左衛門牌を置ける然るに山名寺は大川を隔るゆへ忌
月に出水に障り詣る事難けれとて又山名寺を倉吉に引て一

字を建立し元文法号を以て山号寺号ともに現し萬祥山大
岳院と号す今の寺是なり開山は初八橋慶久寺の鼻祖孝山
智順和尚なり壽左衛門法号

萬祥寺殿大岳周碩大居士

信堂五反の田畑あり然るを荒尾喜就より寛永十二年三月
高十石に結て宛行はる山林等永代に寄附ある折紙あり右
五反の田畑は三明寺等村分にて前の領主伊木長門是を免
許す神協村分の内高二石三斗九升五合は國守より寄附の
地にして寛永十年十一月に宛行當寺は天正の頃山名小三
郎氏豊か館なり氏豊亡て後田園荒穢す然るを中村伊豆守
寺を建立して今盛なる禅林なり境地方四十間廻り大薮
にして切岸の土手なり誠に要害堅固にして小城の跡とも
云つへき境内なり鎮守を一夜屋形の八幡と称す故は小三郎

氏豊此地に館を設けて居ルことた一夜にして出陣し遂に
因州鳴瀧にて亡び然る事起によりて俗に号して一夜屋形の八
幡と申なり鳴瀧八幡と一躰の祭神なり

當院四世眷(向)和尚は氏豊は前地主なるに依り氏豊か靈を八幡
に祝して當院擁護の神に崇め山門の傍に古社を建あり今の
八幡是なり

鳴瀧八幡当院の鎮守一躰の祭神の事古城倉吉を述る所
に誌す

鎮守八幡の社前にて八月放生會の前夕三明寺の胡麻とも
社参して火を焼き懃く禮拝して帰る事社例なり
胡麻は穢多の事なり然れとも當國に於て一円に亦
か称するにあらす三明寺邑の穢多に限りて胡麻と云
ふなり

山名氏豊戦死のとき屋形には敵勢みだれ入て悉く放火す
此時氏豊か一人の娘あり胡摩女といひしか漸く死地を遁れて
穢多に紛入り終に穢多に契をなし一子を誕生す其後子
孫多くなりて村中一族となる然るに事起に依て後世に至り
此村の穢多を胡摩と云なり故に依て穢多とも此八幡を今
に敬恭す

出雲の國にては穢多を加摩と云なり但し古事か今に
流行するにや尼子經久再ひ富田月山の城へ切入るとき全く
加摩か謀計なりと云ふ事陰徳太平記に述べたり

里見安房守忠義の廟塔あり伯父の塔屋等か墓あり房州卒
去は元和八年戌六月十九日堀村に於て病死なり忠義初め
當院の近辺に居す今の岡嶋屋敷なり此時當院に来りのみ
き其仔細有りや然るによりて房守を當院に葬りけるとなり

安房守党國に謫居せしは古城久米郡安房守陣所と云ふ處に
謫す故に茲に略す

安房守法号

雲晴院殿前拾遺心叟賢良大居士

安房守寄附の楠多門兵衛正成守り本尊の觀音あり然るに
六代住職のとき子細ありて此佛を檀中倉吉の士官高本何某
へ下されたるに依て高木か内佛へ安置して今に甚尊敬す殊に
勝れ利生あり給ふ御仁に御座候也

末山十一ヶ寺

月僊山洞光寺　日照山極楽寺
天竜山雲祥寺　久宝山永昌寺
松在山隆光寺　梅樹山小林寺
金林山觀音寺　清浄山西名寺

大日山胎蔵寺
紅梅山松岩寺　鮫巣山谷昌寺

洞光寺　河村郡湯庭山領　禅宗大岳院末山

月仙山洞光寺と号す草創歴代又何人か開山と云事を不知
往古より建所の寺なり南條中書（中務少輔元忠か事）羽衣石居城のと
きまては甚寺塔も甍を並へし高閣なりしと云けれ其後中村
伯耆國忠一當國の太守たる時其臣野一色頼母と云ものを
当所を領して則ち当院を菩提寺とすなりけり彼か臣中川平助
と云ふ者此里に居す今に頼母屋敷平助宅地といふ邑民の
田畠に字を称すなり
野一色頼母当所の主たる事慶長六年の夏よりして同十
四年まて其間蔵月九年也慶長十四年の夏伯耆國卒居し

続なくして跡断絶す頼母当國を離散し浪客となりて他
邦へ走る臣の平太夫は暫く此地に迫り住せしか死亦滅也
或人の曰く平太夫慶長十九年まて此地に住せしか同年の
夏大阪作乱の時方々に走り終に元和元年大坂に於て戦
死すともいふなり
頼母は元駿州の誕なり又も同名に而野一色頼母といふ
なり此頼母は慶長五年家康公石田三成御退治のとき
式部勢の宗として三成か臣嶋左近と杭瀬川に於て大に
戦ひ終に戦死すとかや累代中村家の舊臣の者なり
頼母此地を退きて後修造の外護か薄くして寺塔悉く大
破し寺号を称するのみなりし時に寛永年中倉吉大岳院の四
世秀山可春和尚當寺を再興して高閣を建立す其後修補
間断無くして今に世代も續けて禅林となる然るによりて

秀山を中興の開祖とす故に大岳院を以て本山とす
宝永年中に当寺に千躰の地蔵を安置して高閣を建立し毎
年七月廿四日本會として甚群集す即日相撲を争ふ是を俗
号に地蔵相撲と云ふなり都て大岳院の末山十一ヶ寺とも
皆可睿和尚の開山なり
又此地に東満寺と云ふ古寺のあとあり蓋當院は南條開基の
寺にして昔時隆盛の精舎なり然るに羽衣石城亡滅の後年
年たちへ終に修補の便を失ひ徒に自滅して今は寺もな
し只寺号を残すのみなり

小林寺　久米郡小林寺村に禅宗大岳院末山
今は寺なし然れとも新古両寺の跡村中に有り当院は山名
侍従時氏当國を領するとき其臣小林何某此地に居す然るに
明徳年中皇都に於て戦死す是に於て小林の室此地に一

寺建立し菩提を弔ふなり其精舎を雲沙山小林寺と号す開
山は室州南海禅師なり此禅師は俗姓山名家の族にして誕
は上州世良田の人なり其後代々國乱あつて當閣年々に衰
へ遂には破亡して歳月遙に退轉す時に大岳院四世秀山寛
永年中に再興して旧号を不改即小林寺と号し高閣を建つ
此地に古木の大なる梅樹あり即是を以て山号にあらはし
梅樹山と号す此より禅林となつて秀山を開山となして大
岳院の末山となる然るに又火難あつて精舎悉く焼亡す其
後補修の外護もなくして亦終に退轉して今は徒に寺号を
のこすのみなり
又此村の山根を穿ては蠣蛤の殻の出る事多し古此所入海
なりといふも理りなり然る故にや此郷を灘郷と称すなり
此類他所にもままある事なり　上野佐野の宿舟橋の古跡然

るに此辺古へ大海なりしに依て今に岩根に螺蛤の殻残るといふ此所に今川あり此岸の上に松山見ゆ建久の昔鎌倉の右大将此海にて朝夕魚を取らしめ給ふ處とて号して肴山といふなり此山は高崎領なり　又此高崎木綿足袋多葉粉等の名物あり上州多葉粉といふは此高崎の多葉粉の事也

廣教庵　久米郡田内　浄土宗倉吉大蓮寺末山

往古より　の寺なり大王山興教寺とて大伽藍の地にして養老年中の草創なりと傳来す開山開基ともに何れといふことを知らす昔時大永の國乱に堂塔悉く焼亡して其後終に退轉して今纔の草堂ありて僅に寺号を残すのみ當山計りなり昔の寺跡は今庵の後の山にあり其古跡多くあり今の本尊誕生釋伽始末なり毎年四月八日誕生會の法會本山大蓮寺

よりこれを行ふ當寺大蓮寺の末山となりしことは近代の事にして往古よりの義にはあらすとなり

倉吉華町の事起

昔當山隆盛なるときは今の牛市河原は大町にして毎年四月八日の前後七日の間彼大町にて自他の國人群集して牛馬を轉し求む元来誕生日なる故に堂塔を花を以て荘厳にするに依て大町筋も花を以て店棚を飾り美々敷なす是此地の往古よりの例なり是を号して花町と称す然るに当山衰へて此市も無くなりしに近代是を倉吉に移して今に此市をなして花町と称すなり今は大山の會式前後に是をなすなり昔の大町筋は近代水道となりて河原となる後人号して牛市河原と称す諸渡りの河原なり境地は田内領分なり然るに此の

河原を俗にあせまつてしうち河原と云ふなり

○石佛　同所佛石山の南端

佛石山は昔時山名家の城山なり此山の南の端に大なる岩堯あり其中に六尺餘りの盤石に座像の弥陀を画きてあり然るに依テ世人号して石佛と称す所謂石佛の事起は基開く此地住吉は入海にして常に潮を湛へ船舶を通せり或日巨勢の金岡此海上を過るに此岩堯の妙なる分野を覗ひ遶季の利益を残さんとて暫く櫂を止めて畫きし阿陀なりと世人口碑に傳ふ当時千歳の星霜を移すといへとも今に画佛靈々として現然たり赫々として藉練なり又當山の境内を望めは四季の花木不乏前は水音潺湲として練を曳くか如くなるを國府川の清潔の流あり向ふは風聲鳴叫が如して藍に染たる如くなるは倉吉街道並木の松原なり又遥に瞻望すれは遠く

の深山幽玄として嵩は雲に入り又雲に浮ふ都て遠近の好風感情にして寔に妙なる靈場なり此川の水にて倉吉酒を造る号して國府川と称するなり

○定光寺　久米郡定光寺邑山領六石外三十石今國府
寄附なり　禪宗伯州僧錄所越前の國宅良普
門山慈眼寺末山

金地福山定光寺と号す開基は河村郡の住人入道源賛開山は慈眼寺の二世機堂長應禪師なり俗姓加茂氏南條伯耆守貞宗の二男なり

此禪師の事古城羽衣石南條系譜を云處に始終を述ふ

開檀源賛姝未分明也当寺卓錫應永年中に梅翁山曹源寺を建立して後に定光寺を造る夫より以来年月を移す事漸三百余の旧寺にして近代修造盛にして層樓高閣甍を並ふ大伽

藍の禅林なり当山の後の山上に観音を安置す伯耆国の靈
場なり此薩埵は三十三躰一石に彫刻ある佛像なり弘法大
師の製作と傳来す当寺二十世湛玄瑞夢ありて鎮守の社前
にして堀出したる霊佛なり
當寺撞鐘施主本願人近江国川崎九郎左衛門藤原家長寄進
藤正綱是を彫刻す時に天正二年十月三日
當山録所の事今の国守清源寺殿前伯耆守武都に告て僧録
所に蒙　鈞命時の大老小笠原佐渡守僧録に可申渡旨関三
ヶ寺に告られ元禄元年春三月十六日両本寺永平寺総持寺
より僧録所ありし丹州以来代々録所となりて東三郡当寺
西三郡米子総泉寺一国両寺として諸山を命令す
山領前々の如く今の大守興禅院前相模守延宝二年の冬臘
天二日寄附あり并に境内山川溪諸殺免許の判物あり

什物
鼻祖機堂長應禅師の法衣室中秘書佐々木民部大輔晴久像
前不遷春浦和尚の讃
開檀源賛牌あり法名
霊光院殿像外源賛大居士
南條豊後守宗元入道宗勝法名
興国院殿決叟宗勝大禅定門
豊後守長子伯耆守元續法名
南光院殿伯翁全部大居士
佐々木民部大輔法名
月叟省心居士　此佐々木民部太夫は雲州富田の太守
尼子晴久なるへし
嫩叟元長大居士　是も尼子家の将なるへし　未此法名の

右四霊の廟塔と傳へて四ヶ所にあるなり　俗姓の事不分

古代寄附状

寺領の事大谷村四分一ヶ所の寄附状應永三十一年十月廿

三日　沙弥源賛在判

定光寺領正時名大谷上神山先に小鴨跡の事、應永廿四年

九月二十二日同人在判

前格の寄附永享十年八月三日兵部少輔敎之在判也敎之は

入道源賛の息なり

同寄附文明十年三月廿日元之在判元之は敎之の子也

同寄附文明十五年正月廿八日政之在判政之は元之の息也

上神郷の内分寄附永正十年酉四月廿七日敎之在判

同寄附佐々木民部大輔尼子晴久在判天文二十三年丑六月

十日

同断永禄五年二月十日尼子義久在判義久は晴久の息也出

雲國富田の城主也

當院末山記録の内寺号四ヶ寺國主へ遣呈す依之物成十三

石永代寺領國守より寄附なり時に永禄七年戌九月五日時

の寺社役山田佐助在判

末山都て國中に三十五ヶ寺雲州に於ける孫末とも百ヶ寺

内出雲城下松江三ヶ寺各僧録寺也備後國二十二ヶ寺有り

◯地蔵院　久米郡湯関　真言宗

大瀧山地蔵院と号す本尊八尺の座の地蔵菩薩にして行基

菩薩の製作なり伯州不二の大佛にして況し妙なる霊佛な

り是を世人称して関の地蔵と云ふなり

當院は文治年中鎌倉右大将の建立なりと傳ます但昔の寺

は今の道場よりは十八町程奥なり今に古寺の跡あり境内
甚山中なり此地に千手観音を安置す三間の堂なり薩埵は
行基の製作の佛にして自在其長二尺の立像なり又此山に
大なる瀧三流あり不動瀧文珠瀧児か瀧といふ此谷を菖蒲
谷と云ふなり此所に長者原鐵屋と云ふ地跡あるなり

伯耆民諺記巻之十一終

伯耆民諺記 巻十二

伯耆民諺記巻之十二

目録

普源寺

鎮守三神奇瑞之事

駄經寺

大御堂古跡之事并弘法之園子之事

櫻井櫛右衛門并山井梶之助相撲之事

玉簾山

朝妻寺之男并妻木里之事

樂々福大明神

四邑之社事

孝霊天皇崩御鎮跡之事

鬼塚之事

生山八幡宮
紫瀧之事
松倉大明神社
御笠山之事
高杉大明神之社
打合神事之事
馬場八幡宮
天満八幡宮
陰陽之松之事
天嶌関之事
天門山之事并古城之事
天満宮旧事記之沙汰
住吉大明神

述顕郷詠之事
萬福寺
国主一札之事
景雲寺
弘法大師瑞夢之事
修験行蔵院
伊賀八幡宮之事
安養寺

伯耆民諺記巻之十二

曹源寺

河村郡曹源寺禅宗定光寺末山

梅翁山曹源寺と号す開檀当郡の長者入道源積法号は霊光院殿様外源積大居士開山は越前国普門山慈眼寺機堂長翁禅師なり定光寺と等し抑当院の草創は機堂禅師俗姓羽衣石の城主南條前伯耆守貞宗の二男なり幼年より慈眼寺開山天真自性大禅師に見へて明徳三年受法嗣て初めて師の跡をつく慈眼寺を薫し次に近江国高嶋の新豊寺を開き晩に応永の初年此国に来り大に玄化を廣めんと欲して初めて此地に入るに村民歓ふこと限りなく夫より当山の裾野に地蔵堂あり此幽棲を片時覗ふに鶴髪の三翁近寄りて揖師して曰く某等禅師をまつこと年久しくし今日幸に至れ

り此山の中央に法幢を建給ふなば衆民大に輻湊すへしと云ふ
に禅師黙想して答て曰ク是何人ぞと問ふに三老とも其姓名
を語らず終に鞠躬して去る禅師怪しく思ひ行方を覗ふに
今の鎮守三神の廟に至て忽然として見へずとなり果して天照妙
理八幡の権化なりしことを知り此時靉靆紫雲嶺表に布瑞し
欝葱たる緑樹改林端観と云へりその後卓錫の日開檀新發
意源賛山林数十頃劇地を献して聴て七堂を建て院領の地
を定め肥饒の田を撰んで庫院金湯の具となして衆徒を安
ずる事をなす然るに興廃不定歳月頻に移り外護屡に滅
して寺跡衰へ伽藍悉く亡敗す時に明暦丁酉有法耕牛慕龍
祖翁再興して新に佛殿を造立す然るに此住寺事あつて不
日に退く惜むへきかな中興の力不振ぞなり其後寛文壬
子年鏡古巌彼佛殿を厨庫として新に佛殿を造立して舊制

を壊すといへども未だ落成を待たずして遷化せられける工人倦怠し
て締構備らざる所に延宝甲寅の秋八月猛風吹起て須臾に
堂塔轉倒す其後一字を設る外護もなくして徒に荒穢す然
るに南江恵薫大和尚佛殿を建て再び曹源寺を興す依て恵
薫を中興となす其後又無住となること歳月久し或は平僧
看住して寺務をなし又は道心寺番をして山用をなす此時寺
大きに衰へ什物重器ことごとく亡失して残る所まれなり
時に天和辛酉の年前の惣持寺の現住一元智椿禅師此山に
入り貞享二丑の春佛殿扇橡の事初あり同年龍集秋七月上
梁す此時一元甚國恩あり故に時の役人を棟札に誌す
寺社奉行吉村清左衛門 北村又七
代官中村源七
郡奉行河崎中右衛門

再興本願主大庄屋久原村安藤吉右衛門乗久
棟梁工匠當山門前理兵衛久原村五郎兵衛本泉村喜兵衛

當山昔日隆盛のとき今ある惣門を豎路門と言ふ今に爾か称するなり此門より山門の間数株桃樹衆品の緋櫻矢々として闌外の豎路を夾む今是を俗に櫻の馬場と称す此路の半に亭あり蓋し来賓を招待且過の處なりといふ其傍に地蔵堂あり機堂初て山下の地蔵堂に寓すとあるは則ち此地蔵堂なり今此地を地蔵堂原といふ昔の桃樹櫻樹もなくして空しく古趾を残す今あるものとては地蔵堂と原とのみ残るなり堂より西に行く事一町の經坂を登り境内方五歩ばかりなる平き山臺嶠木欝々たる中に開山機堂の無縫堂あり側に一つの石あり和尚の座禅石と傳ふ凡三百余年の歳月を移すと称へし

し石清潔にして青苔今に一莫も生せさるなり是れ當山の瑞なり

鎮守天照皇大神宮八幡大菩薩妙理権現三神社あり是昔よりの社地なり機堂此山に入るとき靏髪の三老ありしは即此三社の權化なりとかや

春日大明神金比羅大權現の社ありしを今の前住寂端和尚此社を院中に勧請して三社に加へて今は五社の鎮守となせり秋九月十五日祭禮にして神事をなす

放生川

寺前の流を竹田川と云ふ此川往古より當寺の放生川なり閑權靈光院寄附す川上は中島の井手をかぎり下は新宮の上聖淵を断て是を寄附あり然るに依て此所の川は昔より運上なし代々放生川と云て殺生禁断の川なり

古代世々の寄附の寺
境内古今同し方五町に足る東は蛇山中の島に走り南は虚
空路木大谷川を透り西は大嶺北は横川 又堂飯そして肥饒の
田を副淺す開基靈光院の時に應永九年源賛在判あり宛名は
住持とあり其孫兵部少輔教之永享十年八月三日寄附前に
同兵部息元之文明十年二月廿日前に同し其子政之文明十五
年正月廿八日前に同し次に大米八郎左衛門渡辺民部甲
元孫左衛門若前に同し寄附在判あり
尼子民部太輔晴久及義久前格の通寄附并に山林田堵免許
の證札あり
開基源賛及大米渡辺甲元右四氏未姓名の事不分明國分寺
の住魚搆といふ小僧より寄附の一札あり其文に
備前の國鳥取の領の内國分寺入部に附候而長く被成

御辛勞候然者少分候得者供僧之内二ケ寺令進之候一
ケ寺は八貫前一ケ寺は六貫前に而候然る間九月十五
日鎮守之御祭禮之時は供僧御納を以毎年御勤可有候
仍而供僧二ケ寺渡状如件
國分寺
天文九年庚子 魚搆在判
十月廿四日
曹源寺林香書記 参公
源賛以来代々の寄附状各今に什物として寺に納むといへとも
寄する處の田又國分寺魚搆より寄附并地藏堂、田とも今
なくして無縁寺となる
曹源寺清水
惣門の外の岩下より涌出する清水なり冬は暖にして夏冷也

大旱魃にも乾かずして素より四季共に乏しからず往古よ
りの靈水なり俗に是を号して曹源寺清水と称するなり
当寺開基以来歳遠に移りて年代異説あつて其傳惑文多し
然りと雖開山遷化は應永七年今に三百余年に及ぶなり中
興南仕惠薫和尚より現住眼聞和尚まで十七世法經盛に今
に連綿する事は一元智棒禅師より以来にして近代尚盛ん
の禅林となる末山牧邑に一ヶ寺あり白翁山隆泉寺と云ふ

○駄經寺　今は寺なし　久米郡駄興寺宗門不分明
安満山駄經寺と号す古此地紀州熊野山を移せし山なりと
傳来す古寺の跡今地に村の後にあり当村氏神は熊野三所權
現を安置す古へ戦國の為焼亡して其後修造の便なきか終に
退轉して今地号のみ残して駄經寺と称するまでなり
當院の号を捴するに讃土の白馬寺に依號せる寺なるべしへ

れし漢土初て天竺より法經渡来の時に童子經巻を白馬に
負せ入朝す此經巻を欽けるを寺を負来の白馬に依て即ち白馬
寺と号すとかや然れは当寺の号の經を駄するの意味を感考
するに依て故ある舊院ならんか
今の安満山は只平らの山の短か山にして加茂大明神の祭事相撲
を争ふ場にして左右向三方をきり平らけ桟敷の臺となす
毎年九月十一日大に群集し衆人日暮を惜むとかや
伯耆相撲專らなりし事は元禄年中播州より櫻川櫛右衛
門といふ相撲縁ありて倉吉に来り居住す此は土風何某
と山ふ者の門弟なりとも云ふなり　一説に筭庸総門弟にして無双の上手八
十八手の的肯を極めて伯州一円の師となれり其頃因州
青屋の庄屋梶之助と云ふ相撲此櫻川をしたい終に英雄
の相撲となつて山の井といふ号を國守より頂戴す又其

後兩國向田開山と云ふ号を免許ありて兩國開山山の井梶之助
と名乗り都鄙に名を顕はす事全く櫛右衛門がなす所也
然るに依て当國相撲中興となつて今に吹聴をなす事なり
当山の傍に俗に謂たゝして弘法大師の團子と云ものあり
大きさ蜜柑の如く外黄にして内黒片山の端充満せり往
古より爾か称し傳ふるとかや
弘法の團子といふものを或人の曰、石藥の部に禹餘粮
と云ふ者あり此出生禹王飯の餘を路の外に捨てられしか
後凝て良藥となる是を号して禹餘粮と称すとかや蓋し
彼の團子といふ物も此類の物にてやあらんか

大御堂

此地も今堂塔なし跡を大御堂と称して駄經寺村の前の田
中に小き基ありて是を爾か号するなり古は大なる伽藍の道場

なりしと傳へ今に此堂の礎石とても諸處に群散す大きさ三
尺餘りの丸石なり是を以て是を擬すれば至て大なる高閣
なりしなるべし今彼基も多く穿て田圃となし残る處は少
しあくまの如くなれば此辺を穿ち見れば古佛莞佛具数多出
る事今もあり
當寺開山何人と云ふ事知れず駄經寺の本堂なりしと傳来
す又退轉の年代も不分明此地の前に小き流あり堂道川と
云なり堂前の道に并綿する流なる故にしか称する也然る
を俗に誤て今是をどんど川と云ふなり
此外には伽藍橋と云ふあり此寺昔日隆盛のとき此所門前の
大橋の跡と傳ふ今は小き土橋ありて是を今は伽藍橋と称する
なり然るを俗に誤てからし橋と云ふなり
又此脇に華表なわてと云ふ径道あり駄經寺鎮守新宮大明神

へ小古道なり此所に大鳥居ありし跡として今華表なわてと
いふ然なるを俗に謬てとりかなわてと称するなり

清見寺　汙入郡六木村天台宗

玉簾山清見寺と号す古へは朝妻村といふ小村名も妻木里と号
す往古此妻木の里の或女皇都へ上る仔細ありて光仁天皇
の后女と成るとかや
彼女皇女后となる事國誌の巻汙入郡名を云処に妻木の里
の事起ともに述る依て是に略す
斯て彼女后皇居卒す帝深く歎給ひて故郷なる妻木の里へ
勅ありて一寺を造営ありて玉簾山朝妻寺と号して亡女の菩
提寺となすとかや後世に至て清見寺と改号す古寺の跡は今
に残る當寺に観音を安置す是を号して汙入玉簾妻観音と
称し遠近に沙汰する名高き佛にして況や霊瑞の薦塋にて

ましますけ盡し妻観音と称する事は朝妻寺の縁起に詳記
称するなり

楽々福大明神　日野郡宮原村神領高六石二斗四升六合

楽々福大明神と号する社の日野郡に建つ処都て四ヶ所各々
孝霊天皇を祭る神社なり但し印賀村の楽々福の社は彼天
皇の姫宮福姫を祭るの神社なりと傳来す當社を口日野大社
と傳ふ上古孝霊天皇の御宇當國西端に悪鬼ありて此地に
御座をなされし鎮政なりといふ則ち此所にして崩御あり
て其神跡と言て社の後ロ方八間の岩窟あり

宮内東邑　楽々福大明神　社領六石五斗

當社を奥日野大社と云なり祭神前に同し於此所彼悪鬼を
天皇退治し給ふ地なりと傳来す此地に鬼塚と称して方五
間の大なる塚あり社傳に其時の悪鬼の屍を埋めし塚とて

古今国ヶ称するなり

宮内西邑　楽々福大明神　社領七石四斗七升八合
東西合格両社ともに奥日野の大社にして神宮寺あり祭神
前に同しく社の後に山上に岩屋あり天皇皇女の崩御の岩
屋なりと傳へて凡人登事かなはす此岩屋の上に大成ル一本
の松あり木風千歳の昔を現しなんた様瑞ある古木なりしに
故なくして　二辰年中折れて後無程枯果るとなり
當社に神領の古記あり和銅二年酉年の證文なり漸ク今一
千五十四年に至る

生山八幡宮　日野郡生山邑
當社山の上榮灘と云有り孝霊天皇の姫宮福姫の御誕生の
處榮灘とあるといふ小今印賀村の楽々福大明神は此福姫を
祭りし神なり又此地を生山と云ふ事も福姫御出生所の山なれ

るゆへに依て生山と称すとありや當山古城のあとあり久志
路和泉守景行の居城なり

稲倉大明神　日野郡新屋村
鎮座の山を御笠山と云なり此山孝霊天皇稲を積せられし
跡なりとて山の形稲くまの如し此故に依り神号を稲倉大明
神と称する也

高杉大明神　汗入郡宮内村
當社の社傳に打合の神事と云ふ事あり然れとも今此神事止
也末社に一の御前二の御前三の御前と云ふあり一の御前
は別社にて二三の御前は同断の殿なり往古は両御所打
合とて互いに左右より榊葉をもつて出て暫く打合々々て
神楽をなす是を打合の神事とて後世に傳ふ今是を俗に号して
嫐の神祭と称すなり

馬場之八幡　會見郡馬場村
神領高三十四石五斗三升

八幡の境内の大社故會見八幡の八幡宮と國民号して称するなり祭神三座應神仲哀神功皇后を祭る三神一社同殿なり累代國守建立神領寄附の社頭にして古記證文數通あり當時國主興禪院殿當社を建立あり其時の工匠棟梁野間能登則今棟札に残る其後嗣して代々當國主の造營也

天満之社并陰陽の松の事　會見郡天満村神領少

當社は天照太神宮なり社内に陰陽の松と称する神木あり高サ丈一尺にして目通り一丈二尺五寸但正徳五未年改て是を陰陽の松と号する事は此松半分より上は女松にして下は男松なり然るに依て爾か号して称するなり

天満之関之事并舊事記之沙汰

往古此村に関所ありしか伯耆の古所を述るに天満の関と云ふ事を國華萬葉集に誌す亦天満の山本と云事を舊事記に出たり此義國誌の巻天満の村名を云ふ處に述る依て爰に略す又當村に古城の山あり天門山と云ふ此山に一本の松あり号して天満の一本松と称するなり當村に古城跡あり小鷹の出城なりしといふ杉原播磨守盛重か臣菖蒲左馬居城す悉しくは古城の巻天満の城を云ふ所に述ぶ故に爰に略す

住吉大明神　汗入郡御厨

往古より宮なり後醍醐天皇此地に御着舟の砌先づ當社御参詣ありて聖運開かしめ給ふ勅願ありて奉幣ありしと寿に供奉の忠顕卿の詠を奉納あり

千代經へき君か齢を住吉の
松に契りて御幸なるらん

今の宮地も其時の地なり神威増々盛にして今神階あつて
正一位住吉大明神と号す華表の前に古木の松あり忠顯卿
の詠せる松も則此松なりと傳来す當時四百有余の年月を
經るといへとも枝葉繁茂して尚千歳の齢を現す又天皇奉
納の奉幣五串といふことを傳来す今神物となして社にあり

満福寺　汗入郡稲光村今時宗本山相州藤澤
　　　　清浄光寺末山寺領高三石七斗四合

稲光山満福寺と号す往古より時宗にして清浄光寺の末山
たりしか中古混雑して曹洞宗になり米子城下の禅林萬壽
山安國寺末山となる然るに寛文六年本所清浄光寺他阿上
人廻國御修行當國へ入来のとき當院を改む其旨國守〻光
仲公に告る元の時宗となる此時當院に國守より一札を賜
ふ其文に曰く

伯州汗入郡稲光村満福寺者曹洞宗にて同國米子為安
國寺末山之所遊行四十一世之上人去年彼國修行之節
上古清浄光寺末之由依有其願改替住持而今為時宗之
寺且又上人就擧状境内之畠高寺外田高都合三石七斗
四合の所新に被寄附候可有寺納前寺中竹木等所被
免許之也自今以後於轉他宗者速可被取放寺領之間勤
行不可有怠慢之状如件

寛文七年　　池田日向
未正月廿九日　乾甲斐
　　　　　和田式部
　　　　　荒尾志摩

景雲寺　久米郡富海村禅宗倉吉吉祥院末支配
　　　　佑了之而紛弘法

當寺は元文元辰年建立なり願主は久米郡古川村の黎氏蓑浦吉左衛門と云ふ者也此者年来観音を信心して留後(ママ)に纔なる観音の草堂あるを再興し大伽藍となさん事を深く思ひて是を郷民に告るに民等同意して赤岩山の険岨を平開し聰て精舎を建立す然るに同年の秋七月此邑の民與一兵衛と云ふ者弘法の瑞夢を蒙り早速大師の聖像を刻んて彼山に草堂を営んて安置す時に佛徳遠近に聞こへ邦郷にあふれ衆民日々に輻湊して山大に盛なり工匠不怠倦して不日に高閣なる事不思議なり依て即ち赤岩山景雲寺と号し四十八躰の観音を安置して終に萬齢不易の霊場となれり堂の後の山臺に弘法の像を安置して是を奥の院と号す又なり今世人が寺号をば不称して弘法と云へり毎年廿一日今に衆人群集して恭敬拝せり

景雲寺の号は定光寺末なる古寺の号なり然れを再興して今當山の寺号となす所なり今當寺四十八躰の薩埵を置事は四國の観音をかたどつての故なりとかや

行蔵院 修験なり真言宗倉吉

三寶院の下近江國岩本院飯道寺並大先達の同行なり今行蔵院まで五代の修験に至り大祖を蓮乗院と云て八橋郡細工所と云ふ所に住し羽衣石の城主南條伯耆國代々の祈願所にして寺領三百石を充行はる彼か子を行蔵院と云ふの此行蔵院は實は常陸の城主佐竹修理太夫何某か士なりし草苅数馬と云ふ者なり故ありて浪客となりて蓮乗院か家に住せしか終に蓮乗院か聟となりて修験の家を相續す但今の行蔵院の為には四世の祖なり

此行蔵院は蓮乗院より毎峯の事無間断相續する事八十年

に餘る此時行藏院に大峯小笹の床を給ふ是ハ大なる修験
の譽れ和朝に沙汰す面目也依之行藏院を以て伯州山伏の
宗とす其後相續等外護数々減して助力大きに衰へ入峯歳
月久しく催怠す故に今小笹の床も空しくして其名を餘す
のみなり雖然先祖の功は子孫の面目にして今に小笹の床柱
に伯耆國行藏院床としてなす於當國床を贈る山伏古今曽て
稀なる事と傳来す
前の行藏院養母は南條伯耆守元續西安達伊賀守と云河
三村郷大瀬村の領主の娘なり伊賀守戦死の後大瀬邑に靈
を祭り社を建て終に所の氏神と崇め今伊賀八幡宮と称
するは是也

○安養寺
會見郡四日市村時宗
御朱印高寺領百石

御當寺は人皇九十六代後醍醐天皇相模入道にたかをれ給
ひ元弘二年三月隠岐國へ御遷幸の御時御宮の数多くまします
中に別て御歳十六歳の御姫宮御寵愛のあまり此所まで御
随逐し給ふ然るに天皇玉意にて姫宮は此所に差置き天皇
は隠岐の國へ渡され給ふ姫宮は御落涙と共に別れ給ひ會
者定離の理を感し玉のかざりをおろさせ給ひ剃髪染衣し
法名を西月院安養内親王と成り給ひぬそれ故當寺を會見山
西月院安養寺と号す然るに　天皇再び聖運を開かせ御帰京
の御時御軍を寄せられけるときに親王は御帰京の義御得
心無く天皇叡慮を遂げ給はす御筐として開運勝利の佛舎
利をゆつり都にかへり給ひ又勅使あつて御念持佛御丈一
尺三寸夢告阿弥陀如来一躰春日の作今當寺の御本尊別而筐として
天皇自画の御尊影其外宝物等数多たくり給ふなり

伯耆民諺記巻之十二終

伯耆民諺記巻十三

伯耆民談記巻之十三

古城　古所　目録

河村郡

羽衣石の城
南條家系代々興廢之事并佛閣修造の沙汰
大永の乱崩天文の合戦之事并二子の太刀の沙汰因州狩野の里豊助之事
伯耆守毛利家に対し変心之事

伯耆民談記巻之十三

○古城古所

今云ふ處の古城の譚は故有る所は古老の名を探り談は是民の俗言に捨ずして以て是を述ぶ亦戦書軍談の端を覗ひて之を以て之に惟ふに歳月邑里姓名等の雑違有る事少からず執ら諸庄郡郷の城跡を直梳すものにて元弘の昔より天正の頃は伯の國司等山名塩冶大内尼子毛利羽柴に屬して時の守将の令命を受く是全く戦國の風俗たり然りと雖へども或は盛衰に従ひ反逆を企て又は澤恩を顧みて國主に忠を致む此の兩義の族は各私意を以て境地を分ち古城を築いて家城と為す故に諸邑に城郭の地跡多きとかや中にも羽衣石小鴨打吹の城は山名南條小鴨累代の家城と有て房る事久し又小鴨の城は大永の乱に行松の道退城後は時の領主伯耆鎮護

の主将を置く事のみの城なりて其餘は皆小城にして時の砦擒上或は廣殿又は大舘の類なるべし天正十年羽柴筑前守秀吉朝臣惟任紫田を退治し其功成て聽て天下諸将の上に座し給へは東西の國守南北の郡令日に走り月に来つて執札献資終に天下の主将となりて天正十一年に諸所の城主を改決あり南條は羽衣石の城主として東三郡を領し西三郡は吉川領となる餘の諸将も南條吉川両家の幕下又は與力となる其後徳川聖君天下をしろしめされ慶長五年関ヶ原の陣あり然るに當國の諸士多くは石田三成に合體す時に三成敗北して合戦やぶれ與黨の諸士或は戦死し又は浪泊の身となりて各亡城廃國す此羽衣石を初めとして處々の郷城悉く泯滅して米子湊山の城を伯耆の一城となせり所謂七城の分野を晩ふに歳月遠に移るときは石累いたつ

らに類敗し喬木鬱々として風聲悲しく隍堀空しくせまり埋りて青草茫々として水音さびし去れは興廃常ならすして各城の簾籏は嶺の紅葉を變して鹿の園となれり義戦干戈は谿の荊棘と易へて狼籍たり塁に凄涼荒穢して只何某の城何山の郭なりと云ふて字名に古跡を称するのみなり故に悉しからす前後次第一二ならす其大概を以て是を述ぶるものなり

◯羽衣石の城　　土海郷

當城は南條の大祖貞宗當時貞治五年此國を管領して初めて築く所なり當家代々家城となし子孫當城に在守して居ること凡そ二百三十余年の星霜なり然るに二十代の長嫡中務大輔元忠に及び武運傾き石田に合躰して関ヶ原の合戦破れ此時當城寺院共に悉く泯滅せり其後元忠は漂泊浪輩

の身となり終に慶長十九年に大坂に於て亡命せりとかや
南條系譜の事累族興廢の事沙汰并佛閣造營之沙汰
貞宗　伯耆國貞宗と称す明徳元年に卒す人皇五十九代宇
多天皇の後胤佐々木兵庫頭成頼より二十代左衛門尉源貞
清の長男塩冶判官高貞の二男尼子南條源朝臣貞宗是南條
の太祖なり高貞出雲富田の城を退散のとき三歳にたる男
子あるを臣八幡六郎之を抱きて播州陰山に走り高貞の舊
臣廣瀬帯刀と云ふ士の漂泊の身となりて居るを頼みて此子を
預く然るに帯刀之を抱きて越前の國へ赴き南條郡宅良の
里に知人ありて此所に蟄居す暫く年月を送り此子漸く成
長して後將軍義詮卿に仕へて處々の合戰に軍功を顯すに
依り武威日々に盛にして終に伯耆を管領し貞治五丙午の
年羽衣石山へ一城を築く夫より子孫累代家城として當城

に居す入城五年を過きて應安四辛亥の年引地村の九品堂
を再造して即九品山大傳寺と号す抑當院草創の事は人皇
六十四代後一條院の御宇萬壽元甲子の歳建立あり大和當
摩寺の供養を此地に移し其故により處の名も引地と称す
今や七百余年に及ぶ又至徳二年越前宅良谷に七堂の高閣
を建立す今普門山慈眼寺此なり開山天真大禪師に示を受
けて禪に進むことを以て即ち貞宗を慈眼寺の開基と為す
故に靈牌を今に建つると云ふなり
景宗　宮内少輔と称す貞宗長男なり明徳元年に貞宗卒し
て景宗家續す昔時山名武威甚た盛にして當國を領するに
依り命を受け之を幕下に加へて國の諸候たり應永戊子
の春三月正法山景宗寺を羽衣石の谷に造立して當家の菩
提寺となして寺領二百石を寄附す然るに當城泯滅のとき

景宗寺大傳寺両院ともに層樓高閣悉く滅却す時に慶長五
秋九月下旬なり其時景宗寺の住職仙長禪師其夏の半より
雲州杵築の神職杉谷太夫俗縁に依り彼太夫か宅に滞居せ
しに羽衣石亡却の後長郷田へ帰り元来當家師檀の僧なる
により一宇の草庵を設け佛事供養の施僧となる其後彼の
草庵を以て一寺となし景宗寺の山号を以て正法山と称し
仙長の長を寺号の頭に置き又大傳寺の傳の字を以て寺号
となして正法山長傳寺と称す即ち仙長開山となりて天嚴
仙長大禪師と号す又九品山大傳寺滅却後一百有餘年の星霜
に到て只辻堂の如く中絶ありしを長傳寺二世天先嶺大禪
師是を愁て勧化をなし終に享保五年高閣を再立して即ち
今の九品山大傳寺是なり也
長應機堂大禪師と号す貞宗二男なり越前に於て成長シ宅

良谷へ走り普門山慈眼寺の天真大禪師に見へて受法し機堂
長應大禪師となつて普門山二世の開山也後當國に隠して
昔源寺定光寺此両寺を建て終に各寺の開山となる此禪師の
平佛閣の巻に一世誌す遷化は應永九年なり
經時尼子左衛門尉と称す貞宗三男なり所謂經時を三男
とする事は南條家の傳なり或説に經時とは二男とす三は
女子機堂禪師は末子なりといふ
宗定但馬守といふ宮内少輔景宗より四代の孫也永正十
一年に卒す時齢九十一歳なり法号月峯宗祐大禪定門則ち
景宗寺に葬る
宗皓越前守と称す但馬守宗定長男なり永正十一年春秋
四十六歳にて卒す法号心證宗泉大居士永正二乙丑の歳将
軍義澄卿と足利義植矛楯に及ひ此國宗皓義植朝臣に合躰

一京都に於て大に戰ひ武威を現はす事甚大なり
宗元　豊後守といひ後に入道して宗勝と称す童名は虎熊
と云ふ蓋し虎熊は代々當家の幼名なり越前守宗皓の長男な
り宗皓卒して後十八歳にして家を續す近遠無双の强力にし
てしかも大器の勇將なり食地は東伯耆三郡を領して當國
諸將の宗と得たり十七歳のとき小鴨掃部尭と口論して尭
の食指を切られ夫より片輪となりたるなり
掃部口論の事は別に誌す所に委し陰德太平記には彼の
口論のとき尭の小腕を打落されしにより宗勝入道は片
手なりとは無しと述へたり
大永三年尼子經久再ひ本國を押取富田の城に移り雲州数
ヶ所の城を攻落し籠兵を追拂ひ終に十一ヶ國の政事を主
り息晴久に及ふ八州の太守となる大永四年五月下旬經久

當國に切入り山名の領内淀江尾高天満不動か嶽を攻落し
及東伯耆八橋大江城を攻め其破竹の勢を以て羽衣石の城を
攻戰す南條暫く支ふるといへとも敵方猛勢にして終に城方
敗北す此時伯耆の諸將豊後守を初め山名行松福頼山田等各
家城を退散して漂泊牢輩の身となれり此大永の乱崩
をは古老傳へて五月崩れと今に称すとかや此の時羽衣石の城
には晴久の伯父尼子紀伊守國久移りて東三郡を領す二男
式部少輔成久は泊川江の城に居住す尾高八橋の両城には
吉田筑前兄弟居して伯州の押へとして政事を司り豊後守
當國を追出され因州へ走り布施の城主山名勝豊但州山名祐豊
を頼み浪客と成て暫く星霜を送る然るに尼子も利輝元と矛楯
となる時に天文九年の秋尼子晴久数萬の軍士を卒し一族
不残藝州へ進発するにより伯州へは尾高の城主吉田筑前

守同左京亮惣押として指止め置かれしに此時經久の爲に大永に
崩れし伯耆浪輩は諸將豊後守を初め各晴久藝州発向の跡を
覗ひ虚に乘て領國安堵せん事を慮り同く冬十月上旬因州布
施の城に集りて各戰評軍談をなす其議一決確談に及ひ既
に伯州表に発向す武田山城同丹波南條豊後守其外の諸將
先陣として天文元(三)年十月八日其勢都合六千余騎泊り近き
邑に着陣す又吉田兄弟より此事聞や否や藝州へ假るによ
り羽衣石の城主尼子紀伊守國久同兵部太輔豊久人数を卒
いて帰國有て吉田兄弟と戦計評策の確論に及ひ國久は羽衣石
へ吉田は八橋の城へ帰る斯て合戦始り終に武田敗北して
馬野山へ取上り支ふるといへとも頻に攻戦するにより因州勢惣
崩れになり遅延りて大に敗軍す武田山城守叶はすとや宿藻
塚にて自害す此時山城帯する所の太刀二子と称する名刀

なり又尼子方にも兵部太輔討死す然るに豊後守入道宗勝
は橋津の橋を隔て吉田肥前守と相戰ふ時に橋桁折れて東
勢南條方を始め数百人水底に落チ各亡命す去しとも宗勝入道は
無双の水練なれは子にも稀なる手利にて水底を潜り遥の海
を游き廻り被(カヅキ)する海士あるを見て南條豊後守なり助けよ
と謂ふに海士それを聞て寔に豊後守ならは左の手の指なかるへき
也といへは取かれて手を上て切たる指を見すれは今は疑ふ所な
しとて急き舟漕き寄せて助けるとかや
宿藻塚は下西郷上井邑の山の端にあり今に爾か称す

二子の刀の事

二子の太刀は武田累代の重器にして天文九年橋津合戦に
山城守帯する處の刀也然るに合戦敗れて宿藻塚に於て
自害す時に臣の何某此刀を取て因州へ帰り家續し三河

守高尚に渡す
三河守高尚初は又五郎と云ふ山城守の長子也因州久
松山の城に居す後に山中鹿之助に攻落されて高草郡
鴨尾の城へ移る
三河守鴨尾の城へ移て後合戦起る同郡讃貫邑の久義に
於て戦死す其後二子は氏族加納村武田何某か手に渡り
代々所持し重器となす彼か子孫加納邑勘助として今に人
知黎民也此勘助か一族布袋邑に何某とて有けるか此者
武都に行によりニ子を琢磨せんとて勘助彼者へ深く頼
ミて之を渡すに何某武都に趣て後彼地に於て亡命しけるか
又は別事の仔細ありしかそれより二子の太刀は再ひ加
納へは帰らすして終に紛失したりとかや
二子の太刀は無銘なり然るを号して守と附て称する

事は全く武田家の傳来なり鞘朱塗鐔赤銅丸しに栗に
鶏の模様ありしと族民傳ふるなり此太刀の事陰徳太平
記にも其号を述べたり
天文十一年經久中風を煩ひ半身のみ叶ひ是により息晴久
政事を行ふ時に大内義隆毛利元就大軍を卒し雲石の二州
へ発向晴久と相戦ふ是に依て豊後守は小森山田等を引倶
して雲州へ発向し大内毛利へ相加り数日大に相戦ふ然り
と雖雌雄不決毛利大内雲州表を引拂ひ尼子勢附縫り追討
しけるに藝州勢退散して直に吉田へ蒐取る此時南條明衣
石の城へ帰入す
南條帰城の事陰徳太平記には永禄二未の年帰城すと有
元亀元年豊後守宗元は政務を伯耆守元績に譲り入道して

宗勝と道号して隠士遊楽の境涯となる同年の春富田の城
へ訪ひ夫より杵築大社へ参詣し帰りを大仙へ登山し諸國
順禮して八橋杉原播磨守盛重か城へ訪ふるに甚た饗應して
酒宴数盃に及ひ立別るに途中に於て病悩あり羽衣石帰城
後五躰悩乱し已に絶命も近きに逼り息元續に遺言す我此
度の病は全く杉原か毒害なり此故を按するに我を滅亡さ
せ伯州一圓を領すへき意謀て思惟をなすといへとも差したる
意恨もなく徒らにお過しか歳徂き日来て今日幸の設けなり
と鴆毒を與へたり吾落命の後に至て彼は元来表裏第一の
奸賊なれは毛利吉川へ讒言して當家滅亡の密計顕然なり
全く心を許す事なかれ梁は吉川無二の旗なれは必其色を
面に表す事なかれ吾已に七十有餘生死なんそ念あらんと
言畢て終に天正三春二月下旬に卒す菩提所正法山景宗寺

に葬送し院中に廟を設け决叟宗勝大禅定門と法号す
息元續家督相續して後舎弟元清元秋を初め一族及ひ老職
諸臣の面々に至るまて宗勝臨終の一言にて杉原に深く怨讎
を抱くにより此事潜に杉原に密通するものありて精しく聞
くに依り播磨守も安からず思って自己の暴逆を防かんために雲
州へ走り元春に告くるやうは南條入道去春某か城へ訪ふ老躰
ゆへはれさる大酒を好み病を受るをは某毒酒を與へ病悩す
と舌頭を動かし臨終に望むにより子供一族家人等迄も野
子に寇を挾むよし全く故なき事なり近年都て南條陰謀あ
り其故にか様に述しなき事を巧言すと然りといへとも元春
は謙て彼と南條と不和なる事を聞く故に速に信容無し然
るに因州荒神山の城主毛利に背くに依て藝州の下知として
元南條杉原両将に催促ありて尾高羽衣石を立て彼地へ進

発して大に戦ふ程無く城を攻落す山崎十兵衛と云ふ強兵
を南條か與力山田出雲の長子蔵人討留む此合戦にも意恨
の色は見へすと云へり

信元　備前守信元と云ふ越後守宗皓の二男伯耆守元續の
伯父なり田尻の城主、天正九年元春の為に亡城す委細は
田尻を述ふる所に出たり、息兵庫頭元国と云て田尻に居
す法名心月宗圓大居士

元續　初め勘兵衛後に伯耆守と称す法名南光院殿伯翁全
邦大居士豊後守宗元の長子、宗元は元亀元年に入道して
宗勝と号し其身は隠躰となり伯耆国守に政事公務を任す然
るに伯耆守性質淳直にして況や武烈衆を出て謀計群を動
かす大膽の器ある故に羽衣石益々盛にして世人呼て伯の
東雄の將と評称す此歳尼子の英士山中鹿之助富田落城の

後漂泊浪々の身となり武者修業として近國へ徘徊し山賊
強盗のかたちとなり歳月を移せしか然るに尼子紀伊守國
久の三男左衛門督之久の末子出家して泉州堺のほとりに
ありけるを招き出させ還俗させ尼子左衛門助勝久と号
して大將となし舊臣の残黨を招き又但馬近江の邊の海賊
強盗等を集め伯州に立越末子城主山名治部太輔之秀并に
隠岐の判官を語らひ出雲を発足し末次の城を乗取り島根
を本城となし諸處を放火して勢ひ甚さかんなるにより富
田の城主吉川駿河守元春数箇所に砦を出張して是を防戦
す此時伯州の諸將へ元春より軍令催促あり東伯耆に於て
は南條小鴨山田森河口、西伯耆にては杉原横山吉田日野宍
道、其等の面々諸勢を率し富田へ走り合軍談をなし島根を
攻るに先鋒として南條伯耆守杉原播磨守此両將を先陣と

して直に赤次の城をとりまき日夜を分たす攻撃するによ
り城中終に敗北し米子の城へ打合む、同初冬中旬雲州勢
大軍を卒して伯州へ押渡り湊山を大きに攻む然るに依て
尼子の軍兵頻りに崩れ隠岐判官一番に敗北して本國隠岐
へそ逃去る江册の海賊猥盗等悉く我先にとそ逃失せぬ又
城主山名治部太輔之秀は城中に於て自害す大將尼子左衛
門尉勝久臣山中鹿之助残黨を集め播磨の國へそ落行きけ
る然るに依て吉川勢凱歌を唱へ頓て富田へ帰城せり此時
伯耆守播磨守の軍功諸將に勝れり大將駿河守元春両將を
大きに感賞あることも甚しかなり
其後元亀二年毛利大膳大夫元就卒去す時に星霜七十二歳
既かや嫡孫右馬頭輝元遺跡相續し武威連綿として日々に
盛なり

天正六年勝久残黨を集め其勢二千余にて播州上月の城に
楯籠る然るに織田信長の下知として羽柴筑前守秀吉後詰
あり又小早川隆景を惣大將として上月の城を取巻き大に合
戰し終に上月落城して勝久自害す此時伯耆守其外伯士の
面々吉川元春の手に属し大に武畧を顯せしとかや

伯耆守毛利家に對し變心之事

天正七年三月上旬伯耆守一族老臣等を集めて謀るに今東に
信長其臣羽柴惟任あり西に輝元其属吉川小早川有り東西
名英雄勇臣の面々何れか大樹の器に相當らんや當家は其
中途に挿まれ近年毛利家の政道に相随ふ然と雖共杉
原盛重といふ侫人道に横はり賢を蔽し虚を挙て当家を讒
訴し君を曲て而を枉し心をわたくしして飯を提たり今吾毛
利家に於て更に野心のさ盛する無し然といへとも彼は毛利に

眤近の士たりしは終に當家盛重か爲に滅せられん事近きにあ
り其時後悔すといへとも益なかるへし各如何んと云ふに一
族諸臣ともに暫く口を閉ち頭を低れて居たりしか時に伯
父備前守信元か曰されは當國の諸士前に尼子經久の幕下
たり經久謀逆ありしにより暫く流浪の後は五ヶ國の諸将各
我意を振ひ何れの幕下と云ふ事なし然りといへとも大概大内
義興の政道を守るに其後尼子富田に歸城して大内毛利と
相戦ふ此時は大内亡ひ毛利尼子と両雄に分れ朝に變し暮
に化す然るに毛利勝利を得て終に十ヶ國を領す是時當家
其外伯州の諸將も毛利に約を契り盟をなして今に其下知
に隨ふ然りといへとも普代恩顧の家臣と言ふにもあらす況や
杉原と云ふ奸人あれは今更變心なき事もあらす加之先年元
就の下知に依て八橋大江の城を矢先豊後守に渡さるゝ砌に

依り某代官として彼地に居せしに盛重元就にうかゝひ八橋
の城は伯州の管轄なれは信元如きの若輩者の守るへき城
にあらすと讒謗して某をは今の田尻の城へうつし終に已
か家城となし二男又次郎を差置て其身隠居の地となす又
豊後守に毒酒を與へて亡命せしむ此後の災ひ防く事かたか
るへし傍以て東馬を進めんに利あるへし因州亀井荒木磯
部作州の神明寺此の面々各當家の親族心知る旧友の輩なれ
は全く武運隆盛の大道なりと評談す爰に伯耆守か與力久
米郡堤の城主將山田出雲重直是を論して曰つ大永四年尼子
經久の爲に尊父豊後守當國を追はれ暫く漂泊の身となり
しを毛利の武徳に從ひて再ひ家城に移る其報恩を忘却し
て思はさるに東へ隨身の事又杉原に意恨ある事を毛利へ對
し反逆變心ある事あらすと云ふ然りといへとも此義伯耆守を

初め一族老臣等剰にまたらすそていよ〳〵変心の事に決定
す夫より頓て籠城の沙汰あり長和田表を差し塞き逆茂木
を引き十二の櫓門を設け岩屋の岡より五郎か谷く岩を構
へ究竟の軍士を置き羽衣石四十八谷に兵卒を配り伴城高
野宮には長臣山田佐助阿與守松ケ崎小城には小森和泉方
高泊浦川尻の城には山名小三郎氏豊岩倉の城には小鴨左
衛門尉元清各頻りに籠城なすす然るに依て杉原播磨守盛重
より此事富田へ訟ふ時に元春改工夫を凝らし和融を謀へ
まぬあり然れ共播磨守は頓て一族軍士を集めて軍議計
謀をなし合戦の貯に専要なり
伯耆守変心の事陰徳太平記には伯耆守仕士福山左衛
門元忠か小寺其前尼子の旧臣なるかより毛利は古君の
敵将なり然るに依て南條を信長に一味させ毛利て之

伯耆命せしめん事を案し此企にて伯耆守に反逆をすゝめ
しと述へたり

伯耆民諺記 巻十四

伯耆民諺記巻之十三終

伯耆民諺記　巻十四

伯耆民諺記 巻十四

伯耆民諺記巻之十四

目録

伯耆守一度羽衣石敗北因州退散之事
元續因州より羽衣石え帰入之事
元續橋津合戦之事
九郎左衛門尉元秋戦死之事
吉川長郷田表寄陣之事
吉川左馬亮長和田表退陣之事
羽柴筑前守久松を攻め直に羽衣石の後詰を為し鐙畑進発
す併に馬野山勢退散之事

伯耆民諸記巻之十四

伯耆守一度羽衣石敗北因州江退散之事

近年播州姫路の城主羽柴筑前守秀吉朝臣武威日々に盛にして近國諸将秀吉に心を通するより伯州の名将も利を捨て羽柴に属す然るに於て輝元安からず思ひ吉川駿河守を惣大将として一万三千余騎にて杉原播磨守を先陣として天正七年七月伯州へ発向し元春は橋津馬野山元長は國坂茶磨山に布陣し同月廿一日由良の城を攻落すにより羽衣石の城俄に騒動して先ツ長和田をさし塞き逆茂木を引き木戸を堅め頻に防戦の要害をなす斯くて吉川の大軍同廿五日馬野山の諸勢も利民部太輔を惣大将として三千余騎を舟と陸と二手に配分し先手は長和田表に押寄せ後陣は湖中に浮ひ両陣一度に鯨波の聲を上る城より期したる事なるゆへ胡籙を

かけ同凱を合せ其間僅二町余、両陣ノ打出鉄炮の響き湖山に
こたへ天地震動して百千萬雷一度に降墜するかと疑はる
両将不知して士卒息績への間もなく大に戦ふ事三日丹三夜雖
然雌雄更に決せすとかや駿河守元春は馬野山に在陣して合戦
の工夫を凝し吉川式部吉岡越後両将を招き此門羽衣石の合
戦を按するに大手ノ軍烈しきに依て城中の籠兵堅く正門へ
相支へ左右は嶺峻を頼み油断せし事必定なり軍士の中此
城の案内知たる者あらんと、依て之を求むるに式部の手の者は山田
世之助と申す士、元は南條の仕士たるか仔細ありて今当家の随士
と成れ彼は案内を知りたらんとて直に世之助を呼出し要害経
道を問ふに東は東郷と云ふ谷奥より径道あり足を攀登れ
は長山より城下を直下に見る西は西郷と云山手に續いて栗
尾谷と云ふ處を登るに蛇山の峯と云ふあり絶頂平かにして

羽衣石兵帯を只一眼の中に瞻望すると述ふるに元春打
黙き難波采女を呼出し汝三百餘騎を率し私に從はす今宵東
郷谷へ走り未明に城中近く攻入るへし又左馬亮元長は五
百余騎を率し栗尾谷より攻登るへし其時籠の人家を放火
せよ案内は世之助たるへし大手の攻将元経へ此旨可通と
委しく軍議戦評の事を吉岡越後元長元経へ相達す然るにより
明日廿九日の暁吉川鎮本の大軍一手となりて越来り本城
近く攻入り頻りに接て大に戦ふ城中の諸将軍士、猛勢を引請
け日夜数日戦ふにより勢氣相労れ防き兼ねたる所に敵は新
手を入替へ長郷畏を攻破り一二木戸を乗取り谷口へ攻め望
む處の鷲谷の人家を悉く放火するに炎氣天気に充ち餘烟谷巖を
曉らますたる蛇山長山両陣けや本城へ鉄炮を打込三手近
く攻ろ中ゟ伯耆守今は適れかたくして既に自害に及はんと

する所を臣の廣瀬出羽諌むるにより伯耆方は左柴越に三徳谷へ望み因州へ走り用か瀬の城主磯部兵庫太輔か方に赴く其外一族の面々臣か塩冶十六嶋小森荳嶋山田等を初め各城険の切岸を越し三徳谷へ集り妻子をは民家に忍はせ残黨を招き元續の跡を追ふて因州へ赴く 廣瀬は只一騎留り雑兵に矢を射させて器財雑具に甲冑を着せ口々に並べ置き静に雑兵を引具し餘烟に隠れて是も同しく三徳谷へそ走るとかや 斯て敵は案内知らさるに依り径道を追はす猶も城内へ攻入りしに人一人も居らさるに依りさては落失せたりやとて頓て凱歌を唱へ数火狼籍不可有之以て谷々に掟を下し毛利民部太輔元經八百余騎を引率し當城羽衣石に元春下知して移る又左馬亮元長は本陣馬野山に引退く又當城に尼子より賜はれる盆山の石あり 銘を残雪と称す信長

卿より賜る天下月毛と云ふ名馬有り 此二つの物杉原播磨守か手より奪ひ元春に奉す

此崩天正七年七月二十九日の事なり 陰徳太平記には天正十年九月廿三日と述べたり 又小鴨左衛門元清も此合戦と同時に敗北すとあり 雖然左衛門尉は此崩れの時は無恙して岩倉城亡城の時は天正十年の夏なりと邑民古老の諸に傳り蓋爾か謂ゆ處正説なるへし 久米郡大宮大明神の宝前に元靖臣の誓盟一札あり其年號天正十年五月五日と誌す列名あさやかに今に御舎にあり

元續因州より羽衣石家城へ帰入之事

因州用ケ瀬の城主磯部兵庫太輔は伯耆國守元續の小舅なり若狭の城主荒木は磯部か元の聟なり 鹿野城主亀井新十郎は兵部か烏帽子臣也

新十郎は後に武藏守と号す法号中山道月大禪定門慶長十一年丙午春正月廿六日に卒す廟は鹿野鷲峰の麓にあり
作州小原の城主神明彌三郎は伯耆方從弟なり爲一族相會して播州へ伴ひ戰評軍謀して其勢三千餘騎陣村山田を先陣として城の丑寅辰巳の岨より攀登り鬨を作るに元城兵俄に周章して防き戰ふといへとも終に城方利を失ひ長和田表へ逍走り一崩に敗北して諸將羽衣石を追落さる其時南條勢凱歌を唱へ頓て元續家城へ入り再ひ本國に歸入安堵すれは四民も大きに祝し千秋を延へ萬齡を壽く斯くて元續籠城の貯をなし所を見合せ砦をなし長郷田表には櫓を設け森下駿河、進遠州、同大和、生駒新藏、津村長州、岸田彌助等兵卒五百餘騎にて相堅め明見口には二の宮越後大熊、里正平、富田、吉田の面々、高野口には山田佐助西表遠見の高櫓を設

け景宗寺には相賀の一族野花尾坂を切り塞き上山越には進の下總、同帶刀は東郷を押へ蝶山には小森彈正海老右源助、津鍋谷前澤等を置き馬野山を直下に望み蛇山の山嶺には山田の一族太田中嶋原中村土師鈴木、充滿寺には一山の衆大衆、本谷口には豐嶋土佐舍弟幸八美田道鑑山本山崎宮越本城、獲本には一族南條九郎左衛門尉元秋大老廣瀬出羽河田伊織塩谷肥前南條芳八津山八郎酒井丹波遠藤宅間須田立花日野奥谷矢葺德光戸羽並河大熊佐伯多田渡邊齋藤安倍石井西宮一條知足院、又池の檀には南條與兵衛宗信尼子山下清水杉尾澤岡本等を措置き諸口を堅め兵備に籠城堅固に計術を相謀る

元續橋津合戰之事

九郎左衛門尉元秋戰死之事

天正八庚辰の八月十二日南條勘兵衛尉元秋南條兵庫頭元周山
左衛門尉元清同南條九郎左衛門尉元秋伯耆守之事舎弟小鴨
右小三郎氏豊右日下の端へ出張して軍談戦評をなす
日下の端は田尻の山の端を云小郎チ日下山と云小神の小
社なり日下大明神と号す盖聞ヵ日下と称する處凡て本朝
に二ヶ國に限る伯耆に河村郡則今の日下山又會見郡に
あり又肥前の國上道郡に有り外に此郷名なしと古書に
見へたり
右軍談一決して先陣山名六百余騎中軍元續一千余騎殿供
は八百余騎にて小鴨を前め一族の名将習十三日日下の川
を打渡り敵陣間近く押寄せ馬野山にて待設けし事にて両
陣一度に鯨波を合す
此時元春は藝州にあり息式部太輔元長馬野山に在陣な

り式部并に吉岡越後三千余騎を二陣に分け橋を渡し備
をたて橋津橋にて離村昔時の橋は今の往復より三町余
東上なり今云ふ橋は淺邑の橋と云ふなり
既に両陣矢合初め大に勇戦する所に先陣山名のそなへ浮足
になり中後の軍士惣崩敗北するに依り南條小鴨諸勢を集
め長和田表へ暫く息をなす然るに南條九郎左衛門元秋は
大軍敗北の事無念に思ひ引兼て居り一の隈峯を小楯にし
て合戦の様を相窺ひし處に敵方是を見附け八方より放つ
矢は雨の如く表に立塞がる兵とも三人宛一度に矢玉に亡
命す元秋の鎧に立つ矢は数を知らす又津村長門は殿供の中にあ
りしか遥に是を見て元秋なるかと驟て返し箭表に立塞がり大
に戦ひ敵を追拂ひ此間に羽衣石へと云ふに元秋かく深手負
ひたれハ城へ行く事あるべからすと曽て同心なき所に又

敵大勢追来る津村は四五十騎にて火水になりて又大に戦
ひ難なく敵を追ひ崩し静に殿して残黨をあつむ雖然元秋
の行衛覚束なし見渡すに長和田表を行過き給ふ然るに手
疵次第に疼み植木縄手に拙り馬上叶ひ難く落馬数度に及
ひ中間の何某軈て抱て傍の辻堂に入り暫く看病し深くい
たはる所へ津村は元秋の深手心元なく馬を飛はせて馳来
るにそ中間は又敵の来ると心得逃んとするに処なく終に
主君元秋の首を討りて降人に出づべき風情に見ゆ津村は
之を見て南無三宝と云ふ小仲間は其聲に長門なるを聞知り
今は猶敵よりも懼ろしく駈出さんとする所を長門大に怒
り真二つになし軈て元秋の屍を取り持たせ羽衣石へこそ
は帰りけれ元秋の執念彼の辻堂に止り往復の衆民を悩ま
す故に後に小社を設けて若宮明神に祝す夫より人を悩ます

愁しなく況や奇瑞他に異なりとかや

○吉川長郷田表寄陣の事

天正九年六月下旬姫路の城主羽柴筑前守秀吉播州を進発
あり因州へ向陣の為播州へよせ寄伏の城を後詰あり伯州
へも近日後詰ありて馬野山の砦藝州勢と合戦あるへき趣
因州より吉川へ告れは馬野山勢発向なき先に羽衣石をや
攻ん小鴨へや寄せはや因州にも加勢をやむかへんと諸将軍
談まち〳〵にして暫く時を移せしか先つ羽衣石を攻め落し伯
州一圓に軍令をかけ幕下となして諸勢一合して秀吉と相
戦んとして評議確論して近日羽衣石へ寄すへき旨南條か
細作のもの告帰るにより又馬野山勢押寄やと羽衣石の城
下近村大に騒動し四民東西に走り南北に馳る城中の諸将
は斯と聞くより軍談戦評をなし處々持口の要害を精しく固

を配り今や寄ると待つ處に馬野山勢都合二千五百餘騎同
八月十一日巳の上刻長郷田表へ押寄せ天地一時に崩るゝ
如く鯨波の聲を揚くるに城中にも即時に鯨波を合はす矢
合鉄炮せり合ふ事終つて両陣乱れて大に戦ふ
爰に光満寺の衆徒に真學とて悪僧ありしか今武蔵の清眼
と言けれて其丈六尺餘筋骨太く顔色荒き鬼髭左右へ追か
へす南蠻胴腹巻立烏帽子に鉢巻し長刀並短にかなし陣中に
搖出大に戦ひ甚た武威をあらはす時に寄陣の中に難波組
とて鉄炮の手練ありて彼僧を目當に打出すに其玉真學か
耳の脇より後へ打抜けて烏帽子は空に翻飜たり流石の真
學壗へ兼ねて前に動と倒るれは敵陣嘩と打笑ひ其悪法師か首
取れやと聲々に喚きかゝるに城中には其首取らすなと掛合て
両陣入乱れまた大に戦ふ然るに日も西山に傾きけれは敵

味方ともに相引にして其日の合戦止ミにけり光満寺の真學は
給仕酒井丹波守の三男なりしか幼年より出家すといへとも讀經
歛法よりは心疎く兵法武學に氣を盡し終に三衣を甲冑に脱
き替へ道に背ける業をなす故にあへなく死をとけしとあ其夜半
に叫ひ死ぬこそあはれなりけり

吉川元馬亮長和田表へ退陣之事

明くれは十二日辰の刻より箭合大きに戦ふといへとも城方防
戦堅固にして馬野山勢攻めあぐみてぞ居る兎角時移り昼夜六
七日両陣仲悶に引て雌雄さらに決せすといへとも敵方六分の
狗ありて士卒氣を呑む大将元春長氣をせり頻に下知し給へ
は難波福原土肥多知見其外諸卒曳々聲を出して攻戦ふに
より城方防くに堪へず一の木戸を攻め破られ大谷道まて
引退き既に危く見えけるに粟津村長門由良大蔵戸羽権吉

豊嶋幸八岸田弥助美田矢吹菖蒲石川を先として城方股肱の忠臣等命を亡ふを顧みず撓みもなく大に攻戦ふにより敵方大半討死し門田前へそ一崩に敗北す死體土海の阡陌に充満し血は東郷の湖水に漲り浸す凡城中戦死の士の百六十人敵方に百八十人手負は両陣数を知らず城方宗徒の面々津浪玄蕃油良大蔵山田傳六戸羽権吉其外譜代の士卒十五人討死す斯て敵方尤馬亮門田の辺に屯して暫く軍談あるに是迄にては中々落城難かるべし然るに長陣して時を移す其間に鳥取の城は攻落されて是もとらず彼も救はず其上羽柴攻来るは必定なり父元春は帰国のあとと我今前後に敵をうけ進退殆と惑ふと眉を潜めつぶやきけれは吉川彦七吉岡越後諫めて曰く一先づ馬野山へ退陣あり要害堅固にして藝州への諭入羽柴の陣を待受けて有無の一戦然るへしと述ぶるにより

門田前の北の諸勢を八月廿三日馬野山に轉して此時元春在陣なれは羽衣石岩倉の両城ともに落城し其上因幡久松山の城も恙なからん物を又南條も敵門田より退散のとき附入にして追討せは馬野山に屯し離し蓋し両陣ともに晝夜撓みなき数日の戦に精氣疲れてや其心もなかりしとなり

◎羽柴筑前守久松山を攻め直に羽衣石の後詰として鐙畑進発并馬野山勢退散之事

天正九年辛巳三月廿五日筑前守秀吉数萬の軍士を卒し因州へ発向して所々を放火し鳥取久松山の城を攻め終に両城十月廿三日落城し經家始め宗徒の軍士自害す同廿六日鹿野亀井新十郎の城へ入り止宿し今年初冬下旬に及ぶ故に一先姫路へ帰城し来陽伯州の西並に雲州表へ進発すへしと宣ふ処を伯州小鴨南條より飛脚到来吉川元馬亮元長當國馬野山

に在陣して日々戦ふと雖彼は多勢、之に加ふるに雲州より後詰ある
に依て防戦難儀に及ひ落城近きにありと告くるに依り士卒は長く
因幡攻故軍に疲れて如何ならん併し南條小鴨の両陣滅亡せは伯
州は一圓に藝州幕下に属すへし　然らは因州まても如何あらん
もつきと後詰進発の沙汰亀井宮部之を承り急に進む之に依て
二十七日鹿野を発向あり即日申之上刻潮津村の鎧畑に布陣あ
り木の下平太夫蜂須賀小六郎を呼寄せ汝両人此日直に羽
衣石へ後詰すへし某因州より発向すと聞かは小勢なる元長
急に羽衣石を攻むることもあるまし　次には南條へ勢を附くる
計策なりとあるにより両人之を承り直に潮津を立て三千余騎
を卒し道筋に放火し羽衣石へと志さける又藝州へは秀吉久松山の
城を日夜を分たず攻め戦ふ由其旨急を告さるに依り吉川駿河守
元春後詰せんとて九月下旬當國八橋杉原播磨守盛重の城に

入り盛重と軍談あり雲石伯の勢を催従し旗本の三千余都
合六千余騎の軍士を引具し暫く八橋に屯あり十月三日毛
利元就は六千五百余騎にて元春の後詰として雲州富田の城
へ入り小早川隆景の着陣を待設け一合して元春に力を合す
へしと宣ふに隆景今暫し待ち給へと抑留あるに依り暫く
出雲に滞城ありしとかや
斯て元春は八橋を立て廿五日馬野山へ着陣あり翌日は因
州大崎へ陣を轉せんと評議ある處へ久松山丸山の両城共に
一昨廿五日亡城諸將自害し残黨悉く降人或は落失ぬるの
よし告来るに依て元春さらは直に因州へ走り有無興廢の
一戦を決せんと云ふ　然は細作(マヽ)帰羽柴南條を見継へしと
近日當國へ立越へ處々の小城を陥れ直に富田へ切入るへし
との説に依り然らは此處に於て秀吉を待ち一戦に及ふへ

しとて其儘馬野山へ退陣あり然るに如したりけん両将矢
合もなく對陣のみにて三日時を移せしか終に両勇退陣し
て秀吉は羽衣石へ兵糧を丈夫に入れ置き鉄炮三百挺玉薬
相添へ并に足軽三百人南條に懸り天正九年十一月廿八日
播州へ帰城あれは吉川も十月朔日馬野山の陣を拂ひ藝州
へ帰國ありしとかや
或人の曰ク秀吉鑓畑に後詰のとき吉川駿河守元春は出陣な
く息右馬亮元長馬野山に在陣たりけるか秀吉の猛勢を恐れ
馬野山を拂ふて出雲富田の城へ籠れりといふ此兵乱の役
一ノ宮の社人米原對馬貝治勘左衛門と云ふ者に語る馬野山
大將吉川元長天正九年の秋馬野山に於て轉寐してむつく
と起き物噪しく立廻り給ふを近習の若士押静め暫くあって
元長云らく夢中に東郷の湖上なる一宮御冠山の山嶺より車

輪の如くなる光物出現して海中に飛入り数多の箭火となって海陸
に充満す次第に近附き馬野山の営城をとりまくと見へて夢覚めか
しにより斯く驚きぬるとかたり給ひて後暫くして悪寒頻りに
甚しく終には瘧病となりて数日苦悩あり然るに倭文
の神社へ立願して奉幣を捧げらる其後瘧病は退き快全す
といふとも夢中の如く果して羽柴筑前守秀吉猛勢を以て潮
津の鑓畑に出て数万の篝をたき續け海陸に炎勢充満し
て光り渡る其分野を考ふるに前の夢に均し然らは今夜の合
戦利あるへからすとて竊て馬野山の陣を拂ひ雲州にこそは
帰陣ありけれと也とそ
尼子晴久一宮修造の後南條豊後守入道造営して
神領を改め外に新地を寄附し置く
一宮の神領千三百石の内と謂ふ小讀状が所々に有りこの故は

祭禮祀典怠慢無く天下泰平國家武運長久を祈るか故に馬
野山の強敵を神拂ムに拂ひ患を厭はずんば有るべからざる
也と治國の後に元就の信心弥増したるが爲なりと云ひ傳ふ
たり又羽柴退陣の事を或人曰ク元長が羽柴よりも早く馬野山
の陣を退陣するにより頓て羽柴も鐙畑の陣を馬野山に移す
此時元續は羽衣石より出て馬野山に走り筑前守に対面し
近年籠城苦難に及ぶの條を述ぶるに長々の籠城と雖兼無
く防戦せる事全く武威のなす處なりと甚た賞感あり来陽
には富國雲州へ發向すべし其中は猶も籠城を堅固に為せとて
近郷へ兵糧を催促し鉄炮三百挺玉薬まで沙汰し足軽三百
人差副へ羽衣石の城に入れ置き其外政事行令して天正九年
十一月十一日馬野山を立て播州姫路へ帰城し十二月廿日秀吉は
家城姫路を進発し廿二日江州安土へ至り信長に歳末の喜祝

ありて其祝物献品は夥しき事なりと太閤記に述へて秀吉安
土へ歳末之嘉瑞の事と謂へるは此年のことなり
陰徳太平記には筑前守羽衣石後詰として六万余騎を卒
し羽衣石の峯つきなる高山に布陣して馬野山を直下
にしまた吉川元春は僅に六千余騎にて馬野山に砦を
設け出張して三百二夜對陣あるに依て秀吉吉川の强
武なることを甚た賞感し軈て退陣ありしに依り吉
川も馬野山の陣を拂ひて藝州へ帰城せりと謂ふ

伯耆民諺記巻之十四終

伯耆民諺記　巻十五

伯耆民諺記巻之十五

目録

馬野山之事
羽衣石城下氏滅中務少輔亡命之事
一族旧臣等法俗二男之事并高野山之沙汰
宗勝入道虎熊と謂し時鷹野の帰りに岩倉城に於て口論の
沙汰
羽衣石山之事并山号之事
羽衣石之事

伯耆民談記巻之十五

○馬野山

此山は羽合の郷橋津の邑にあり只平山の短山にして木立
もなき草山なり右は根岳と高て険峻青巌の幽谷にして人跡
去断ち前は右高き東郷の湖水渺々たり後は橋津川汎汎瀁
淼として一筋の橋の外に往復の道を絶ゆる山なる故其地の
利甚堅固也昔時天正の比の要害今に堀上の土手麓より朧
に限りてあり山上は南北三町余東西二丁余にあり々四
方の堀上六七尺の高さ南に門跡あり又搦手の極中に大な
る窟あり往古より伝て岩屋なりと云小鶴山橋津より長
瀬此両邑の街にて能く見ゆ麓より堀上の小土手も見ゆる
ほどなり

根岳は浜辺なり山岩壁の下に一つの穴あり此穴邃に奥深く

非ヱ昔は三徳山へ往復せしなりと古邑の民等卮言に語る
然りと雖ども邑童だにも彼岩穴へ臨む事なければ其沙汰
悉しからす
天正十年六月三日備中に於て羽柴筑前守秀吉毛利大膳太
夫輝元と和睦をなすにより雲伯鉾を止て初めて伯州平か
也同年秀吉怨敵惟任日向守光秀を誅罰して後六十餘州を
併呑し凡諸國の城をあらため其主將を撰決あり其時元續
當國を一圓に領し然るにより伯州大に穏かなり同十二年
諸國悪逆の残黨悉く泯滅して同十三年秀吉関白に歴上り
同十四年筑紫へ出陣の沙汰あり此時元續毛利家和談に及
ひ同十五年日向表高城の遠巻あり此時薩摩太守義久臨勢
を率ゆ元續元清か陣へ夜討するにより宮部木下亀井垣屋
福原合勢の軍士を以て是を救ふ然るに依り元續勝利義久

敗北す此合戦に元續大に功を顕はし秀吉賞感有て給ふ事甚大
なり
同十六年皇都聚楽の新城成就有て天皇御幸ありし時に秀
吉の後列二行の諸大名右の二十五人の末に元續は列すとかや
其後は病身となる然るに依って上方参勤の事は舎弟左衛門
尉元清是を勤むとなり同十八年高麗の陣の沙汰大阪に於て諸
大名着到をしるさる南條左衛門尉元清千五百人の人数を
出す同十九年に至て病悩重くなり終に其秋七月十二日卯
の上刻卒す命齢四十三歳なり菩提所景宗寺に葬り南光院
殿伯翁全部大居士と法号す
久米郡岩倉城ハ天正十年五月廿五日吉川元長の為に滅ぶ
此時小鴨左衛門尉戦死を逃れ舎兄南條伯耆守元續の家城
羽衣石に走る其後元續病氣し息の中書は幼きにより政

事其外何角と元清後見として相行ふ此砌よりして小鴨
とは称せす南條左衛門尉元清と云ふなり
天正七年の砌より伯州一圓に支配せしと見へたり又因州
氣多郡鵜辺谷も家領すと云ふ岸田弥助か感状表にも此事
を述ふ其文に曰く
今度長(従)郷田對藝州勢以太刀討追返大勢其上引取敵之
鑓候條無比類手柄可抽忠勤者也
天正七年八月　日　　元續　在判
岸田弥助殿
副書云同東郷之内五十石宗増並に因州鵜辺谷の内五十石
宛行者也と云ふ又山越の弥助感状副書に曰久米郡倉吉
守護分の内にて百石の加増。又天正九年高野宮軍功の時は
會見郡の内にて百石宛行はる感状あり山田畔之助感状には久

米郡打吹山の麓又は越殿前同郡服部邑太郎兵衛田一圓に
宛行者也と読す山田か感状一通あり會見郡米子に杉谷何
某と云ふ黎民畔之助末葉にて所持し居けるか其後一族羽
衣石何某と云ふ因州の隠士彼感状数通所持すと云ふ其外羽衣
石諸士の血譜今に民家に残る感状所持の者まゝあると云
ふなり
元清　小鴨左衛門尉後に南條左衛門と称するなり豊後守
宗元の二男なり久米郡岩倉城主小鴨掃部頭か為相續
元秋　九郎左衛門尉元秋と称す宗元三男なり長和田表にて
戦死す法名雄山秋英居士　景宗寺に葬る
千世姫　慶長元年に早世す瑞雲院珠應妙桂信女と法号し
て景宗寺に葬る
元忠　童名虎熊と号す蓋虎熊は當家累代嫡の童名なり後に中

務大輔元忠と稱す高名記には政忠と誌す伯耆守元續ノ息居
り天正十六年の冬より元續中風を病み終に天正十九年に
卒す時に虎熊十三歳なり然るに依て伯父左衛門尉元請後見
して家事を行ふ其後虎熊は中務少輔と稱するなり中務は字を
中書といふ然るにより時の人南條中書と稱ふとかや家續
して後城下及ひ領内穏なりし所に慶長三年関白秀吉薨去
相續の秀頼は六歳なりしか故に天下の政事徳川聖君の御下知
なりし時に慶長五年石田治部少輔増田右衛門尉長束大蔵大
輔逆心の根本と成て諸大名不和にして大に騒く徳川聖君
を亡し奉り秀頼を失ひ天下を押領せんと巧み計策をなす
會津中納言臣直江山城守を計り主君中納言に逆意をすゝ
め奥州米澤の城を堅め上方参勤を怠り香橋の原に新城を
築き合戦の用意専一なり然るに徳川聖君二十万余騎の

軍士を率ゐ関ヶ原に於て對陣あり此時中務少輔元忠石田よ
り一味の廻文到来す元忠頓て諸臣を集め是を評談あるに
廣瀬織人諫て曰ふ世上の變遷を考ふるに徳川聖君の御政道誠
に七徳の餘威を靡し九功の大化をなす質氣天地賦自の太
樹の器備り給ふ是を背く則は天地のときに違ふ然るに石田
が為す處の逆心甚た論談するにたらす若し今度三成に組
みなは當城滅亡近きにありと深く諫め又或時山田佐助に
是非問ふに此度石田か廻文に御幼君の御有り當家は秀吉の恩
澤海山にもたとへかたし然るに徳川聖君に随ひ給ふ事諸將の
嘲を受ぬるみなりけり賢士の道に背く勝負は天運のなす所
といへは元忠此義を尤と同意に隼人か諫言を用ひ討して
終に石田合體の逆黨となるまへに諫めし廣瀬隼人は元忠ノ
大祖伯耆守貞宗ヲ三歳の時より生育したる廣瀬攝刀の末孫

なり元忠ハ石田ニ合體の事を朋友由良大藏中村六郎治津村長
州山田越中相賀岡之助河岡伊織宅間角兵衛等に或時隼人ニ
語て大に悔れたり関ヶ原合戦敗れしとき彼九人面々隼人を
始め各々中幣けんとて大に詫ひ遂に然尭附
慶長五年七月上旬大阪へ登り諸将に引軍談を成す同九
月関ヶ原に於て大に戦ふ時に西國勢の陣頭頻に襲れる
始き諸卒の心地なりて始終の合戦利を得す遂に九月十五
日西國の諸将敗北す石田治部少輔三成小西摂津守行長安
國寺恵瓊等は生捕られ諸将の前に面縛して華洛を廻し
終に首を刎られ梟木にかけられ長く武門の恥をさらす此
時中務は漸く死地を遁れ夫より漂泊窄涙の身と成り浪
夜石は此時に亡卻して城郭社頭佛閣に至る迄[illegible]残
らく悉く焼亡して一時煨燼の山野となる

其後元忠は慶長十九年大阪大乱の時一族の磯部兵部尉世
倅両人相伴ひて城中に帰り濃州敗北の諸士其外浮浪者彼
是五百余騎を率し天王寺を堅む元忠は秀吉公の厚恩を忘
れす進退に機を案して城中に走りしなり然るに天命の感
する處か俄に変心起し一通の矢文を認む其文に曰く
蒙御免者成降人罷出當手之持口より御陣を引入尤
其魁可相責城中條急度可頼御披露者也
元忠
件の矢文相認め責口藤堂和泉守高虎陣中に射付れは頓て
勝山の御陣に上る
勝山は摂津大阪の近郷の村名なり慶元の合戦に徳川の
将軍御本陣地なり初は茶磨村と云ふ然るに此本陣の時に
上意にて勝山と改号あり今に爾か称するなり

任越意可被遣との上意に依て頓て高虎返輸を認む其文言
如左
貴殿降望の趣速に達上聞候處御子細無之功に因て宜
賞との上意相違無之者也
然るに元忠天運の盡たるにや高虎の返矢は明石掃部之助
か陣前に落ち変心忽ち顕はれ其夜城中に於て殺害せられ
て臣等並に一族磯部新七新平も此時に亡命せり
新七兄弟父は磯部兵部大輔とて因州智頭郡用ヶ瀬の城
に居り南條伯耆守元續の小男なり兵部用ヶ瀬居城の
事は天正年中なり
藤堂の軍士中務少輔亡命を不知、翌日我先にと堀へ飛入
引柵を乗越へ大に戦ふ中秋の特に天王寺表後藤又兵衛
大膽く防之にけり此日の合戦に高虎か鉄卒は思はずし

大いに討たるとかや此時大阪童の狂歌に
うちら切れの伯耆さむらひふる理道南條あかし役にたゝばや
元忠亡命の後臣の宅間伯左衛門紀州高野山西光院谷中性
院に塔婆を供養し佛事をなして南條院殿意安元宅大居士
と法号を氏また南條累代並びに一族諸臣等法俗二名の菩
塊ハを左に誌す

華翁宗信居士　南條與兵衛　（華翁宗心居士　羽衣石南條記）
玉翁宗圭信士　塩冶若狭　（玉翁宗皓居士）
洞庵玄白信士　塩冶肥前
永平勝元信士　菖蒲豊後
一山源起信士　菖蒲彦四郎
香岸道春信士　十六嶋駿河
繁山秀紫信士　德吉新三郎　（繁山秀樂信士）

三翁道郎信士　津使八郎

心鏡常慶信士　津村備中　仝上　心證常慶信士
玉堂秀仁信士　相賀柵之助　仝上
月清淨心信士　大熊修理　仝上
心月宗慶信士　油良大藏　仝上　由良大内藏
梅岳仙翁信士　山田佐助　仝上
東海常春信士　進下総　仝上
國阿弥陀佛　菖蒲宗儀　仝上
心翁安宗信士　廣瀬隼人　仝
花山源壽信士　十六嶋越後　仝
月海常光信士　田原市之助　仝
久安宗昌信士　津村長門　仝上
高山秀桃信士　豊嶋土佐　仝上
大月中常心信士　大知童足院　仝上

心翁道郎信士　津良八郎　仝上　心翁道郎信士　津波八郎
天田叟祥心信士　山田畔之助　仝上
昌岸善久信士　小森彈正　仝上
芳心尊公信士　相賀彦七　仝上
高山宗心信士　相模井杜　佐伯彦五郎　仝上
常阿弥陀佛　岸田孫七　仝上　岸田孫助

以上二十三人

虎熊鷹野於小鴨之城喧嘩之事

永正九年虎熊今年十七歳然るに性質聰明叡智にして行跡
全く端正なり
此虎熊は宗勝か童名なり後に豊後守宗元と云ふ入道して宗
勝と云ふ蓋し虎熊は南條家代々の童名なりとかや
久米の山八橋の野牧小鷹居させ駈狩して遊興に乘り帰さに
小鴨修理之助家城岩倉へ訪ふに修理不斜喜ひ饗應か違川を

く酒宴既にたけなはに及ひ西士沈酔の餘り不意に口論に及ひ
虎熊若年なれとも口賢く條理は不辨にして而も短慮なれ
は口論已に利を得すときに抜打に切直に虎熊大の手にて
打払ひ抜合ひ戦ふとき南條供士並河治郎左衛門庸定烏羽織
之亟進の源五左衛門近く居けるか屏風唐紙押倒し真中へ
踊入り虎熊を囲み当なる幸ひに打払ふ中にも並河治郎左衛門
は其長六尺に餘り筋骨太く近遠無双の強勇なりされとも
城中大勢立重り遮れかたき處漸く切払ひ門外に出つ其時治
郎左衛門は虎熊を肩に引掛け羽衣石の城に帰る然るに南條豊
後守大に憤り頻りに合戦支度あり城中大に騒動せり小鴨
條理亮は酔覚めて大に後悔し大山の僧中を頼み和睦を請ひ
元より當座の口論酔狂よりの事なれはより終に事なく静
まりけるか此時虎熊左の指を切り落されし先輪とそなりける

小鴨か肩先へ大に切込まれ数ヶ所に疵を蒙りて後漸く平癒せしとかや
永正十一甲戌年越後守宗晧病痾ヲ以て終に卒す此時虎熊十八歳
にして家督相続し南條豊後守宗元と改号あり
陰徳太平記に此口論の事を或時豊後守と小鴨掃部亮と
岩倉の城に於て口論に及ひ掃部亮退城し即時南條城
之の刀取るとあり又虎熊左の指は落されし事を左の手
を打落されしと左はなくと述ふ邑民の語る處は今述る如
く左の指を切落して一つの指なしと傳へたり又陰徳太
平記に豊後守を紀伊守の親と言ひなり然るに豊後守の親は越
後守宗晧なり即ち系譜に審なり紀伊守の親の事は知らす
羽衣石山之事并に山号の事
此山の地理を考ふるに山は削れるか如く高くして鋭く谷は彫れるか如く
幽々として深し嶌は常に白雲を被り天間に聳へ麓は長

郷田の村に續き郊外廣浩たり前は巨家も渡り難き東郷の湖水漫々として洪濤巨浪趾を没す又此山一躰に木立繁にして只滑らかなる草山なり麓に羽衣石川曲流索廻して一箇の道を開かれば更に往復の便をたつ後には磽巖崖嶮として邃谷樵蘇も足痕を絶し狐兎纔に道を通るのみなり故に地の利甚堅固にして要また足る山なり又山の妙なる事を覗ふに山嶺平かにして雨も廣く清水北洞より湧出て大旱魃にも乾かず況や一滴百倍の渇を止む左に蛇渓不動か嶽喬木鬱々として枝をたれ右は長山多門の窟岨峭嵬々として苔を重ね後は權瑞熊野谷天狗の烏帽子岩を挟み陽烏朝に翼を拂ひ前には鎮守八幡の山洞に天地の影向石陰嵬石少に輪を飛す其好風の妙なる事寔に所謂名山なり
蛇渓不動の嶽長山多門の窟權瑞熊野谷羽衣石境内に

ある山谷の名なり此の谷數四十あり迄と云われたり
此山を羽衣石と云ふ事は蓋聞初めは崩岩の山なりしか然るを南條伯耆守貞宗當國を管領し此山に初めて城を築き時に崩巖は凶兆なれば故に君か代は天の羽衣稀に来てなづともつきぬ巖なるらんと云ふ古歌に依て堅固不易壽城萬齢成事を祝して羽衣石山と稱するとかや又或説に往古或野叟此山を過るに一人の美女傍にあり石上に衣を乾かし流に浴居る其谷野實に雲の鬢婥約として月の顔嬋娟たり眞に此世にあるべき人に見へず又石山の衣を窺ふに其妙なる事織女機中の物にやと覚えて其文順にして乱れす其色純にして雑らす野夫弥怪しみ是をこふに蘭香か張碩か家に降けるの類にて彼女は天地にして是は彼か着たる處の天上の羽衣と云ふ物なりと聞しに是を奪ひ隠せは天女は衣なき故に登る事

難く遂に野父と契りて二子を設くされども野父深く隱し
欽筐閑鎖を密にす然るに二子成長して父に代て世事を行
ふ時に天妃子を欺きて衣の謂れを說きて之を請ふ子供は
其事の起りを知らず閑鎖を開いて衣を天妃に與ふれば大
に嬉眼すとも疾く縹緲として杳冥に上りぬとなり天妃の
羽衣を石に乾かしける山なれば即ち山号となして尓か称すとか
や野父天妃に相見て山号と成れる事異說なり陰德太平記には
即ち南條太祖と云ふ西國太平記には尼子の太祖を述べ
たり此兩義を按ずるに天は一說なり南條尼子兩家の枝
葉なれば南條とも云ひ尼子とも云ふ同說謬也
又或人天女臨降の事を述るに其說多しといへども妖妄虛
談を離れず何れか正說なりといひけん就中處の民家に一說

あり昔時人皇九十五代後醍醐天皇元弘壬申の年北條相模
守高時入道が爲に隱岐國へ遷幸あり其後當國船上山に臨
幸あり程なく華洛へ還幸あり此時塩冶判官高貞之に忠勤
を抽んずるにより雲伯を高貞に下さる此兩國の太守となる
然るに伯州東湖の邊に天女下れる里人羽衣を奪ひ取るとて
此事を普く沙汰せり此旨を富田へ告ぐる者ありて高貞稀有に
思ひ其羽衣を一見せんと頓て邑里を訪ね是を得て見るに是
は天妃の衣にはあらで我朝の官女の着する五ッ重の衣と云ふも
のなり其人は何れの處にあるやと問ひ即時に尋ね来るに定の天
妃にあらずして隱岐國へ主上遷幸のとき供奉ましける早田
宮の御娘弘徽殿三位局と申す御方隱岐へ取殘されて御跡を
慕ひたまひうかれ出て漁舟に助け乘せられ東伯耆へ渡海あり
然るに國中兵亂の砌にて何處に寄るべき便りもなし或は海夫

の云ひけるは此奥山里長和田と云ふ處に知り人あるゆへ是を
頼んやといふに局同意なるによりて直に彼漁夫局を誘ひ長
和田に走り佐々木五郎太夫と云ふ田夫の方へ頼む依り
暫く佐々木か宅に滞居あり是を佐々木にて天女臨降にて行
あいし羽衣を得て天女をば留めおきけると其沙汰專らなり
室に稀有の事なれは天女臨降ありしといふも理なり其後
高貞は彼局を相供し都へ上る然るに主上叡慮浅からず御
感の餘りに彼局をは高貞妻に下し給はるとぞ也
當山城跡天主の臺櫓楼門馬出升形多門等の地形其外石壁
惣隍今に赫々として古趾を残す一躰山の堺地廣く淡朧曲
直鋭し奥深し菩提所景宗寺の跡長和田より程近くして
今星霜を經たる石塔五輪苔を重ねて數多く有り景宗寺は
り馬場本谷長屋址に充満寺と連綿たる淺階なり今彼邊は

は少しの人家を設け黎民居るなり　又景宗寺今馬場の間に
法師辻と云ふ處あり昔時戦場の跡なり
法師辻の事陰徳太記に長御田合戦を云ふ處に南條法師
辻まて出馬すと述べたり
上充満寺の嵩に一つの池あり号して燕池と称す其故は羽衣
石の城を初め此充満寺に築かんとて其意ありしに或時此
池の中に一つの燕落ちて死す此事を南條凶事に思ひ此處の
城を止め今の城山に築くなりと云ふ大なる石壁後に幽谷
の如き空隍今に残て見ゆ又往昔は寺あり堂塔悉く高閣な
りといふ開山知れす宗門は天台宗と云へり
彼池燕落つるの謂れを以て終に号して今に至て燕池と云傳へ
たり大さ方十歩に余る其水清くして九夏の天にも乾かずと
言へり当寺此羽衣石滅城のとき破却して其後は寺号のみ

にして再造なし

羽衣石との事

古城西の表八幡山の頂に高さ五丈有余の大盤石有り是を羽衣石といふ小なり所謂爾か称する事は此山絶頂に登りて瞻望するに遠近八方の風景寸眸に遮り自ら天上の心地して是常住の羽衣石天妃法衣掛石の譬へにして萬劫不滅の影向石所に準すといふとなして羽衣石とは称するならんか

伯耆民諺記巻之十五終

伯耆民諺記巻十六

伯耆民諺記巻之十六

目録

天狗烏帽子岩之説并越前普門山慈眼寺縁起之沙汰

鼻立地蔵の謂れ并退久寺梅天禅師死罪之事

羽衣石売職之假名之事

南條宗門之事

伯耆守室大力之事并月見和歌之事

藝州南條躍り之事

高野宮の城

山田出雲守重直反逆之事

高野宮夜討之事并信直之盛敗北して重直家城堤の城へ走る事

伯耆民諺記巻之十六

天狗烏帽子巖之説・越前國普門山縁起之決決

古城か南に当つて峻岨の巖壁あり數百双の屏風厚立たるか
如にして其岸丈ヶ五六丈にして分野烏帽子に等しく大岩
あり是を天狗の烏帽子岩と称すされは此岩の事を越前國
宅良谷の禅林普門山慈眼寺の縁起に述るなり越前の國宅
良谷の内聖徳二乙丑年天魔發向して万民を取り殺す故に
人跡断絶す然る處天真自性和尚大禅師之を愁れ越府龍泉
門裏に出宅良谷に進發して林内に一七日座禅す然るに天
魔之を難有しとや思いけん禅師の面前に叩頭し拝敬して曰、亦此
山に住事千歳なり當山一條の城主浅倉殺害を好むゆへ此山の林を
斬荒らして我か住所を穢す故衆人の往來を赦さず到る家輩
あれは悉く皆失ひ畢んぬ願くは希い奉る魔人を轉じ神道

に引導す師座を去りて袈裟を以て天魔の頭上に安置し三帰
七返唱へ暫く黙然として又何誰誥を授て而後も石上に
座す天魔曰其曽て仔細を知らず禅師曰法身清浄にして一
座を受す自性鏡を清めす畢て即ち袈裟の角を以
魔頭を打つ天魔之に於て魔相を変し禮拝して座す禅師
が曰く法に志學す无無一功本源自在天真自在佛魔則點
頭すて而座す禅師曰加護を頼むと言座より立て帰る天魔の
曰く大悲の禅師兹地に寺を建立し給へ禅師即諾天魔の願
に委せて帰る伯州羽衣石の城主南條伯耆守貞将大禅諸に
為るしよ其[illegible]大岩
さ貞宗は越前に於て成長の地天真禅師大に帰依有州より
天魔伯州羽衣石を飛行して岩屋に休み暫く城中光輝く
大坊主庭上に立つ伯耆守驚き問て曰何者なるぞ坊主答て曰

予は是越前宅良谷に住む大天狗なり守護朝倉悪を好む故に人
種をたつ天真之を愁へ予に法を授く依て魔心を変じ佛道に
趣き則ち宅良谷に七堂を建立せんと催す士は素と宅良谷に因縁
あり急き七堂を組み大舟となして越前肥田浦に送る天魔又一條
の城中に輝光して現はれて曰予は是宅良谷に住する大天狗なり汝悪
を好むゆへ子孫を取絶やさんと欲するに天真大禅師之を愁ひ予
に法を授く故に之を免るすなり降しと思はゞ寺造立の助力を
励めと云て去る
因て浅倉は急き人馬を多く比田浦へ出し材木を宅良谷へ持運
はしむ比田より宅良へは七里と云然も山坂多しと雖唯一
日に持運ぶ是則ち天狗の所為なり大工和泉守鍛冶岩見守、
伯州より来り子孫今に此門前に有りといへり是ル烏帽子巌と
て其時天狗の休める石の形又烏帽子の如くなるゆへ此天狗

烏帽子岩と号すとかや
此天真禪師は出羽の國守の息なり南條伯耆守貞宗普
門山慈眼寺ノ開檀なり故に靈牌今に建つ故に依て南條二男
天真禪師の法を受け普門山二世機堂長應禪師と称する
なり後チ伯州に隠して定光寺書源寺を建立して即ち両寺
の開山なり然るに依て南條家代々の石塔あり
普門山の縁起に年号文安三丙寅秋七月下旬慈眼寺七世
清容文禪師記之と有り今享保まて二百八十有余年に至る
機堂遷化は應永九年今星霜二百十余年に及ふ
普門山ノ建立ハ至徳二年也 其頃越前ノ守護は足利高経入道道朝
の息斯波武衛義將を大祖として子孫代々斯波武衛と号す
斯波は道朝か家名、武衛は兵部の唐名なり
至徳の頃は斯波繁昌の時なり又朝倉高景越前の守護と成ル

事は至徳年中より八十有余年を經て後文明三年の事なり
将軍尊氏の七代義政公の時代なり
然るを普門山縁起に至徳二年の守護朝倉と有るは不審な
る事なり
鼻立地藏の謂ル并退休寺梅天の事
南條中務少輔に領地境の論ありて検者として大山の衆徒を頼
むに當って不同心なるに依り八橋郡退休寺の梅天と云ふ禪師を検使と
して古来の諺又は見及を聞合せて大山權現御堂の前より退休寺
の門前を限りて傍示を分かち遂に東領の負となる然るに
中務大に怒り其の法師は我領分にありて他の人に組み非論
になす條大なる曲者なり急き厳科に行ふへしと云ひ捨て其
身は大坂へ参勤せるにより長臣森下駿河、進の遠江、山田佐助
海老名源助梅天禪師を呼寄せあらましを聞くや否死罪の旨を

云渡す時に海老名評して曰、是非未た決断にも及はす急の
死罪の沙汰、政道不正ざる処と世の誹謗もいかが今一応之を糺し
弥、非義に決定の上その沙汰に及ばれなといふに山田は短慮者に
て君命を捨て免角の猶豫すべきにあらすとて直に梅天を
脱衣面縛して牛の如く蕩を以て鼻に栓を指し高札を前に
立て背中に大罪人と大筆に誌して幟をたて東三郡を引廻し八
橋の放(コ)なる濵に於て刑処をさため西向にこそ引据れは梅
天暫く讀經観念の後眼を開き予に罪有らは血出づべし又無
謬は切とも突とも血なかるへしといふ聲諸共首は向へに落
ちにけり無體の罪に落す事を知て衆人みな感涙に及ぶ然
るに遺言の如くにして血は出すして水の如きもの流れ出てし
とかや夫より首は梟木にかけ往来に是を晒しけり此事大
坂に於て中務深く案し梅天の死刑暫く赦免遣すへきの趣を

羽衣石に飛脚到来すれとも早や死罪後の事なれはその甲斐
もなき事なり彼の梅天は退休寺の慶聚院七世梅天賢甫大
和尚とて篦津村慶要寺の開山なり山田佐助短慮の故に死
滅の時刻縮りて飛脚の甲斐もなし かゝる時節は過去生々
の業報にして権化聖者も遁るべからす死縁無量の理りな
り中務に至り斯る稀有の政道まいあれは然るゆへにや中
務息生れなからにして鼻塞がり療薬をなすといへとも更に
其効なくして遂には命を果す事両度に及ふ夫婦是れを愁
ふる事久し然るに或夜中務夢中に一人の僧来り語て曰、汝
君臣ともに短慮にして衆悪をなす況や大悟の僧を非道を
以て脱衣面縛して鼻に蕩をつなき命を絶つ然るれより生
子に鼻塞き愁絶えす是を止んと思はゞ三城東西(コ)に寄て延
命地蔵あり是を信せは鼻塞き平愈すべしと告けて夢覚めたり

とたり中務不思議に思ひ聴てかの地蔵に詣て非願を起し
方四間の堂を建立して十五石の領を寄附す所謂鼻立地蔵
とはこの故に依て号すとかや又延命地蔵とも云ふなり今十
満寺の脇の谷に小き草堂残りて地蔵あり即ち今の菩薩も昔
時の地蔵なりと云ふ此所を即ち鼻達と今に称す また此三谷よ
り三朝の庄へ越す山隴を鼻立越しと云ったり 中務地蔵を信
仰して後は誕生し子鼻塞の愁ひ止む 況や無難安休なりと云ふ亡
父伯耆守の時は廣瀬津村森下豊嶋塩治十六嶋等の股肱の
老職の面々況や文武を励まし政事を糺す然るにより天正
数度の合戦といへども恙無く治國平常なり今の元忠相續し
て斯く無道の臣あつて政事混雑し萬民の愁をなす事は全
く君臣の愚蒙にして亡城廢國の前兆なりと時の人唇を動
かすといへり 前文に詳なり

或人の曰く元忠の代と云へは一躰に君臣の奢大分にして非道に
財宝を費し黎民を虐け國家の政道くらく老職奉行頭人等
賄賂に耽り依怙贔屓の沙汰專らにして科の重き軽きを糺
さず故に諸民或は愁ひ或は恨み世人眉を開くに隙なし是
則愚將の罪を一人に受る處也 或時は罪なき持戒の僧をころ
し或時は神社の宝木を切り荒らして兵船を作る 此故にや
朝鮮陣の渡海も遅参に及いさしたる軍功もなし 夫より次
第に衰へ剰へ逆徒に組し日本の地に安堵の膝を容かべき處
もなく遂に慶長十九年に亡命して長く武名を穢し先祖の
武功を滅すとなり

羽衣石大老の面々假名　元續臣

廣瀬隼人　津村長州　塩冶肥前　豊嶋土佐

十六嶋越後　森下駿河

中務少輔元忠老職

森下駿河　進ノ遠江　山田佐助　海老名淀助

南條家紋の説

南條大祖天女の羽衣を奪ふ然るに天妃羽衣なくて天上する事かたく終に塵界の交となりて南條に深く契りし二子を設け然るに子供成長して家事を行ふに依り衣の謂れを説て是を請ふに子供その事趣をしらす遂に衣を得て夕兒の蔓にたまり再ひ天上す時に南條名残を惜んて夕兒を以て夫より家の紋に定む其紋形花葉を圖形の中に書きたるなり此説世に言ふといへとも濁世澆季に及ひ天妃降臨の沙汰不審なり況や南條当國に来る事は昔時貞時五年夫より三百十余年有に至る遥に昔といへともあらす先に彼の説妖妄虚誕を離れす或人の云へるは南條紋所の事確論に及び

花久留須と云つものなりと或人の云へるは南條紋所は即ち形は 蓋シ此紋所に決定せりと云へり夕兒の紋所の事陰徳太平記にも其沙汰を述べたり天妃再ひ天還の説又夕兒の沙汰打吹山を云つ延れ読す打吹は倉吉の城山の号なり

南條元續室の大力の沙汰并月見和歌之事

此人の力常ならす紙摺にて二室三重の障子を突通す事安く又盤石を動かす程の強力なり昔天正七年一度羽衣石敗北の時道にて盗賊しきりに追来るに此室長刀を以て立帰り多くの強盗を切捨て残黨を散々に追拂ひ静かに因州へ赴くとなり此室は因州知頭郡用之瀬の城主磯邉兵部の大輔の娘なり此兵部は遠近無双の強力なり況や大器の量あるとかや此室元續在京の留守或時つれつれのまゝ山の端に出る月を見て

言の葉も月によるへの思寐を枕に吉井よ峯の松風
元續旅宿の月を今更風景に思ひ兼ねたまひて塩冶肥前か
妻慊に在つて
戀しさを糸によるてふ言の葉の松にぞ積る山の端の月
長州吉川家に於て南條躍の事并或人岩國の沙汰を
述ぶ
長州吉川家に於て南條躍と言ふ事あり是は南條伯耆守元續
吉川駿河守元春と數度の合戰更に雌雄を決せずして終には
和睦をなす其後吉川謀略をなし猛兵を撰んて下には腹巻
をきせ上に風流の帷子を着し馬野山より羽衣石に躍をか
く數和談の後なれは伯耆守心をゆるし實の躍と心得諸民
も近年の合戰に氣を屈して居る處に件の躍さへすはや面白
き事こそあれとて老若となく群集をなし是を見物するに

影し然りに躍近寄り人頻りて城中に切入り終に勝利を得たりと
かや、躍の歌に
躍入は此方の庭を借り申す出場は明けて又参らふ
件の謂を以て吉川家にて其後盆躍をかの出立になして一
手武者躍を行興し吉例として每年七月十六日大躍あり是
を号して南條躍と云ふ此躍の計策により南條利を失ひ落
城の事全く吉川家の一説にして民諺には傳わりし吉川南條
を攻めんと相戰ふ事し天正七年の秋より十年の夏に及ひ數度
の合戦あり然りと雖躍の計策のことは古老の名話又は近き
戰書軍談の端にも未た見聞せす又或人の曰く彼の躍の事は
馬野山に於ての事なるべし天正七年七月上旬吉川大軍を
率し羽衣石の城を攻め馬野山に布陣し終に南條敗北して
同月下旬城を退き此時藝雲の諸勢等勝軍にほこり折しも

盆躍の砌なりんより若武者とも馬野山にて大躍をなせし
事是し勝軍を脱しての事なりんより吉川家に於て吉例とな
し代々其餘風を今に傳ふると云へり
或説に吉川家吉例となし彼躍を毎年盆中よりなせに菩提
寺にて興行すとなり昔時元春思惟するあり近年處々の攻城
野戦或は籠城飢渇に及ひ命を果たす或は戦場の箭刃に臨んて
命を終るものその数幾千万人といふを知らすり是皆将の受
る所の罪なり如何して是を避るやとて其追善のため七月
十五日菩提所に於て各院大施餓鬼を執行し十六日懺法修
行あり當日貴賤群集を許すにより各棚に臨んて焼香洒水
を報す此時靈供養のため菩提寺の庭にて吉例の南條躍を
修行あり下に腹巻をなし上に風流の帷子を着し其の切拍
子押太鼓を連ね掛聲相和のやつこ躍目覺しき面白き事なり

り此功徳に引れて餓鬼は飽満し修羅は苦患を忘れ頭を振
り手を鳴らし沱躍分野も斯くやと思ひ出るとなり然れは彼
躍は吉例の南條躍とはいへとも畢竟精靈の供養躍なりと
いふ説も有り
或時予防州岩國出の出家に寛談を爲すことあつて彼の躍の
事今に餘風あるやと聞くに出家の曰く今に此躍あつて南條躍と
称す出立は下に胸當をし上に風流の烏帽子を着し鉢巻を
して陣刀を帯し黒脚半に金の筋を入れ各團扇を持ち又大
團扇として六人なる團扇かざして音頭を上け躍入場押太鼓に
つれて歩行三輪に列し外側は赤團扇中は白、内は黒なり躍
歌は前に云ふ歌を今に唱ふ其外に歌数多し七月大寄とて
武者溜に集り躍をならす其後十五日より六ヶ寺の菩提所に
て興行す躍人若士役にして十五歳より三十歳の人まて之を

勢ひ然るに三十歳余の躍余り大躍にて菩提寺の山門惣壁
を押崩す其沙汰当主監物豪に叶はすして其後十五六漸七
つまりてをかきり躍をつとむといへり

吉川家領地防州岩國に於ける菩提寺

禅宗　洞泉寺、永興寺
真言宗　妙福寺　萬福院
浄土宗　實相寺
法華宗　清泰院
領知各六十石宛此外当家代族の位牌預り寺院五ヶ寺領知
各三十石以下なり

○高野宮の城　土海の御
山田出雲守重直変心高野宮夜討之事
栗尾[illegible]飛脚塚の謂れ

当城は羽衣石の城主南條伯耆守元續、伴城にして臣の山田
佐助か家城なり此山田佐助は南條普代の忠臣况や代々老
職を兼ねたり山田越中畔之助世之助各一族にして累代羽
衣石の舊臣なり又この一族に羽衣石與力久米郡提の城主
山田出雲守重直は天正七年の春南條毛利に變心の論談よ
り重直杉原とは舊友心知の族なるか故に南條か諸士なに
となく逆意疑心すとなりされとも出雲守は是蔵人を家城
に差置き其身は羽衣石の屋敷に在居す然るに一族の越中
か屋敷出雲守の家と軒を連て并へり彼の論談より人々疑
ひの心を廻らすゆへ族なりと雖越中畔之助を以て私
意を佐助へ密談するに聽て出雲守か屋敷の邊に忍びを置
く然るに五月十日の夜頻に降雨に混れ重直か門中より
ふかーき躰なる者出て栗尾坂へ走ると相告けれは越中

聞くと等しく臣の水野傳八に手早き若黨相添へて彼者を
附送り首尾により搦捕へしといひ遣はすに程なく栗尾村
にて木隠れ江行方見失ひ水野も黙然として暫く佇み然る
に或小屋に夜更け人聲するにより覗き見るところに彼者居
れは直に附入搦捕んとする處を彼者心得たりとて身構へす
るを早く捕伏する處に傳八若黨後より飛かゝり首を討つに水
野驚き此者が羽衣石へ捕行る者なるに首討つ事粗忽の至りと後
悔すれとも爲べき樣もなく然るに依て彼男所持の物あらん
と懐中を探るに一つの文箱あり封印のみにて上書はなし急
き水野羽衣石に帰り此旨城中に告れは山田潜かに登城し
て件の始終を語り彼の文箱を差出せは伯耆守直に封押き
り披見あるに高野宮の夜討の事鯨波の声を相圖にして城
陰より放火し裏切すへしと相認め何某と云ふあてもなき

ては出雲守変心にて杉の原井蔵人信直等夜討する事遠か
るまじとて此事出雲守へは深く隠して高野に潜に軍卒を
入置彼栗尾にて水野に討たれし飛脚のものを埋し處を飛脚
塚とて栗尾邑舊屋敷の邉に今にありと云ふなり扨て同しく
十一日の夜半杉原祢八郎元森山田蔵人信直を大将として三
百余騎を引率し知坂を越て高野宮山田佐助か城へ西坂よ
り攀登り諸處に放火し鯨の波を作るにそ佐助は兼て用意
せし事なれは鉄炮透間もなく打出し釣石切落々々大
に防戦すれは然るに依て敵方大半討たれ元盛信直散々追
崩され八橋をさして引退き残黨大に崩れて方角を失ひ爰
かしことさまよふ處を追詰々々散々に切伏せ追討す佐助
は須弥に鐘鼓を山上へ引取り繰引にして諸卒を城に入る
斯て又山田出雲守重直は高野宮の鯨波の聲とひとしく後

の山へ走り上り本城邊を瞻望するに屋敷々々の篝火夜廻
りの馬灯燈星月の如く要害は甚た堅固なる有様を覗ひて
さては陰謀顕れ手練大いに違ふたりと氣を呑れ心を屈す
又高野宮を見渡せは早や元盛信直敗北して大崩と相窺ふに
依り其儘羽衣石に居る事あやうく然るにすり夜に紛れて
羽衣石の屋敷をしのひ出て栗尾坂をこして家城堤の城へ
落ち又山田越中は高野宮の鯨波を聞くとひとしく手早く
鎧ひ同苗畔之助を伴ひ出雲守か屋敷へ駈入り重直を尋ね
れとも早落失せて居たりけれ今度佐助か軍術越中か忠勤
ある事を伯耆守大いに賞感せしとなり
此夜討の事ヲ邑民村老の傳説なす処は今述ふる如くにして
歳月も天正十一年五月十一日夜なりまた陰徳太平記に
述る處は天正七年の夏羽衣石より堤の城を攻め重直ハ又

子家城を退散し此意恨あるに依て尾高の城主杉原弥八
郎元盛を催し天正十年九月廿三日夜高野宮へ推談して
本城へ切入り勝軍して伯耆守の敗北し播州姫路へ走る
と述べたり
出雲守合體の残黨数十人爰所彼所にて搦捕られ長瀬濱に
於て一々首を刎ね梟木に掛け晒し又妻子をは囚となして
山田越中預るなり
出雲守後は浪客となりて毛利家に居せしかまた当國會見
郡柏尾の里に故あつて住す終に此所にて卒す今に廟は柏
屋にあり堤の城を言ふ處に重盛か本姓法俗称号一二に誌
すゆへに爰に略す

伯耆民諸記 巻十七

伯耆民談記巻之十六終

伯耆民談記　巻十七

伯耆民諺記　巻十六

伯耆民諺記巻之十六終

伯耆民諺記巻之十七

目録　　下西郷

田尻之城

因伯之諸将依変心吉川当国へ進発して諸城を攻落之事

阿與守松之崎の城

小鹿谷山上越進下総か陣へ入夜討之事　小森和泉守方

高滅亡之事

川口之城

城主山名刑部大輔変心より杉原播磨守頓て鋒楯となる事

白石之城

吉川駿河守馬野山布陣之時吉川孝七移当城へ

岩倉山の城

伯耆民諺記巻之十七

○田尻の城　下西郷

○因伯の諸将依変心ニ吉川伯州へ進発し諸城を攻めんと欲する事

當城には南條伯耆守元続舎弟南條備前守元信の息兵庫頭元周居す法名心月宗圓大居士と称す今に田尻の村南の方に城跡あり今た字を城の中といふ小畠あり此城落城の年は天正七年羽柴筑前守秀吉播州姫路に在城して武威日々に盛なるゆへ隣國の輩秀吉に心を通するに依り伯州の名将藝州を捨て播州に属す然るに依り尾高の城主杉原盛重より雲藝に急を告へありしより驗て吉川駿河守元春惣大将として息右馬頭元長二男左近元氏三男毛利民部大輔元經吉川式部少輔又同苗七郎元景吉岡越後守難波采女其外頭人諸郷の将校

軍士都合一万三千余騎天正七年七月上旬雲州富田を出陣
して尾州尾高杉原か一族を催促し元春は河村郡橋津馬野
山に着陣し元長は久米郡國坂村の茶磨山に陣あり然るに
此二陣の間に田尻村兵庫頭か岩城あり近邑の民頻りに騒
動して東西へ走り南北に馳るに依り元春進て田尻一
之進櫓に登り四方を眺むに馬野山茶磨山の両陣の諸勢夥しく
旌旗数百流山風に飜翻して湖風に吹流されたる風情立
西山の梢の紅葉夕邊の時雨に色を添へ吉野か峰の櫻花朝
霧の光を映し霞に漏るに異ならす稲麻竹葦の諸卒の甲
冑夕陽に映したるは明残る星月の如し斯て吉川勢伯耆の
かく手合に先つ此小城を一戦にして後羽衣石を攻むへしとて鯨
元春茶磨山を立て廿一日の卯の上刻に田尻へ押寄せ追取
巻き鯨波を上けれは城中にも鯨波を合せ既に矢合して合戦に及

ふに寄手は猛勢城中は小勢にて城方大半討れ又は深矢に斬
く四五十騎となる依て田尻一之進城に放火す折しも秋風烈
しく炎気空に遊乱し餘烟四方に充満したるに紛れ
て兵庫頭は羽衣石の城に逃入る一之進は其後一方を切破
つて足も羽衣石に走る然るに日西山に入りぬれは吉川勢も
本陣茶磨山に帰陣す

○松之崎之城

○小鹿谷上山越合戦之事

小森和泉守方高滅亡之事

當城には南條伯耆國元續與力小森和泉守方高居す天正八
年伯耆守籠城により方高も同しく籠城すと云へ共山田出
雲守重直と舊友別懇なりしか重直逆意高野宮の夜討以来
何となく南條を初め其外羽衣石の諸将各心を遣ひ然るに

彭原弥八郎か諫めに依り方斎は馬野山吉川の陣へ降る或
る時東郷小鹿谷上山試進の下総か陣處へ夜討に入るへき事
を弥八郎へ密計をなし既に日を定め置くに松か崎の城中
に進の下総に入魂の旧友あり此者件の密計を下総に告く
るに依り直に此旨本城羽衣石の城へ鼓方に依て下総か陣
所へ加勢の大人数を指置き大筒を相図に定め待處に天正
八㊆年九月廿日の夜馬野山の七の勢二百余騎小森方斎を大
将として四十曲を越へて進の下総か陣へ押寄せけるに小屋の有
とも能く沈酔して夜廻りの燈も幽かに陣所一体静かに人音
も絶へたる倚野を見て小森思ひ計の如く此處彼に狂迯長山
の陣海老名源助小森輝正一條宅門等か小屋を放火して附
入に本城羽衣石に切入へしと備に思ひ掛けたり
として士卒更に此義に同せす兎角猶豫する内に下総か陣中より

大筒打出す其響夜中といひ山岳にこたへ天も崩るゝ如くに
聞ゆるなり敵方大に驚き覚えす鯨波の聲をつくる城方に
は兼て用意なしたくみし事なれハより長山の陣よりも直に下り駈
付け野花坂を堅め居る相賀柵之助か陣よりも走せ帰り其
外谷々隴々の砦の諸卒一時に相集め前方左右を遮り下総
か勢は後を包み四方より追立て大に挑戦せしに依り敵方大
半は討たれ夜中と云ひ周章する事甚しく或は落馬同士討
をなし或は方向を失ひ谿谷にまろひて大に崩る和泉守は
氣を揉み下知をなせとも士卒堪へ兼ね悉く別所谷へ落退
くを追詰め散々に討ちし百余級の首を取り和泉守方高も
別所谷へ落行きけるか別所は方高領地にて名主か宅へ駈
入る處を下総か軍卒追来り終に討止め首は下総より羽衣石
へ送りて伯耆守の實見に入るなり別所の民とも和泉守か屍

を厚く葬り東郷別所村の林の中に今に塚あり家人の末残
て今に至り二季彼岸盆年回正当忌に墓を掃除し恭く三拝
香花をなすといふ和泉守滅して後松か崎の城へは進の下
総羽衣石代官として移り東郷を守護す天正の末東郷に山
公事あり即ち守護進の下総之を許すと記置ける裁許状有
り

伯州口の城　久津賀の庄
山名刑部大輔久氏變心之事
後亀山の事

戸麻利川口の城には山名の一族山名刑部大輔久氏累代家
城として居せしに大永の大崩れに尼子經久のため亡城廃
蹟して漂泊の浪輩となりし
山名の本家衰へて後南條か與力となり当城に居す城名

志氏に称して川口刑部大輔久氏と号するとかや
大永の後西三郡をは吉田筑前守兄弟尾高八橋の両城に居
て伯西の守護となり東三郡は尼子紀伊守國久羽衣石城主
に移り伯東を領知す此時戸麻利の城へは紀伊守二男式部
少輔信久居城す然るに天文九年の秋九月近郷の軍士を催促
して大軍を卒し毛利家追討のため藝州吉田へ進發あり伯の
諸将各藝州へ走り尾高の城も吉田のみ國に残る此虚に乗
し大永の崩れの伯耆浪輩の諸将武田山城を大将と為し其
勢七千余騎にて当國に切入り泊り城を攻め式部少輔も藝
州へおもむき臣の駕岳藏福原弥吉漸く百余騎にて在城せし
に猛勢の強敵を引受け遂に戦ひ負けて両臣討死す然るに
より残黨散々に敗北す時に敵方凱歌を上け本の城主なれはより
河口刑部に城を渡す氏久頓て家城に移り夫より面々とし

て刑部は当城に居るとかや
天正七年より吉川元春当國に発向往復あり橋津の馬野山に在陣あ
り威勢甚盛にして南條伯耆守元続は籠城の身となり其外因伯
の諸将各々吉川の下知を守る然るに川口刑部は尾高の城主行松入道
か聟なりしを入道卒して後相続杉原播磨守盛重を舅となし
一族となるされとも盛重か無道なるに依り兼て心を解かす
然りといへとも盛重下知として面は馬野山の陣に相加はる
といへとも内心は盛重を疎み志をは南條に二心を通して摂州
羽柴に合躰す茲に於て平日の事杉原へは疎々しく打過くる
に依り或時室女、刑部に語て曰親郷へ音信不通疎遠なる事
を深く恨むかたにあり久氏も杉原父子か不仁なる事を聴て遂へ
今近郷大乱の最中某か身の上にても明日も知れす此砌は親
里へも送り預け置く乱崩事治りなは迎入るへしと言ふに室は涙を

催し縋る言葉もなくてありける斯て三四日を経て潜かに八
橋の城へそ送れとかや然るに依り盛重はすく疑心生し二男
又次郎盛景を近づけ此度久氏室を送る心は我老体没んや
病苦をうけ身体自由ならされは本懐も達しかたし汝いそ
ぎ馬野山元春の御陣へ行き兼々刑部反逆の密謀、又は今度妹
を送れの心、悉く相訴ふへしといへは頓て盛景馬野山に走り
件の趣を述ぶるに元春聞給ひ暫し黙然として盛景の慮る
處甚遠慮あり然りといへとも今暫く彼か行事をはかり其後
討手を差遣はさんとて押て評議にも至らすして事相止む
其後播磨守病悩重り横山掃部を初め亦二郎少輔五郎其外
一族長臣等八橋大江の城へ相集り病氣保養のみにして他事
なきかゆへ刑部大輔か評談も暫く相止みにけり
横山掃部は杉の原播磨守盛重長男なり實は行松入道の

息なり初は杉の原弥八郎と称す尾高の城主なりし又二郎
も少輔五郎又刑部太輔か室女も爲行松か子にて同苗の
兄弟也

後亀山之事

当邑の後ろにある山をいふなり今切通しの道あり此所甲亀
の頭にして其形を望むにいかにも亀頭の如く此の頭あり
しときは当村盛にして繁華せしか此所切通しの道となり
しより以来邑も次第に衰へ漸今漁を以て業となすとなり

白石之城

天正七年南條伯耆守元続一度敗北すといへとも程なく一
族を集めて再ひ家城羽衣石へ帰入して處々の山隴へ砦を
設け要害を堅固になし精く籠城を守る此時吉川駿河守元
春は馬野山の陣をなすゝく堅固し計策を練り攻城野戦

の事のみを慮り近村に砦城を設け茶磨山へは毛利氏部大
輔元經を据置き當白石には吉川彦七郎元景居城し東表を
守護すとかや其後京藝和睦相整ひ彦七郎も藝州へ帰國し
て後南條の伴城となりしなり

久米郡古城の事

岩倉山の城　小鴨の庄岩倉村の山に在り　當城は小鴨氏族累代
の家城なり小鴨の姓は村上源氏また小鴨氏なりと傳ふ昔
より當國の士にて中祖小鴨左衛門尉元康此處に家城を構
へ壽永元暦の頃は一國棟梁の士たりしか子孫興廢すれと
も連綿として國守の幕下に屬し末葉小鴨入道は元弘の乱
に名和伯耆守長年か催促に從ひ御林の軍に加はり本領さ
失ひぬ其子新三郎元近は明徳二年本主山名播磨守満幸か
反逆に合躰し摂州内野に於て戰死せり其嫡小二郎良俊其

孫掃部之助良章に至るまて世々當城に蟠居して山名氏の
旗本たりしか大永の崩れに掃部之助も尼子に家城を奪ひ取
られ累代の領知を離し暫く浪廃の身となりけるに尼子氏
亡滅の後、毛利元就の太刀影を以て當國の諸侍大永に廃散
の輩、大半本領に安堵せし間、掃部之助も再ひ當城に帰
り入て専ら毛利家に属仕せり然るに掃部之助男子なきゆ
へ同國羽衣石の城主南條豊後守宗元入道宗勝の二男左衛
門尉元清を養子として家系を襲かしむ元清も毛利家に志
を傾け弓矢の家風を落さす然るに永禄十二年八月上旬尼
子枝葉左衛門尉勝久諸浪人を催し集めて雲州に起り六千
余騎にて當國の城々を攻め取り岩倉の城を昼夜に三日の
間息をもつかす攻動かす折ふし元清は毛利軍役に從て下
の関勝山に參陣せしか此事を聞て毛利家の暇を賜はり南

條宗勝、山田出雲守等諸将と一同に當國へ走せ帰りし只早
や岩倉居城落去して敵の勢入替りて有りけるを一朝の間に
攻落し城を取返して敵兵廿五人討取諸味方にて握屋藤兵衛
林甚九郎安藤甚左衛門、谷川文之丞、其外仲間八人討死しける
然るに舎兄南條勘兵衛元續毛利家に反逆を企て上方に所通
せし故元清も是に同心し岩倉に籠城す毛利の先鋒吉川駿河
守元春天正七年七月當國へ押入り東三郡を乱崩して羽衣石の城
を攻落し岩倉の附城として今倉村に砦を設け平壽院西堂利安
小鴨四郎次郎鈴川次郎左衛門等を差置きけるに岩倉の城中より
毎日足軽をかけ小迫合しける利安鈴川等素より武功の者なし
なれは毎度打出て岩倉の人数を追立るを見て元清も自身馳
来て會戦することを度々なり吉川勢の手立に元清を引出し
伏勢を以て討取へしとて明る正月廿二日今田中務少輔併

志源次郎等四百余人大宮に伏勢を作り傍なる山の上に森
脇市正を置き敵伏勢の山に来らは相圖の螺を吹かせ其聲に
應し所々より起り合せて敵を取巻き立お果さんと軍議なす其
中に栗屋源藏同弟諸枝與三太郎と云ふものあり何れも父の
源藏にも劣らぬ血氣者共にて未た二十前後の若武者なる
か富家に人こそ多きに彼の出雲浪人の森脇に相圖の螺を吹
かせ合戰懸引の下知さする事の奇怪さよと怒て伏の中に
は居ず大宮大明神へ詣て獅子狗子なとを取出し戯事して
居たりける斯て四郎二郎正壽院等足輕を出し敵を呼引け
れは岩倉の城中より二百余人切て出て足輕共を追立々々
伏勢の眞中に馳来る森脇市正時分はよきぞと思ひ相圖の
螺を吹けれとも鳴らさりけりこは不思議なり今日の軍の凶
事とて立替々々六七人代りて吹けとも更に鳴らさりけるこそ見

怪しけれ伏兵共は相圖の螺や鳴るかと待ちけれとも其聲
のせされは如何にや探しみなから敵を思ふ圖へ引受け何の
時をか期すへきそと思ひ々々に起き立て我先にと突て蒐る
敵小勢なれは一支へも支へす敗北しけるか勝に乘して追
懸け岩倉の麓まて追詰めたり左衛門尉元清今日は何やらん
足輕攻入り心許無しとて物見に出にけるか敵に伏勢あつて
味方折須たりと告来る元清されはこそとて究竟の兵五百
計り弓鉄炮を前に立て真黒になつて助け来る所へ伏勢共と丁
と行逢ひたり元清得たり賢こしと弓鉄炮を射ちかけ々々しける
に追来る勢は弓鉄炮一挺も無けれは的となつて打立てら
れ大に敗北し栗屋源藏蹈止て射殺す其弟朝與三太郎は安
部助太郎か手より鉈炮にて打止め栗屋新左衛門も戦死せ
り岩倉方にも村井三郎四郎久田十太郎米田源八討死す斯

くて日も西山へ傾きけれは城方も長追せす引て岩倉へ返
引取ける
今倉砦の事を陰徳太平記には嶋田と迹ふ然れとも嶋田
に砦の跡なし右老の傳ふる處は今倉の邑なり砦の跡今
に残れり按するに今倉島田は連邑なり天正の頃は両村
の別ちなく一村にして嶋田の村ならん歟又安部助太郎
を陰徳太平記には安部太郎右衛門と記し迹ふ又陰徳に
此合戦の事を記するに毛利方に細田源之丞と云ふ十文字
遣ひの鎗の手利き有り此者備後鳥羽何某を城方の強士今田中務少
輔に討たれて口惜しく思ひ如何して今田を一鎗突かは
やと志し林の中を傳ひ岩の陰に忍んで覗ふ所に今田は
矢取て番ひ突き補て居たりけるをあの箭放たは走掛て
一突にせんと待ちうけるか射放つや否や飛んてかゝる来

素より今田は矢繼早の精兵なれは其儘矢取て打番ひ能
引て向ひけるか余り急に立寄りけるゆへ細田か鎗と矢先
と其間漸く五六寸程に迫りけれは若し射外したらば細田
に突るゝと思ひ引嘯なから放ちも不得細田も前突んと
すれば大弓の今田矢を放たんとする故に鎗と矢の先衝
合て暫く覗ひ合てありけるか今田満持にかね押て放つ矢
細田か背の骨と皮とを掛て射切ったり細田も敵の矢放つ
と見るや否や踏込て突きけれは今田か弓手の大指つあた
り弦を突切て首の傍に突込けるか聊さしもの今田も目眩て
動く事不叶細田も深手なれは両方の味方走り来て二人
を各肩にかけて引退きしとなり彼今田は強兵大矢の手
利其頃遠近に名を顕はす武勇の者なりしと云へり
天正十年五月吉川治部少輔元長多勢を引具し東三郎丸乱

入し先岩倉の城を可攻取とて近村隣郷を焼拂ひ同廿五日
岩倉の城中に押詰たり味方もとりしの要害を守り堅固
にふせき戦ひしか寄手は大勢城中は小勢なれは本庵く見
えしか長臣黒松将監國時永原玄蕃惟定二人塵まねき取城
戸を開て突て出る城兵我もくとかけ出しか中にも尾崎三
郎二郎船原孫三郎北村甚九郎岡又次郎細田彦四郎日野甚
五郎杉森善右衛門石川又三郎戸倉彦五郎高柴弥五郎成相
嘉助安倍助太郎等十二人の者ともは兼てより死を究め
たる勇士なれは直前に進んて勇烈を顕すに依り寄手浮足に成つ
て一町許り崩しける吉川元長兼てより名を得たる猛将なれは
すこしも不騒旗本を押し立来り馬印を振つて攻戦ふ成相嘉
助吉映は多知見平次と戦ひしか両士ともに聞ける強兵なる
る間暫く勝負互角なりしに成相何とかしたりけん多知見

か鎗を鐺横に胸板を突き通され扶んとする處を鎗を取手突
放せは真倒に倒れけり多知見首をとらんと立寄るところ
を石川又三郎頼道横合より懸合多知見か脇腹を突通す多
知見ひるます立向ふ處を安倍安太郎定宗走寄て多知見を
鎗玉にあけたり城兵必死になつて防けとも寄手は鬼をも
あさむく吉川勢なれは手負死人を乗越々々様立ける十二
人の勇士も追々に討死し其外大半討れ或は落失せて城中に
引籠る寄手附入にせんと競懸る黒松将監永原玄蕃搦裏を
走りめくり鉄炮を雨あられのことく打出す寄手の吉川元
長射手の輩に下知をなし火箭を頻りに射させしか西の手
より打込火箭城の角櫓に燃付たるに大山風烈しく吹て餘
煙處々に吹附一時に燃上りけれは城中騒動更に為方なく
落城に及ひける城主左衛門尉元清も既に自害に及ぶ所を

は長臣等固く押止め黒松将監永原主税嫡子玄蕃其外のもの
とも相従ひ此の時討死しけるに出て山越して羽衣石の城へ落行
ける忠士十二人の内杉森善左衛門家昌は深手負て進退不
叶本丸の舘の内にて切腹す日原甚九郎清熈驚て是も又錯
し其身もともに切腹す永原玄蕃は城に残り表門の舘に登
り散々に射る元来殊に兵手利矢つき早に射下しける放寄
手少しも向ふ見へたりし永原か兵寄手の立花掃部か士卒持
楯に射立たるに矢文有り開て見れは一首の歌を書附たり

一筋にたもひきぬ箭のあつさ弓
また引かへすこともなけれは　源元清

と読したり各是を見て扨ては左衛門尉切腹し焼にけり去程
に城中一圓に煙氣充満しけれは永原は落残りたる者のともとさ
みなし羽衣石へ遣しその身たちはとりし櫓の上にて腹を

き切つて失にけり行歳六十有余とかや斯て城中櫓殿舎こ
とことく灰燼となれり五百余年の名城此時に滅亡
す
羽衣石の城よりも後詰として南條伯耆守元周三百余人を率
し羽衣石表まて馳着けるか早や岩倉城は落城して元清は
山傳ひに羽衣石の城へ退きたりと聞て直に羽衣石へ引帰す吉
川元長は凱歌を唱え城の近村に屯を張り若し羽衣石より取掛
事もあるへしとて用心厳しく陣をとる城の焼跡を実験す
るに元清か死骸分明ならす杉森善右衛門本丸にたいて切
腹せしかは是そ元清ならんとて首を三宝に乗せ日野甚九
郎か屍を黒松か死骸なるへしとて二つの焼首を元長の實
験に入れけるに然るに元清は恙無く羽衣石へ落行けるよし後
日に聞へけれは扨ては彼の一首の歌は永原の謀計なりしやと皆

たゝ人甚ゝ忠死を感じ哀を催しけりかくて元長は比竟に羽衣
石の南條をせめ亡ぼし当國を平均すへしと思惟せしか羽
衣石は堅固の城地にて味方にも手負死人数多あれは兎角
猶豫する所に六月上旬備中表より飛脚到来して毛利家の
上方和睦相とゝのひたる間東三郡を南條へ渡し帰陣すへし
とて吉川駿河守元春の許より告来るゆへ元長頓て陣拂して
西三郡の仕置を中村丹後に付け雲州へ引入ける
右十二人の士今度の合戦互に盟約を起請し其意を誌るし
し別名をそへて小鴨大宮大明神の宝前へ奉け今に神物と
して社内にあり天正十年壬午年五月五日と書たり委しく
は神社の考にしるす又当城に遠藤小太郎同小次郎とて
兄弟の士あり此合戦に討死す此時小太郎男子七歳になり
けるを家僕抱て城を出て勝田管か村に執居す姓を改

に残すといへり遠藤か兄弟の墓所も城近邊にあり岩石の平かな
るを建て巡りに石竹を植えしにや今に毎年花の頃は盛
をなす今伊藤何某といふもの八橋郡に執居して在り近
頃まで倉吉に住居しけるか小鴨家人の子孫にて二季の
彼岸盆祥には必す岩倉の城跡へ到来し香花臨水をなせ
しか雖然漸く二百余年に近き事なるゆへ何某か傳も不一
二只村老の茫話邑言を抱て携ふのみなり
左衛門尉元清は羽衣石の城に浪客となりて在りけるか舎兄
伯耆守元續天正十六年の冬より中風を煩ひ上方の参勤諸
事の公務悉く元清代りとして勤仕せり同十九年伯耆守卒去
し嫡子中務大輔元忠其頃虎然として幼少なるか元清後見と
なり公務國政等を執行ひ朝鮮陣のときも千五百の人数を
引具し渡海しける元忠成長の後は倉吉打吹山の麓なる小

山に舘舎を構へ居住まして代官の如くに近郷を守護し居りれ
ける彼山を今に元清山と称するなり居住のあいだは文禄
の頃より慶長五年まて漸く七八年の間の事也然るに中務
大輔元忠慶長五年の秋石田治部少輔三成に與黨し羽衣石
滅城に及ふに依て元清も倉吉に住居難叶再ひ漂泊浪牢の身
となり夫婦に七歳の息家来一両人まてにて倉吉を忍ひ出
て梅翁山曹源寺は先祖の係縁なるに依り暫く此寺に滞留し
ける

当時は南條大祖伯耆國貞宗の二男機堂長應禅師の開基
なり長應は越前の國にて成長し宅良谷の慈眼寺天與の法
脈を継き慈眼二世の住職となり後當國に来り曹源寺を
開基せり

然るに内室病悩ありて醫薬効験なく終に此寺にて亡命す

墓所は寺より下なる山の麓に今に石塔ありと云へり明る
慶長六年春元清は一子亀若丸をともなひ当寺を出て播州に
上方へ志し作州大町村に旅宿す亭主夫婦大に勞はり其風情
不浅に依て或時夫婦の中の元清に氏名を尋ねけるゆへ我
は伯州岩倉の城主たりし小鴨左衛門尉元清なりと始終を
包ます語りけれは夫婦共も涙をなかし頭を下け手を束ねて恭
しく禮拝し其は元は伯州の生れにて然も御領分の百姓な
りしか永禄の乱に居村を退散して今此里に住して漸く夫
婦の餘命を繋くまれなり幸ひに御宿を仕る有難さよとて
種々馳走しけるか殿様の御在所安堵あらんまては若君を
は我々夫婦預り養育可仕旨懇に申けれは元清大ひに悦ひ
亀若丸を預置き其身は大町を出て同國式奈村に止宿しける
然るに此宿の亭主つくつくと思惟しけれは此人の容貌言葉等

尋常の人にあらず必す伯州崩れの貴人なるべし然れは帯す
るところの腰物さぞ代高なる道具ならん又金銀の貯へもあ
るべしと悪心を起し潜かに隣家を催し近郷に居る強
盗山賊等をまねき夜更け人鎮って後右衛門尉主従の寝所に
しのび入り熟睡を窺ひ先づ主従の腰物を取り元清主従目を
覚まし起上らんとする處を盗賊とも左右前後より一度にきり
付け遂に此所にて空しく亡命せしたりし事ともな
り其怨念残りしにや件の山賊屋亭隣家のものとも程なく悉
く泯滅して子孫跡形もなく絶え果てたりしかや元清横死
の後大に祟り人馬の病悩奇怪なる事共多かりければ村
老共是を恐怖し彼霊を新八幡と號し大森村に社を建て
尊敬しけるか夫より病悩の愁もなく殊に霊験あらたにて今に祭禮をなす也とかや

伯耆民諺記巻之十七終

伯耆民諺記巻十八

伯耆民諺記巻之十八

目録

作州大町村小鴨平蔵素性并安綱刀之事
岩倉山男之事
市場城
北城
今倉の城
圓造石川の事
唯蒔の城
華幾山の城
亀山の城
茶磨山の城
茶磨山男并美累呵濱之事

五月崩の事并美甘郷下[illegible]寶之事
堤の城
山田八幡の事
倉光の城
建部の城
圓通石川の事
今倉の城
北城
市場城
岩倉山落之事
作州大町村小鴨平蔵素性并安綱刀之事
目録
伯耆民諺記巻之十八

伯耆民諺記巻之十八

○作州大町村小鴨平蔵素性并安綱刀之事

大町村の百姓か預り養育せし建若丸成長の後小鴨何某と名乗ある黎民となる此者或夜の夢に年齢五十有余の男来り我は汝か父也急き津山の城下に来ル一物を可授と云と見て夢覚めぬ小鴨思惟して夢は五臓を痛ましむるより来る處なり我常に先祖の事を思ふ故に是事をも見つるなるへしとてお捨ておきけるか翌夜また件の夢を見る小鴨不思議をなから急き津山の城下へ罷越ししはらく酒店に休み居りけるに傍を見るに古き拵への刀一腰拵道具と見へてあり何心なく取つて中心を見るに安綱と銘し指裏のかたに伯州岩倉の城主小鴨左衛門尉元清と彫刻せり偏にこれこそ夢の告ゆかりなりと大に悦ひ買求めて家の宝とせり世々譲り傳へ今

の小鴨平藏に至て是を所持し弐原村に於て名ある富民なり件の刀は小鴨氏累代の重宝にて左衛門尉弐原村にて亡命のとき強盗等の手に渡りしとなり然るに年月遥かに移りて新八幡の瑞夢に依て其子の手に入りたる事寔に妙なる神の徳也

或人の旧記に安綱作と称する小鴨の宝刀は無銘なりき然し裏の方に左衛門尉か假名を彫刻せしめたりと記したり

○岩倉山字之事

此城を岩倉山と云ふ事は天孫降臨萬劫不滅之天磐座の義を用ひて岩倉山と称すとおぼゆ山の要害を見るに一躰なめらかなる盤山にて喬木盛んにて盤峯り嶮は城郭にして峨々たる峻山嶮丈夫の切岸あり南は嶮難なかなる小笹原にて往復の

便を絶ち西は一里の藪續きにして隍を構へ境地広濶たり本丸には井数あつて九夏の天にも乾く事なく飲水の愁もなくして事足れる山なり昔時の武士屋敷寺院町家等の地迹今に其處々の小田畑の字に称すとかや

○市場之城

当城は岩倉領にして小鴨の臣岡田某か居城なり天正十年五月岩倉の城主吉川元春の為に亡滅せし時当城も同しく滅却す岡田は死地を遁れ浪流の身となり所々を徘徊せしか後には盗賊となりて遂に因州に於て死罪に行はれたり

又当村を市場と称する事は昔時岩倉繁昌のとき毎年春秋の大市と云ふ事ありて自他の国民牛馬を牽て此處に群集す市を立て売買す其頃近国の諸士も多く来て乗馬を求めしとなり此の事より以て市場村と称すとかや又此の並びの村

に大宮大明神とて九社あり岩倉の城ノ鎮守の神なりしが昔は神威
盛隆の大社なり小鴨大明神とも號す彼ノ大市の事営於饗祀
のまへ七日より是を始め当国を限りて華然たる至る大市
なりしとかや

○北城　灘郷岡田邑に有り

当城ハ岩倉の伴城なり城主は不分明也邑村の傳へには南條中
務大輔元忠居住せりといへとも中書此城に居住の事不審
なり地城にして惣廻りに大なる乾堀あり誇に一紅堀と云
ふ也北城は本城岩倉の北に当れる故に北城と号す

○今倉の城　八代郷今倉村にあり

陰徳太平記に述ぶる嶋田の城の事なり嶋田と今倉ハ連綿たる
村にて然も両村の境にある城なれは嶋田之城と述しも理なり
なり吉川元春天正七年に岩倉の向城と称して築き亞壽院小

鴨四郎次郎鋳川次郎右衛門を置きたり天正十年京藝和睦
の後は当城羽衣石の領となりて南條の與力の士須藤丹波
居住す丹波は猛悪の士にて当國の國造石川何某の聊の口論
に依て焼打に討滅し其外羽衣石の命令に背く事度々あり
て文禄年中南條か為に滅亡す夫より間もなく慶長五年羽
衣石滅却のとき当城も廃亡せり

○國造石川の事

当國の國造石川家は上古の昔より当郡不入岡村に居住し
累代連綿として相續せり大祖を大米逕尼石川國造と云ふ舊
事本紀に曰波々木之國造志賀乃高穴穂の朝の御世笄邪志
の國造の同祖兄多毛比之命の児大米逕尼定賜と云々續日
本記に石川の傳あり昔は数十町を管領し大厦高閣に居住
せしか世々の轉変に依て次第に衰微し其頃はまことに祠

宮邑民の始りにてありしか同郡今倉の城主須藤丹波か爲に
焼討せられて永く石川の姓を絶つ其より後は當國に國造
なし上古より連綿と傳はりたる名胤一旦に亡滅せし事實に
可惜事なり彼乱亡のとき石川に一人の女子あり小御女と云
て十歳ばかりなりしを家来後藤平太夫と云ふもの抱て遁れ
出て上神の庄に走り鶴丸太夫か宅に忍んて彼子を養育し
後に鶴丸か子に嫁入して孫を生み是を山城と云へり夫より今
五代に及て鶴丸對馬と云て不入岡村に居住せり家来後藤
は大坂陣の頃よりして處を去り遂に行方をは不知とかや
然れとも彼か末と傳へて後藤何某と云て不入岡村の民家
にあり家を田中跡と云に二反余にも見ゆ國造滅亡のとき神器の
什物の焼物を埋めし所とて小き森あり其他今に礎を残せり此
森の西北に續ける畑を國造田と傳へて西田北田と称す東

南に大川あり此流に國造垢離の瀬あり又石川瀬とも號すなり
墳墓は今若宮に祝ひ小社を設けて大なる松一本あり又居
敷跡より惣社への道を國造道と傳來す穢ある人は通す往
来を禁するなり

○唯落の城　立縫郷勤士村にあり

國府伯耆守親俊か居城なり大永四年尼子經久雲州より當
國へ切て入る幕の如く巻て國中の城々を攻め取る當城へは
未た手遣せさりしに伯耆守大に周章し敵の多勢寄来ると
心得小勢にて籠城すへきにあらすとて俄に城を明けて退散
すられたり敵も不殺して落城しけるを彼郷民等は是を嘲哢して
唯落の城とそなへしか今に尓か称するなり本名は高城と書
し也

○草残山の城　南郷泰久寺村にあり

當城には三浦景元居住す天正のころ南條伯耆守か爲に城
亡し畢んぬ当村ハ續たる大島居と云ふ村に藤井治兵衛と号す
る百姓あり彼か先祖(長)景元籠城のとき粮米を續く志不浅に
依り景元より太刀一腰を遣はす其刀今ハ治兵衛所持すなかせ
落城のせつ籠城の女童足弱のともから彼の藤井か宅に暫
く滞居して其の後方々へ退散すとなり近村に今西と云ふ
山里あり此里に城跡二ヶ所有り景元要害の砦なりと称す

○亀山の城　矢倉郷金屋村にあり

當城には外木久右衛門在住す亀山は元は山王権現の社地な
りしを無双の要害なりとて社を外に移し城を築て居住せ
り然るに無幾程尼子の為に落城せしめて跡を絶ちければ全
く社地を穢せし神罰ならんとて人民沙汰す其後神の教あ
りて城跡をきよめ元の如く山王の社を建て今ハ権現の宮

殿あり城を築くとき社を移せし處を取越しといふ社を別
所に取越せし地なりされ依て尓称し来るとかや亀山を今ハ後
亀山と云ふ是は作州往来の径道を作るとき亀山の頭を平す
によりて亀頭減して後残なと云ふ意にて後亀山と改称すると
なり近村に湯関と云處あり爰に八幡の小社あり山名小三
郎を祝する社なりと号す當所に温泉あり並に忍ぐ芋あり
委しくは郡郷の部に誌す

○茶臼の城　北條郷國坂村にあり

増田玄蕃之助在澤左京亮か居城なり各ゝ中納言行平卿の後胤
なりと云へり永正年中南條豊後守宗元か為に落城し城郭
悉く煙焼すとかや天正八年吉川元春羽衣石の城攻め田後の
合戦のとき息元長此山に在陣あり砦のあと今に残る

○茶磨山并美留可濱之幸

此山は遠き神代の沙汰なりて因州鷲峰山の嶺なりといふ小
説あり又或説には此山生することは川村郡にある東郷の
湖初めて辟き一日同時に此地も生し出たりと傳ふ遥に近
江の大湖をひらき一とき駿河の富士か生したるに全く均し
き沙汰なりとかや茶磨山と号する事は彼地未た辟さる前只
平山の無木所にて一圓に茶林なり此茶園中に潤澤し他國
まて溢るゆへに茶磨山と云ふとかや其ゆへに今に東郷
の松崎茶とて尊らに用ゆるなり又此山の地の濱辺を美留
河濱と称す其故は当國五月崩れのとき近郷の民等宝財を
かくさん爲に此所に持運んて砂中にうつめたく其風情人
に見るかことく互に囁きあへり其言遂に字となりみるかの濱
と称すとかや又美累河の古湊と云事は天文十三甲辰の
秋連日風雨烈しく後には山崩れ土砂流れ洪水となり久米、

郡河村郡の満水一合して此郷にあふれて今の古川村水道
となつて此濱に流れ出て自然の大湊となる其後年月へ暫く湊
となりて有りけるとなり然るに依て今に古湊と云ふ也此時水國
中一圓に充満して水死の人民幾千と云ふ事をしらす當國
いまた聞かさる洪水なりとて古老傳へて今に天文の水と称
するなり此郷に大塚と云ふ村あり彼洪水のとき近郷の水死
のものを集め一ッ穴に埋めて大なる塚を設けたるゆへ大塚
村と号すとなり又八橋郡にも大塚村と云ふあり是も彼時の地
跡なるゆへ尓か称するなり古川村と云ふも其時の水道なりし
處故こ今に古川村と称すとかや

○五月崩れの事

大永二年雲州の尼子伊豫守經久富田月山の城へ切入り再ひ
本國へ帰入安堵して武威日々に隆盛す同四年の夏数萬の

人数を率して當國へ打入り山名の領内米子淀江天満尾高不動岳の城々を一朝にせめ崩し破竹の勢を以て東伯耆く乱入し倉吉岩倉堤羽衣石等の諸城悉く攻滅す山名をはじめ南條小鴨福頼山田行松以下その外数十代当國に傳はりたる名家の輩みなく亡滅廃國浪泊の身となりて國は一圓に尼子領と成れ此時の攻城野戦に國中の人民戦死する事幾千万の数をしらず死人街に充満し骸は累ねて塚林の墓のごとし血漲て濛虚のながれにひとし郷村縣里の放火餘煙蒼天をくらまし神社佛閣その外の兵火を免れす國民は老弱をいはず財宝をすてゝ泣咽て逃げ走る其甚き事言語に絶へたり山賊強盗のともがらは此虚に乗して社閣を穿ち代々珍重器を奪ひ民家を破て財宝を盗取り國中の乱崩前代未聞の事なり時は五月下旬の事なるゆへ今に至

て老民の諺に五月崩れと云ふは此動乱の事なり

○堤城　北條郷嶋村にあり

當城は山田出雲守重直累代の家城なり山田は紀姓にて當國無二の旧家大祖長田山城入道頼圓は朱雀帝の御宇承平のころより當國に居住して世々連綿とし此當城にあり古代は長田と氏せしか中頃に至り山田を以て称号とす其故は當所今は嶋村と称すれとも本名山田にて昔時は山田村と号しけるに依り山田氏を改め粗流には長田を以て称せしむ夫より年月遥にうつりて後宇多帝の治世弘安の頃に山田左衛門尉秀員入道真観と云て此處の領主たり真観より二百年近くに及て山田石見守高直と号し世々國主山名家の籏本に属仕す然るに高直大永四年の五月崩に雲州尼子經久の爲に家城を退散し浪客となりて親族旧知の恥となる

らに徘徊し遂に病死す其子出雲守（重直は）毛利家の旗将吉川元春
の太刀影をもつて永禄七年再ひ当国へ帰入安堵して其後
羽衣石の南條元續の與力となり堤の城ハは息の藏人信直
を置き其身は羽衣石に参住せり天正七年南條元續は毛利
家に逆意をさしはさみ上方へ一味せんとする事を重直頻りに諫
論せしか夫より不和になりて重直素より八橋の城主杉原
播磨守盛重と親しけれは潜に内通し盛重か嫡子弥八郎元
盛を引出し嫡子藏人を案内者として同五月十一日の夜同
姓佐助か居城高野宮を夜討にせしか却て寄手敗北し重直
は其夜羽衣石の屋敷を逃出て堤の居城に逃帰り父子一所
に楯籠る（此夜討の事委しくは高野宮の古城を云處に記）定て近々羽衣石の大軍寄
来るとて八橋尾高の両城へ後詰を乞へとも杉原父子如何
おもひけん一人の加勢も不来漸く城中百余人の勢にて處

々の要害を堅め楯籠る案の如く同月十四日南條勘兵衛元
續は酒余人の勢を率し堤か城へ押寄せたり先陣は油良大
藏一條市之助後陣は十六嶋大和大熊猛右衛は津浪八郎菖
蒲豊前海老名條助美田入道なり城を取巻きしく鯨波を
上げてせめかゝる城方も散々に鉄炮打出し出雲守自身鎗を
取て真先にすゝみ黒部佐々部細田中長谷川土居山下等の剛
の者共関門突出々々火花をちらし防戦しけれとも寄手は
大勢なれは荒手を入替攻近つく元来城中小勢にて要害も
またならぬ平城後詰の頼はなし迚も運をひらく事叶ひか
たし死は安く命は重し一旦退散して後日の本意を期し給
へと老臣山田入道大谷玄蕃等頻りに諫めけるゆへ出雲守
父子も同心して然らは一方をきり破り可落行とて折ふし
五月雨盆をうつすかことくふりけれは是を幸ひ暗夜に

まぎれ北門より一度に突て出、ちりちりに落散ける重直信直父子それに恙なく伯耆の西尾高の城へ逃入ける南條は凱歌を唱へ残黨悉く追けり山名城には一條市之助油良大蔵に三百余人を指副へ入橋の押として入置き其身は羽衣石へ帰陣しけり此度敵味方の諸士互に多年の親友知縁類の族混雑しける故ともに義名を耻て戦ければ依り討死の輩多く手負は数を不知ぞかし斯て慶長五年の一乱に南條家滅亡せしかば其後山名城も同時に退城し今に至て空しく舊跡を残せければ出雲守重直は伯耆西に蟄居しけるが遂に文禄元年三月廿四日會見郡柏尾にて病死し彼邑に墓所あり法名長勁院殿前雲州傑翁宗英大居士と号す子孫今に防州岩国の吉川家に仕へ當時山田平作右衛門識直と称す其事は重直が後胤也

一 山田八幡の事

當城の傍ら北尾村に八幡の社あり是は山田氏の大祖先山田山城入道崇平年中石清水の八幡を此所に勧請し當城鎮守の神とすと云、又今此社地を八幡と号すれども本名は山田なり八幡宮鎮守の地なるに依り八幡と称し奉れり社前の村は嶋と云、是を今八幡の嶋と云、是も昔は山田の嶋と云しなり社号も山田八幡と号すなり上古より連綿たる名社なれども数度の兵火に焼滅せしにや神宝什物の類もなし社内に梵鐘あり出雲守重直の中祖左衛門尉秀員入道が鋳たる鐘にて今に至て三百余年誠に殊勝なる古鐘なり銘文を写すに當城應護鎮守の社なり確論に曰、

大日本山陰道伯州久米郡北條郷山田八幡宮推鐘此鐘者平士舎兄左金吾紀秀員法名真観在生之時以所畜量

之用途所奉鑄也仍大願主者紀秀貞直觀
銘文の中薔量の二字、字性不正見ゆ此外棟札一枚あり元和
二年此國の流人里見安房守忠義修造の棟札なり是も漸く
百十年昔の者なれハより文字も不分明の處多し城跡は社より
辰己に當り今に惣隍の形残りて見ゆ表門は東向なり一
躰小城にて木立もなき城地なり城内に鎮守と稱す一つの小
社あり八王寺大明神と号すなり

○倉吉城 灘郷倉吉にあり
山号を打吹山と称す当城は伯耆十國の鎮府にして山名累
代の居城なり大祖山名伊豆守時氏元弘建武の乱に尊氏将
軍に屬し莫大の軍功ありて因幡伯耆但馬丹後備後五ヶ國
の守護職となりぬ嫡子左衛門佐師義當國に居住し始て此城

を築き家城となす時氏の二男修理大夫義理は紀伊の國を
領し三男陸奥守氏清は丹波の國を領す四男中務大輔氏冬
は因幡の國を領し五男伊豫國時義は但馬の國を領して一
家の英氣肩をならぶるものなし師義の嫡子讃岐守義幸父
の跡を續て當城に在住せしか病身に依て其身を引き弟播
磨守満幸に讓り日野郡に蟄居す満幸素より武略に長し南
朝に於て軍忠他に殊なりしかは大將軍義満公の御感不斜
丹波出雲隱岐三州を加賜せられ都合四ヶ國を管領し大盛
に至りしか奢侈のあまり逆心を企て伯父陸奥守氏清に一
味して明德二年十二月相共に京都におしよせける内野に
於て敗軍し一族郎等散々になりて満幸は當國に下り岩龍城
せんとて因幡國まて逃来りしかとも當國に入事も不叶青
屋庄にて剃髪し處々に浪牢せしか誅戮せらる此時當國は

但州伊豫守時義の二男右馬頭氏之に賜り元の如く倉吉に在城して一國を管領せり夫より子孫連綿として當國の屋形と称し六郡の地侍主君と仰き尊敬しけるか應仁より已来乱國となつて郡郷の諸士屋形の下知に不随威勢日を追て衰微し氏之より七代の孫山名入道に至ては僅の郡郷を領し有れとも無きか如くになつて漸く當城に蟠居しけるか大永四年の五月崩に尼子經久の爲に亡城廢國し累代の名家此時に断滅す入道は浪客となつて親族の方へ依食しけり其子小三郎氏豊も處々に浪牢しけるか藝州の毛利家に便り永禄の末當國へ帰入せしか本城に還住する余勢もなく倉吉の邊りに纔なる館舎を經營し羽衣石南條元續の旗本の如くなつて有りけれとも邑民は猶も屋形と称し馳走しける然るに南條元續毛利家に背き上方へ内通しけるに依り

天正八年の秋吉川元春當國に入り羽衣石の城を可攻滅として其身は橋津馬野山に陣を寸へ息治部少輔元長は國坂の茶磨山に陣をとつて東三郡の在陣を放火す南條元續居なから城を開かれては不叶とて同八月十二日氏豊并に小鴨元清を引具し日下の山端へ出張し明る十三日日下の川を氏豊先鋒となつて六百余人馬野山に向て戰ひけるか吉川の猛勢に突立られ一戦に敗北して中軍の南條か備へ崩れかかり惣敗軍と成て南條小鴨は漸く居城へ引入りたり氏豊は敵の中に取巻かれ百余人に討なされ隙を覘ひ切抜けんとすれとも前は敵後は湊川此程の霖雨に小鴨竹田の水重増り湊川に一合して漲り落る事矢よりも早し敵は三方より喚叫んてかゝりけるゆへ今は詮方なし山名勢湊川へ飛入渡りけるか半町計り引落され漸々として東の洲崎へ乞

り登れは吉川勢透間もなく川の上下より押渡て中に取巻
爰にて山名勢福岡山本多田石原太田竹内佐野河村首藤竹
中穂田福塚等普代相傳のもの共も返合々々防戦ふ間に氏
豊やう／＼死地を遁れ宇野坂を走り落行ふ處を敵なほ慕
ひしかは平野主計福塚孫之助首藤彌左衛門踏止て防戦し
敵方は三刀谷冬兵衛前澤庄助宍戸判左衛門等を採合ける
か平井は三刀谷に討れ前澤は福塚に討れ首藤宍戸は相討
に深手を負ひ前後に倒れけり氏豊は小林源蔵と主従二騎
託て落行けるか馬を乗殺て宇野の坂より右に付宿内山へ迯
れ入福間太郎は馬の太腹を射させ歩行立にて落けるか氏
豊か乗放れぬ馬を見て偖は君は山に懸り落給ふなるへし
とてやかて其馬に乗り跡をさして落行けるに三郎氏豊は宿
内山を出て直に東に走り給ひぬるか吉川彦七か白石の砦往来を

さし塞き濵辺は敵の人数充満する坂尾辰の薮を傳ひに北
方山の九折の嶮岨を凌き因州勝部谷の田原村に出けるか
此處に源蔵か舊知の平助といふ百姓あり彼屋の源蔵裏へ
廻り茗荷薮の傍に氏豊を忍はせ其身は軒に立添て家内の
様子を覗ひけるに平助か聲にて妻女に向ひ今朝橋津表の
合戦に羽衣石倉吉の殿原達おまけ給ふよし風聞あり若し
落人のあなましき事にもあらす飯食の貯ありやと物語を
聞て偖は変心なしと安堵し扉を叩き子細を呼き頼けれは
平助夫婦甲斐／＼しく一同に請し入れ念ころに労りける
誠に轍鮒の涸泥窮鳥の入懐心地にて一日一夜休息し明れ
は平助も百歩計りも見送り道筋悪しくさし教ふ然るに八
兼寺村と言小村に長田肥前とて強盗有り此事を聞附て能
き仕事なりと首切て吉川元春へ持参せは過分の褒美も可預

ものをと一族三十四人跡を慕ふて追懸けしか鳴瀧村の山中にて落附き
落人迯さしと切てかゝる縁蔵取て返し真先に進んたる長男智幹を一太
刀に切り倒す氏豊も立ならひ主従して八九人も切り伏せけれとも大勢に切り立
られて終に二人とも此所にて討れけりさしも一国の管領たる
名家の嫡流も強盗の為めに殺害せらるゝ事は哀れなりし事ともなり
其後氏豊の霊魂祟りをなすに依り新八幡に祝す今鳴瀧の
新八幡は山名小三郎氏豊の亡霊也

伯耆民諺記巻之十八終

伯耆民諺記　巻十九

伯耆民諺記　巻十九

伯耆民諺記巻之十八終

抄ノ

伯耆民諺記巻之十九

目録

倉吉の城再興之事
山号并夕免井之事
田内之城
小土産山城
里見屋敷
八橋郡古城之部
八橋の城
当城地利之事　但し二番目有り

伯耆民諺記巻之十九

倉吉城再興之事

倉吉の城は打吹山なり昔時は一國の鎮府なるゆへに金殿
玉楼軒をならべ城下の社閣市町の繁栄四民都會の地なり
しかるに大永の山崩れ一片の赤土となり神社佛閣等にいたるまで
悉く亡却す其後山名氏豊しばらく此處に居住せしかとも
僅なる殿舎を城下に修造し昔の威勢に似るへくもなし天正八
年氏豊討死の後吉川駿河守元春當城を再興し漸く紫築
て二宮杢允中尾大炊之助羽根兵庫頭北谷刑部少輔に人数
を副へて入置岩倉の小鴨元清か押へとす然るに其節關天中
三日南條元續小鴨元清兄弟牒合せ三百余人を率ひて倉下
谷越しに當城へおしよせ攻戦ふ南條か近習の士中村何某
河本弥五郎山崎吉之助討死し其外兩方の手負死人数多あ

乃ち南條小鴨人数を引取ける此時堤の城主山田出雲守は
水越の城より羽衣石の城へ通路あるを聞て十八日の夜
伏兵を以て田中彦四郎と云忍びの者を搦取てける此外羽
衣石岩倉より当城へ取懸合戦の度々なりしに吉川の主将
勇烈にして城を堅固にもち詰たり同十年夏毛利家と上方
和睦に依て当国を二つにして西三郡は吉川の領とし東三
郡を南條の領地と定め此時当城ハ居置西伯耆の押とせし
か慶長五年南條吉川滅亡の後一國悉く中村伯耆守忠一の
所領となる此時当城には番を入置しが同九年八橋の中村伊
豆守此城に移り一万三千石を知行しける同十四年中村家
断絶の後当所暫く御領と称ね山田五郎兵衛御代官として
東都より来り住す其後天下一統し台命に依て当城も石垣
を崩し堀を埋めて廃城となれり　元和三年光政公当國御

備の時重臣伊木長門守所を知行し古城の麓に居住し寛永
九年御当家御入國の後は荒尾志摩守嵩就此所を賜り子孫代
々今に相傳へり

當城地理之事

当城は打吹山の中央にあつて城の正眞北にして天守は艮
の隅にあり南北四間東西六間高さ一間の臺有り本丸の地
跡南北十七間東西三十七間あり裏門の跡南にあり矢倉多
門の跡精しく石壘所々に残る本丸に井水三つあり又本丸
より西の方へ五十間下りて一つの井あり西北に百間下り
て二つあり
二の丸を備前丸と号す本丸を去る事西へ二十間也境地南
北十四間に東西十九間此丸を備前丸と号する事は南條伯
耆守元續領主たりし時叔父備前守元信始に八橋の城主な

りしか当城に居住せり其後河村郡田尻の城へ移れとなり暫
く備前守居る丸なる故遂に郭の号となれり三の丸を越中
丸と云ふ備前丸より西へ二十三間半下る本丸よりは四十三
間下なり東北は三十間に南北十三間ありこれを越中丸と
云事は南條備前守田尻へ移て後伯耆の重臣山田越中守
丸に居り羽衣石の目代として近郷を守護す依て此丸を字
南條越中丸と称すと如此又当町に越中町と云ふあり是も山
田か領地の所と傳るなり
本丸より北に当て十二間下り小鴨丸と云ふ郭あり南北十三
間東西二十五間表門の跡は北に見ゆ此丸の下二間にして
四方に大走りあり是丸は小鴨左衛門尉元清家城岩倉廃城
の後羽衣石に走り遊客となりて居せしか後此地に住して
南條伊賀大輔か後見となり國政を沙汰す依て小鴨丸と称

し東北り
本丸より北に七十間麓に東西三十一間南北二十三間の舎
跡あり南條屋敷と号す是は南條備前守二ノ丸に居住のとき
設る所の屋敷跡なり
当山の高さ北は八十一間南は三十三間下りて外山の麓へ
つゞく東は七十間西は八十三間麓をめぐり二十二町天守
より指渡し四百八間去て城山あり此山丸墓の所四十二あ
りと云伝へ此城の名を四十二丸と称するなり城主は一
の瀬何某と云者居りしと云ふ然共其沙汰未詳井吹山の出城
なりと云へり城山より東竹田川へ二十七町西は小鴨川へ六
町あり昔時は此間悉く士屋敷市町なりしといへり
山号并夕見井之事
当山を井吹山と称する事は蓋し古へ羽衣石山へ天女降臨

去て田夫に羽衣を奪ひ取られ遂に民家に契を行して子を
設く天妃後に子を欺き羽衣を得て当山の麓神坂と云ふ處の井
水の辺より再ひ天上すとかや子供大に之を悲み跡を慕ふと
すれとも羽翼なけれは詮方なく天女は素より伎楽を好め
は鬼楽の飾りに此山に登り祭菓を供し鐘鼓笛簫の鳴楽を
列し音楽を起して之を招きしとかや斯る事起により鼓吹をな
せし山なるか故に遂に山号となし打吹山と称するなり神坂
と云ふは今の倉吉の東の地なり彼井は加茂大明神の坂下にある清
洗井なり此を夕見井と称し垣結廻して白綿を懸る天妃
天上の時此井に夕見ありしと其営に便りて天上せしと云
傳ふれ今此井を夕見の井と称するなり
○田内の城 灘郷田内村にあり
当城には山名伊豆守時氏五ヶ國の太守として居城ありし

民謡記ニ ザツトヤマ と読む

去嫡子左衛門佐師義の世に当城を築し倉吉打吹山の城に
移る城跡は当村の南御石山の上なり今の国府川筋向並木
の往還は昔の城下にして人家繁栄の地なりと伝傳されし
は左も有りしか今の田畑より屋作の柱とも出る事不絶
し井杯此處所々に埋りあり又此の辺り鍛冶屋敷と代々有り
し鍛冶の職具土中より出る事多し今の村は山中の侍町寺
院等ありしと云傳ふ寺号残て田の字にあり又當村の下に
列したる小田村の上の山に山名塚と云ふあり時氏の廟と
称し未だ六七十年以前まては此廟前の往来に馬上を下
下許押て乗打すれは必す山幸ありしとかや
○小土産山城 北條郷小田村の山なり
今は略して里山と称す言元の易きにしたかひ文字も斯く
改めしにや今小土産山と呼れは邑民も知れる人稀なり 小土

産山と号する事如何なる仮にや称することを未聞此山の南の隴を木崩の隴と云当城には天正の昔時尾高の城主杉原播磨守盛重の二男又次郎景盛か悪逆ある故により吉川元長より香川兵部太輔栗屋彦右衛門を代官として人数を指向ケ景盛を追罰あり然れは元長の軍廬に羽衣石の南條公入尾高へ加勢する事有んと又は景盛味方の人数寄来ると聞なりは居城を捨て羽衣石へ走り南條を頼むへきかとかく此山に砦城築く沙汰せしむるならは景盛に迫断させ羽衣石の便を断れ候以て利あるへしとて下知に従ひ香川栗屋此山に来て人夫を催促し城普請を営む此時此隴の喬木を悉く伐て麓の川へ崩したり此事を古老伝へて字になし木崩の隴と称すると也り今も洪水の後は此川より松柏檜椎の株木水底より出るとかや

小土産山の城普請は天正十年の初夏の頃なるへし景盛攻は岩倉亡城の前なり岩倉の城却は其年五月なり或は道旧記に出雲勢高尾の城主杉原景盛を攻て人馬の労を息て後岩倉の城を取巻と述たり陰徳太平記にも小土産山の城普請に人夫を催促する事を載せたり又景盛攻の事は尾高の城の処に誌す

里見屋敷　南郷堀村にあり

里見安房守忠義配所の地なり安房守は新田の貴族として累代安房国を領せしか大久保相模守忠隣か親類に依て御勘気を蒙り領国を被召上慶長十九年九月九日当国に謫せられ倉吉神坂に居住す今の岡嶋屋敷より小谷屋敷辺まてを宅として食領千俵を領すとかや其頃当所の領主なくして御領なり元和三年光政公因伯の太守と成らせ給ひ重臣伊

木長門入倉若を領するにより安房守は退いて近邑の下田中
の里に居す其後堀村に移り居住して元和八年六月十九日
此地に於て逝去あり倉若の大嶽院は兼て帰依ありし寺な
るゆへ是を葬る石塔今に鄭々たり此廟に並て安房守伯父
の墓あり前に大木の松あり前は伯父の墓此木の根にあり
けるか此塔度々崩れしにより何様不審なる事に沙汰せしを
当時明道和尚伯父の石塔を地を替て安房守墓と並へ少
し後へ退けて建つ夫より後は崩れぬ事と止みぬ或人の云へ
るは安房守存生の中伯父と不和なりし斯る故にて墓も崩
れけるとて共に葬せしか又傍に小き石塔七つあり各安房守と昵
近の士殉死の墓なりと云伝ふ又安房守重臣に真木大膳と
云ふ士房州より相副来る無双の大力也又其頃入倉若の所に
矢田何某と云ふ者大膳に劣らぬ強力にて度々其強弱を争ひ

しける享保六年安房守百年忌に当り其子孫房州より山田平
八と云ふ者廻国の躰にやつし大嶽院に尋来り寺門に施主安房
守昵近の士の後胤なりとて廟前に参り香花酒水して落涙
す其夜は寺に旅宿し往事を語りしか安房守讃国の事大膳か
愚意より起りける様に申せしと往労の話述也

○八橋郡古城之部

○八橋城　菊里之郷にあり

大江の城と号す行松左兵衛尉正盛入道累代の家城なり然
るに大永の五月崩れ尼子経久の為に滅亡し正盛は浪客の
身となれり当城尼子領と成って吉田肥後守か舎弟吉田左京
亮居住し西三郡を守護す然るに左京亮播州太子堂に於て
備中成輪城主三村修理亮家親と合戦して討死せり其子源
四郎はいまた幼少にて孤となりしか家臣共軍事を輔佐

小営城にありける
然る所永禄七年の夏より三村家親毛利元就の命を蒙り伯
耆の押となつて會見郡法性寺の城に居す源四郎か家臣福
山をはしめ各其寄主人の怨敵を目の前にさしおき此儘に
あるへきにあらすと法性寺へ押寄一朝に可打果と軍議一決し
ける三村家親此事を聞て驚て藝州へ注進せしかは毛利家
より香川左衛門尉光景を加勢として法性寺の城へ着陣し
九月三日家親光景一手に成り二千余人の勢を率し八橋の
城へ押寄せたり城中には吉田の落臣福山谷士熊谷平松等を
始二百余人楯籠大手は三村勢攻寄せしか案より家親勇猛の
將なれは真先に城戸口へ押詰散々に攻立る城方も三村と
見るより我先にと突て出て身命を不惜戦ひたり香川は搦手
より攻むるか眉先を射られ少し猶豫する處に長子五郎次

景二男兵部太輔春継士卒をすゝめ外郭を乗破る城兵今は
不叶とて福山平松谷士熊谷等究竟の者とも八十余騎源四
郎を真中にとり包て大手に一文字に起て出寄手の中をお
破り西の方へ落て行家親ぬかれて討留め射取れやかのともと
も不知すみとも難なく落延て尼子の本城雲州富田へ[illegible]けり
り三村香川は城をのりとり勝凱を行ひ暫く此城に滞留す
源四郎か家人ともに此事口惜く思ひ尼子義久に訴へ秋
山牛尾木田等五百余の勢をかりて当城へ夜討しけれと
も三村香川用心無油断追拂けれは富田の城へ引退る斯て
光景は藝州に帰り当城には家親より三村五郎兵衛海邊左
近村松宗兵衛等五百余人を入置ける其後当城尾高の城主
杉原播磨守盛重か領となり盛重尾高の城に嫡子弥三郎元盛
に譲り其身は当城にありて羽衣石の南條を押へしか天正九

年臘天下旬此城に於て病死せり二男又次郎景盛繼いて在
城せしか悪逆無道なりしにより同十一年初夏の頃吉川元長に
攻滅さる此時毛利家と上方の弓矢和睦になり當城も東三
郡は附て南條元續の持となり伯父備後守元信をさし置
元信倉吉へうつりし後山田越中正壽院此城を相守る又吉
田源四郎は尼子滅亡の後毛利家に隨仕し肥前守とあらため
杉原播磨守の婿となり又次郎景盛亡て後尾高の城主と
なり西三郡を守護せしとなり慶長五年南條滅却之後中村
伯耆國忠一當國一圓に拝領ありて當城には叔父彦右衛門
一榮三万石にて居住す一榮は其前駿河沼津の城主たり同
九年三月一榮此所にて病死す其子伊豆守當所を繼して倉
吉へ移る同十四年中村忠一早世に依て家系斷絶闕國となる
同十五年市橋下總守長勝當城を拝領ありて濃州今

尾より移住せらる領知は二万三千石なりしとかや元和三
年新太郎光政公因伯一圓に管領ありて當所には池田河内
長明をさしおき給ふ寛永九年御當家の御領となりて津田
將監元匡に此所を賜はり子孫今に至て領主たり

年臘月下旬に城に於て病死せり二男又次郎景盛續いて在城せしが悪逆無道なりしにより同十一年初夏の頃吉川元長に攻滅さる此時毛利家と上方の弓矢和睦に成り右城も東三郡の内なれば南條元續の持となりて伯父備後守元信をさし置元信倉吉へうつりし後山田越中守重直此城を相守る又吉田源四郎は尼子家亡の後毛利家に随付し肥前守と改め[illegible]播磨守の[illegible]又次郎景盛亡て後尾高の城主となり西三郎を奇獲せしとなり[illegible]長五年南條滅却之後中村伯耆国忠一当国一圓に拝領あつて[illegible]城に[illegible]右衛門[illegible]
翌年元和元年[illegible]
[illegible]
[illegible]

伯耆民談記巻之十九終

伯耆民談記 巻二十

伯耆民諺記巻之二十

目録

八橋城地跡之事
化粧川鏡井之事
條山城
由良城
妙見山城
秋里新左衛門戦労書述之事
槙城
念佛清水并若狭茶屋之事
岩井垣城
細木原城

伯耆民談記巻之二十

○当城地理之事（八橋城續キ）

城の本名を大江の城と號し山を岩山と称す大手は東向なり本丸の高さ麓より二十六間境地南北三十二間東西二十三間廻り八十七間あり南の隅に井あり深五間今は水なし

二の丸本丸の東に續き低き事三間東西二十七間南北二十一間東に向て門の跡あり何れも石畳處々に残る

二の丸より五間許り下に郭あり東西五十八間南北二十間南に堀あり長さ九十六間廣さ三間深さ二間水なし北に堀あり長さ三十間廣さ四間深さ一間余水有り

東北に川堀あり長さ五十間廣さ八間深さ一間半

城山の東に去る事九十間許りにして大日山あり高き城山に

築し同しく西北の方に諏訪あり相去ること二百三十間余
り高さ城山より四五間は高り此間深田有りて城山より海濱
に百十間あり人屋此間に列す東西の馬寄よし

化粧川鏡の井之事

口碑の傳に当所の西の出崎と云ふ村の西の端に小さき川あり是
を化粧川と云ふ鏡の井は往復の街より百歩余り南にあり
昔時都紫野の一休禅師泉州へ下向の時此處を通り給ふに
一人の美女此川の流れに洗濯して傍の石に上り膚を乾し
有りけるを一休御覧し珍らしやと宣へは彼愧しと答へて其
儘水に入て再ひ影も見へす一休此處を過きて百歩あまり行して
水の井あり此井水に望んで百年にも及へる老女化粧して座
しける一休前回の入水の美女か一躰の化生なるへしと思ひ
立寄り熟視し仰せけれとも老女答へもなく黙然として居

けれは一休珠枝を以て背をおし給ふ然れとも猶も不動にして
座す一休頓て一首の歌を詠し給ふ

珍らしや百とせたりし老の身に井戸に影さる水藻

時に老女

老の身のよりくる年も知らずして影はづかしき化粧川
かな

と返歌して後ち形ちもなく消失せぬ一休は傍の石上に暫く座
禅して居給ふ處に川上より尺に足らぬ小蛇出来て一休の
膝にはひ上るされとも観念して居給ふに彼蛇肩に這上り
口中に臨み舌を喰はんとする故是をお払ひ給へは傍なる
石に當つて即死せり一休頓て砂を穿ち是を埋め無生天無難陀
羅龍道菩提と十一字の妙文を笹の葉に書て埋めたる上に
置き洒水して又元の石に座禅し給ふに俄に風起り埋土の

上の笹を吹上けしか暫くにして彼の葉一休の膝の上に落ちけ
るを見給ひて一首の和歌あり
生たく七天に離れし救けれはのりそめし龍の苦患遁る
る
頓て堀中を穿ちて見給ふに彼の蛇はなく笹の葉に地蔵菩
薩と書されけり今は是迄なりとて彼笹の葉を二枚鉢囊
に納めて執業に赴き給ふ是より此川を化蛇川井を鏡の井
と号すとかや其後江州追分の地蔵の後小松帝の勅願にて荘
厳ありしに一休點眼ありしか彼の笹の葉二枚を地蔵堂へ
納め置き給ふ宝物として彼の堂にありと云てり
◯條山城　立子庄大一垣村にあり
當城は吉川駿河守元春天正八年南條伯耆守元續と鉾楯に
及ひ小鴨岩倉の城の向城として築き岡本大蔵田根兵部及

数を副て入置ける其後森脇越後守居住し岩倉を押たり
◯由良城　由良郷由良村にあり
當城八橋杉原播磨守盛重か持城にして其家臣木梨左馬助居住
せり天正十年毛利と上方和平の時木梨は尾高の城に帰り
当城は南條より割捨しと云へり
◯妙見山城　上郷にあり
当城は南條元續より人数を入置けり天正十年條山の森脇
越後守より秋里新左衛門三澤備後を遣し攻城しける南條
元續自身当城に来り突て出戦ひしか秋里并岩垣何某南條
か士近藤何某東平八と云者を討て遂に城を乗取りける南條
勢赤崎の東に出て傷きけるに吉川元春箆比津の城にありし
か森脇秋里を指向て南條勢を追崩す
◯秋里新左衛門戦務書述之事

近年私御奉行仕様之事
一鳥取羽柴殿御取懸之節七月十三日黒田官兵衛押所へ夜
討式部殿様被　仰付候処敵取合此方ゟ乱立之処私返申渡
合候而蒙疵之事委細小野太郎左衛門方被存候へ共過不申
候間大字玄蕃殿可有御存知事
一景盛可相果之時八橋郷上ヶ郷妙見山を受取可攻之旨森
脇越後守殿より三澤備後殿某両人に右之旨被　仰付馳向
候城にも不入申ゟ南條殿自身に被出候処に三澤殿は岸中
に逗留城より南條殿方に未之仕手近藤と申仁罷出候彼道
にて岩垣弥助私両人申合すゝめ速時に彼城に入受取申事
森脇其外可被存知事
一同月廿上粟原之城に行松殿被出候に付各方角之衆御殿
懸被成候へ共先奥意ゟ可及見旨加藤佐渡守其外我等に被

仰付ゟ候処菊地玄蕃頭人数被指出渡合私一人にて仕懸
追崩附入にいたして則彼城攻取申事其刻原田甚左衛門様被成
御上委細可有御存事
一明春赤崎之際にて八橋より南條衆罷出候処箆津之城山
より此方之衆罷出渡合鑓下にて太田と申者兄弟此方へ討
取ゟ被得利候事森脇大蔵殿何れも御番衆中可有御存知事
一高麗にて殿様被負御手之時二のたんの内馬の外に入唐
人之手負小屋眼なる外に居申候間是を討候大刀きれ不申
何角と仕候内唐人各返被下罷過候其仕合大森可有御存也
委細是又可有御尋候以上
秋里新左衛門
去月廿九日於岩井表合戦之時渡宮黒にて而討取新左衛門剰
良従致討死去候尤以神妙之至なり弥可抽忠勤之條如件

天文十年七月十二日

萬泉徳丸福田注進之状令披見候條々存分之通得其意此表

之事不可有油断其方儀各々相談堅固覚悟肝要候猶両三人

可申含候恐々謹言

七月五日　宗詮

秋里備前殿

秋里安藝入道殿

秋里左馬允殿

秋里孫左衛門殿

秋里源之丞殿

右宗通は因州の士秋里玄蕃今に所持す宗詮と云ふは但州の

屋形山名右衛門督祐豊入道なり五人の秋里は因州高草郡

秋里の一族と見へたり

槙城　安田郷篭津村にあり

槙氏代々居城す永正の頃かとよ藤井何某か家人岡邊七郎

当城に攻寄今云小飯の野に於て大に戦ひ討死す其亡霊残

りて往来の人を悩ます事暫く累年に及ふと云へり此野に

七つの塚あり是を首塚とも七ツ塚とも云ふ一つは岡邊七

郎か首塚残る六つは従卒の塚と云傳ふ小飯野は以西郷金谷

の村にあり大野に金屋野とも云ふ此野は槙藤井多年の戦場

にして干戈をちりはめし處なれは改飯の野と称すとかや東

西半道南北一里許り平々たる廣野なり野中に領主の立山

あり大なる松原にて南北一町余東西十四丁に足る又件の

藤井何某は今の信州上田の城主松平伊賀守忠氏の先祖な

るとや是本姓藤井氏なり長臣代々岡邊七郎と云ふ今は九良兵

衛と云へり

○念佛清水并若狭茶屋之事
飯野の西端中山外倉村の旧地境に一つの清水あり往復の
人立寄て念佛たに唱ふれは水底より白泱涌出るなり依て念
佛清水と称するなり若狭茶屋は念佛清水より一丁程北の
方也右へ岩井垣の城主筑波津豊後守敦忠亡妻の菩提の為に
千僧を供養す其臣有澤若狭此野に茶野を設け往復の僧尼
を接待せし旧地なり接待六百三十人に及て玄翁和尚を得
たる事は佛閣の巻に誌す又此所に鐘掛の松とて古木の松
あり奈和伯耆守長俊軍鐘を掛たる松と云へり

○岩井垣城　中山郷岩井垣村外にあり
筑波津豊後守敦忠数代相傳の家城なり敦忠は家臣有勢の士
にて退休寺の開檀なり事は佛閣の巻に誌す敦忠墓は筑波津

の竹梅にあり此近辺に悟正院長音寺と云あり昔時岩井垣
の城下隆盛の日は各甍を並へし高閣なり然るに彼城亡廃
の後兵大に炎滅して遂に退転し今は寺墟もなし只寺号を
村名に称するはかりなり

○細木原城　船上山の西端にあり
当城には行松入道か子行松何某楯籠る吉川元春の下知に
よりて加藤佐渡守秋里新左衛門等馳向て城を攻取行松は
降人と成りけるとなり
槻下　古布庄　岩野弾正坊居す
大杉　上の郷　有須左京進居す
山川　以西郷　下津豊後守居す
高木　同　真藤成併居す
湯坂　安田庄　有澤何某居す

赤坂　中山郷　　赤坂掃部居す

赤坂掃部は元弘の昔当城に居て後醍醐天皇船上山に臨幸
の時馳参し皇都へ供奉し大に忠務を盡せし者なり
当國の諺に物の延引する事を掃部大山詣にて埒か明かすと
云ふ戯言あり是は此掃部当郷に在城して大山権現を大に信
敬す然るに依て登山ヲ日々に志すと云へとも兎角して一生涯
ついに不詣して卒すとかや斯る故世俗諺となし物の延引
する事を俗に称するとなり
当郷に糟谷弥治郎重行入道元寛同弥太郎忠長と云ふ武士居住
し明徳二年近江の番場に於て戦死すと云ふ傳ふ小居城の邑里
未分明
参考太平記曰後醍醐天皇船上山に還幸の時佐々木隠岐守
清高二千余人にて大手東坂より押寄す其弟信濃守清房能
登守清秋一千余人にて搦手西坂より攻上る名和長年か一
族一命を捨て防戦する故寄手敗北して清高三十許り引退
て陣を張る長年下知して弟六郎行氏従弟小太郎信貞を大
将として七百余人清高か陣を夜討して攻破り此競に当國守
護職糟谷弥治郎入道元寛か中山の城に楯籠りたるを追落し
遂に小鴨并に忠長か館を攻落し其後國中に靡る者なしと
云ふ

伯耆民諺記巻之二十終

大尾

右伯耆民諺記は伯耆民談記の異本なり但し民諺記民談
記の何れか正本なるか不明なり　伯耆志には民諺記を引
用せる所多し　又白巻民談記と称する一本あり（別に写
写架蔵す）民諺記は民談記よりも之の白巻民談記に類
似する所多し　然れとも三本とも何れか一を正本とし他は写
写謄書等か漸次に記入又は省略せられて異本を生しゝ
ならむ　骨子とする所は大同小異なり
之の一本は倉吉町加茂神社吉田宮司の蔵本を借覧し
手写せるものなり
昭和二十三年十二月十七日夜筆写畢んぬ
霜軒　石田瑞之誌

右伯耆民諺記何人の作たるを知らす只其年代に
至ては享保より起草し宝暦の末に卒業せる者の
如し何者元和三年より百十年と云へる處あれは
享保十年の頃に当り天祥院殿云々といへるあり
天祥公の逝去は元文四年にしてまた和銅二年より
千五十四年の今日と云へる處あり推歩すれは寶
暦十二年に相當る其作者を識るに由なきを憾とす
へしまた原本に誤脱の多きこそてにをはの誤り数ふ
るに遑あらす文意解しかたきところあり魯魚の誤は心付くまゝ
改めしも行文を改むるは為すへからさる所なれは文のまゝに写し置き
他日正本を求め得て校正すへきの外他なき也
明治三十二年七月
椿蹊　田中景樹